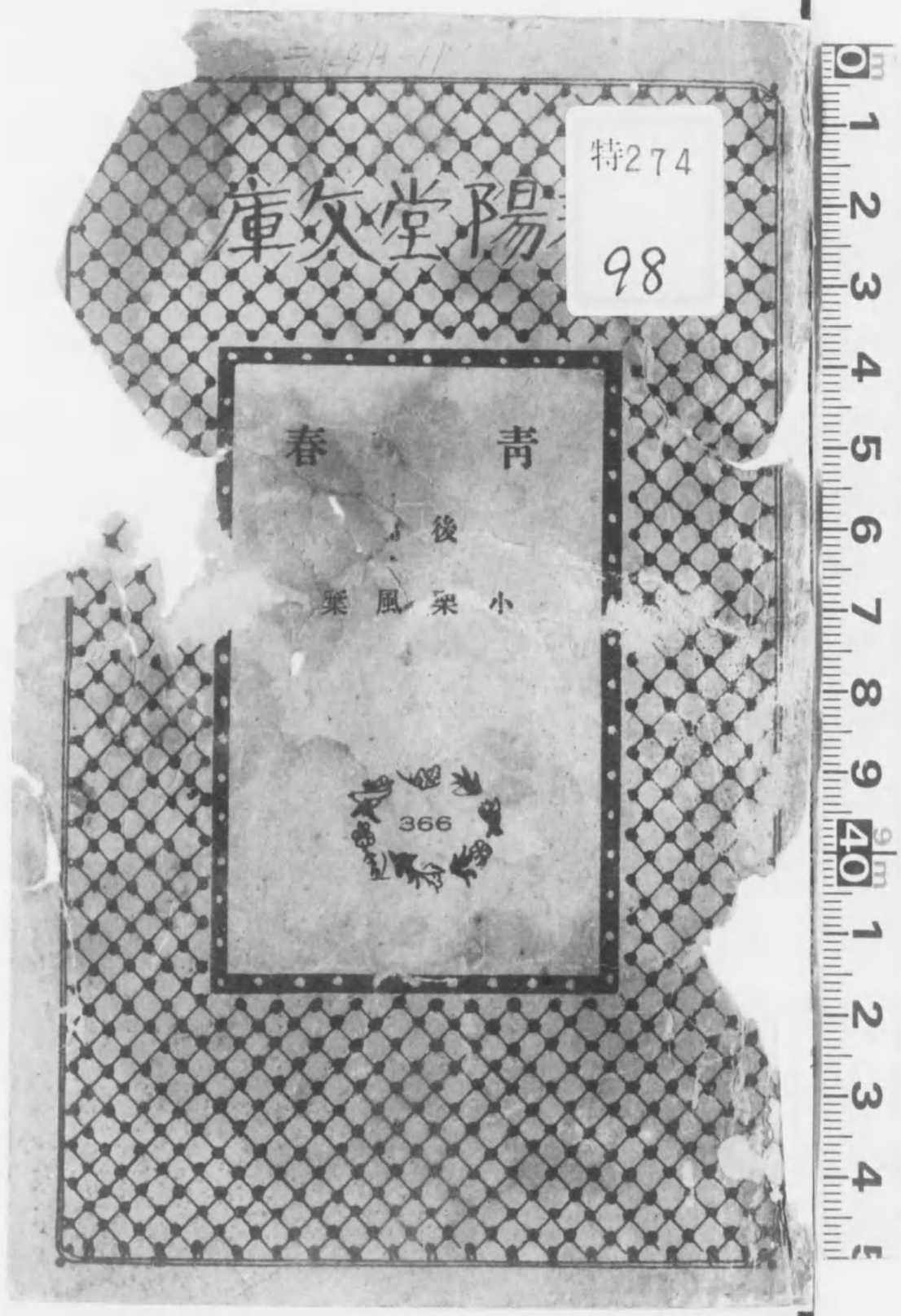

始

特274
98

春陽堂文庫

—366—

青春

後篇

小栗風葉

春陽堂文庫出版株式會社

青春

篇後

日次

夏之巻……三
秋之巻……一〇〇

青春 後篇

夏之巻（承前）

八

村は未だ朝靄の中に睡つて居る。信州境の山山遥かに紫立つて、村の東に籠り近く立擴つた石卷山の向ふに、紅氣を帶んだ横雲二條三條ミルク色の天が段々光を持つて來て、明るい那邊へ日出を迎へるやうに鳥が元氣好く啼いて行く。

朝露に濕り重つた藪蔭を背後に、瓦屋根の母屋と藁葺の納屋との陀間を出て、茄子や瓜や、豆なぞと一緒に、蒔捨の鷄頭だの、千日紅だのが咲き散ばつた圃の間を分けて、邸の周圍をチョロ〳〵流るゝ其所の小流に、欽哉は寢起の顏を洗つた。濡手拭を搾つて、今度は兩肌脱いで身内を小擦ると、皮膚は美しく桃色點して、萬遍ない血行に機能の働活々と、頭も輕く心も清々しい。肌を入れて、青田を來る曉の爽かな大氣を貪り吸つたが、未だ飽足らぬやうに、穿物を脱いで流を横切つて、向ふの田の畔へ渡つて行つた後へ、許嫁のお房が嗽水を茶碗に汲んで持つて來た。

「あれ、那樣方へお行きて……水は最う要りま

せんか？」

「いや貰はう。」と欽哉は向岸から答へた。

「ぢや、妻へ攜いときます。」

「攜いて行かないで、妻へ貰へないかね？　是から田圃の方を歩いて來やうと思ふんだから、這邊へ持つて來て貰ひたいな。」

「那邊へ？」お房は些つと迷つたが、默つて跣になつて、裾を片手に流へ下りる。

「冷たい事！」

「目が覺めて可いさ。」

寢起の腫ぼつたい目を極り惡げに、お房は伏目になつて渡つた。一間ばかりの淺い流で、練絹のやうな綺麗な水が白い足脛にサラ〳〵觸れて、足の裏の砂がムク〳〵湧上つて散る。水際に咲いた露滴い瑠璃色の月草に裾を濡らしながら、嗽の終るのを受取らうと爲ると、流に足を取られて思はず蹣跚めく所を、素早く男に手を取つて貰つて、お房は仄と赤くなる。

「危いよ、氣を付けないと。」

「はゝ。」と俯いて、寢亂髪の縺れた細い襟脚深く見せながら、足元を氣遣ひ〳〵流を渡つて元の岸へ歸ると、素足のまゝ小走りに馳せ去つた。

欽哉は笑を含んで見送つたが、チラ〳〵と水に映る紅の影に氣が付いて振仰ぐと、日は未だ石卷山の那方に隱れて見えぬが、横雲を緋に、薔薇色の山際から東の天は淡く朱鞘色に明け放れて、足元の露が染つて、稻も草も薄色の寶石を綴つたやう。出遲れた雀がハラ〳〵礫手の如く忙しく竹藪を飛び去つて、母屋の方に朝餉の煙が立初めた。

すると、汁の身でも摘みに來たらしく、藤豆

の籬湖の蔭に、チラと又娘の帶の色が見えたので、「房さん、僕の莫とマッチを持つて來てくれないか。」と欽哉は呼はつた。

「はい。」と優しい聲丈して、稍暫く經つと、お房は其れを持つて來た。曇のまゝ裾の濡れた白地の寢卷に、赤いメリンスの襟を爲て居る。

「御苦勞〳〵、最う一度入つて來てくれるかね？」

「あれ、今度は貴方取りにお來でませう。私又、足を取られると恐がいで。」

「ぢや、其所から放つて貰う。」

「放りますか？」

其れも有繋に躊躇して居たが、促されて、密と流越しに放ると、莫は足元に、マッチは男の手に、「巧いだらう？」

「放りますのが？」

「何有に、受方が巧いのだ？」

お房は和と片靨を見せながら、「最うあの、直き御飯になりますに……」

「あゝ、遠くへは行かない。」

で、マッチを擦つて卷莫を點けて、ポカ〳〵と紫色の煙を散らしながら、左の肩の稍揚つた、脹の細い、端折の似付かぬ其の背後姿を、流の這邊に立つて見送つて居たお房は、何とは無しに獨り微笑まれる顏を俯けて、髱の後毛を撫揚げると、思出したやうに急いで母屋の方へ行つた。

天は何時かコバルト騷つた明るい色になつて野面の靄も次第に薄れ行くと、藪や森が那邊這邊に浮出て、遠く續いた田や畠が青み度つた。仄々と朝煙の立登つた村の方では、桔梗の音や小兒の聲や、犬や鷄や、皆最う覺めて、キラ

キラと日が登ると、青田に風が添つて、サラ〳〵と濡葉の身顫する共摺の音と一緒に、稻の香がパッと匂つて來る。欽哉は膝の邊までビッショリ露に濡れて、素足に柔かな夏草を踏み歩いて居たが、時々立留つて、數疊の續いた、桔槔の緩く上り下り爲て居る村の方を見返つては、幾度も、

「平和だなあ！」と獨言つのであつた。

當も無く小迷ひ歩いて居る内に、村の外れの鬱川堤へ出て了つた。爰からは石卷山の峻峭な姿が眞面に麓の生根まで見えて、其の少し北寄に、大人しい薄藍の本宮山が朝日を浴びてスッキリ聳つて居る。堤の向ふは低く鬱川の流で、川面は濃い靄の何時までも打煙つた底から、チラ〳〵日光に燈の影が龍の鱗を見るやうに時折光つて、鬱[illegible]鮎も未だ通らぬ。

堤の凖へに月見草の黄色な花が犇と咲き競つて其の裾の白い砂地になつた汀に一人、此の朝端から釣を爲て居る男がある。

欽哉は、平和な暢りした心持で誰でも可懷しい。堤の上から氣輕に聲懸けて、「何か釣れるね？」

「魚づら。」

「魚には違無いが……」と思はず微笑して、「魚は何だね？　鮎かね？」

「鮎の事が、石班魚も掛らんだ。」

然う云ふ男の足元には、鼈甲色の脊をした六七寸もあらうと思ふのが、小桶の中に押合つて居るので、それを、貰はれるかとでも思ふのかそれとも話を爲れるのが煩いのか――欽哉は艶然として堤を下りる。

「百姓め！」と忌々しげに呟いて見たが、今迄

の暢りした心持も最う失せて了つて、ムシャクシャしながら歸縣けた行手に、お房の姿。

片手に下駄を持つて、欽哉の迎に來たものらしい。紺絽の單衣に着更へて、目立たぬほどに赤氣の交つたメリンスの帶、髪も撫付けて、震起の姿に比ぶればグッと身綺麗になつたが、顔は曇のやうに沉々しくない。

「何うで方々捜しましたよ。」と努めて和りしたが、欽哉は今のムシャクシャが未だ解けぬので、無愛相に、「故々迎になぞ來なくても可いのに。」

「それでも、阿母さんが迎に行けとお言ひるものだで……最う七時餘程過ぎとりますよ、貴方もお腹がお空きたでせう？」

「僕の事は何うでも、皆が空いたら、先濟したら可いぢやないか？充らない事に馬鹿固いよ。」

「え、阿母さんは、待つとつても貴方がお歸りんで、先濟いてお居でました。」

「房さんは？」

「私の事は……」とお房は伏目になる。

欽哉は默つて歩き出した。涼しい聲で蟲蟬の鳴き出した土堤下の薄の小道を出放れると、丁度畔の水口をチョロ〳〵チョロ〳〵水田の水が落ちて居るので、お房は背後から、「足をお洗ひたら何うですの？　下駄を持つて來ましたに。」

「家までまあ是で行かう、面倒だから。」

「でも、跣ちやお痛いでせう？」

「然うでも無い。」と言つて、欽哉は振返ると、何を思出したか、「房さんは今年二十一だつたかね？」

「えゝ？」附かぬ事を聞かれて、お房は些つと迷付いたが、「最う私、二になります……」と赤い顔を爲て小聲に答へる。

欽哉は頷いて、「然うだ、繁が二十一だつた」と心に思ひながら、凝と娘の姿を眺めたが、手結の銀杏返に、母の挿古しらしい油の染みた丸京形の櫛か、何だか目に付いて厭だつた――櫛の事なぞ自分には分らぬが――目馴れた束髪にリボンが胸に浮ぶ。

「最う然し、二十二ぢや結婚しても早くない。」と獨言のやうに言ふ。

お房は默つて居る。

「僕は、最う房さんは結婚した事だと思つて居た、何しろ二年も經つたんだから。」

「私は又、貴方は最うお歸りんさうなと思つとりました……」と言つたお房の聲は顫へて、單瞼の張のある目が潤んだ。

「歸らないと？」欽哉は厭な顏を爲たが、「然うも行かないさな、……何うにしろ、關の姓を左に右く名乘つてる以上は……ぢや、阿母さんも彌張然う思つて居たんだらう？」

「何うだか阿母さんの事は知りませんけど……それでも、何時だか貴方の兄さんが津島から（欽哉の生地）お見えた時に、阿母さんは、誰も若い時にや一遍は有る事で爲方が無いが、物の分らん貴方ぢや無いで、其内にや目の覺める時が來うちつて……」

「阿母さんが行つてたのだね？　然うしたら、兄は何と言つたね？」

「兄さんは……別に何とも……」

「何とも言はない事はあるまい、何うせ、馬鹿だとか何だとか惡口を並べたんだらう？」

「え、お言ひるにはお言ひましたけど、那樣惡口は……」と口籠つて、「兄さんは、あの、男のお子が多勢お有りるさうですね？」

「男は慥か二人だつたと思ふが……惡口で無く何を兄は言つてたね？」

「何ちつて……」

「隱さなくても可いぢや無いか？」と煽れる。

「隱すぢや御座んせんが……貴方が又、氣持惡くお爲ると惡いで……」

「那麼徒の言ふ事を氣に懸けたり爲るものか。甚麼事を言つたね？」

「甚麼事ちつて……唯あの、欲を知らんで貴方にや見込が無い……」

「見込が無い？　欲を知らないで？」欽哉は笑出した、「ははゝ、兄の言ひさうな事だな。」

「……惣事見込の無い貴方を待つとるよりも、私を嫁に出いたら何うだ、今なら甚麼好い口でも世話して上げえに、然うお爲ませう、然うした方が幸福だとか何だとか……然う言つちや何だけど、貴方の兄さんでも、些つとも貴方にや深切がお有りんと見えますね？」

「然うさ、腹は違ふし、小兒の時から一緒では無いし、僕も亦兄のやうに思はないからお互さ。だが、僕に見込が無いとしたら、仍更房さんを嫁に出す譯に行かないぢや無いか。一人限の房さんを出して了つて、家の後は何う爲やうと云ふのだらう？」

「ですで、阿母さんのお言ひるには、兄さんは自分の子でも貰はせいちふ肚で、それで那樣事を……」

「あゝ、それでか？　成程、兄貴の事なら無論其所等に違無い！」と言つたが、欽哉の顏色は變つた、「兄貴は、だが那樣事を言つて、僕が若し津島へ還つたら迷付かないが可い！父が死ぬ時僕の分に分けてくれた遺産を、兄貴は默つて

勝手に爲て居るんだが、僕が愈よ這箇を出て還るとなつたら、厭でも其の處理から附けなきや成らんだらう！　何年間になるか、利子まで丁と成算して僕に渡さなけりや成るまい！　僕は那樣遺産なぞで彼是言ふのも厭だから、今日まで無論噫氣にも出した事は無い。今度だつて、兄の方で少し都合して貰ひたいと思つても、那樣遺産の事があるから、却て僕は躊躇して居るくらゐぢや無いか！　それだのに……可し！兄貴が然ういふ了簡なら、何も最う遠慮する事は無い、早速出掛けて行つて、正當の權利で以て受取る物を受取つてやる！」

其の險脈が餘りに激しいので、お房は目を圓くして男の顏を見詰める。

欽哉は手に觸る稻葉を引毫りながら、獵りヴッブと慍つて居るので、實に何うも……慾に縣けると親同胞の見境が無いのだから呆れる！　猶太人と云ひたいが、猶太人以上だ！」

「だけど、唯慾が深い丈で、其れを平氣でお言ひる所を見ると、肚は存外惡いお人でも無からあと思ひますが……」

と慰める意りでお房の言ふのを、欽哉は究付けるやうに、

「何故平氣で言ふと肚が惡くないのだ？　平氣で言ふ丈仍不埒ぢや無いか？　慾が深いにも程度がある！　兄のやうなのは最う罪惡だ！」

可哀さうにお房は悄返つて了ふ。

「だが、阿母さんは其れを聞いて何と言つて居たね？」

「阿母さんは、始めから兄さんの肚は知つてお居でますし、那樣事を本氣で聞かあとも思ひんものだで、能うまあ考へて見ませうとお言ひた

限、笑つてお居でました。」

「ぢや、阿母さんは一體、僕を何う思つて居るだらう？」

「何うと云つて……？」

「第一、今度僕が歸つて來た事を何と思つてお居でだらう？　歸つてから最う可也になるが、何うして歸つたとも、何うして居たとも、全き一り那樣事は問きも爲ないが――問かれないのに僕の方から言出すのも變で默つて居るのだが――阿母さんは、僕が何ういふ意りで歸つたと思つてるんだらう？」

「阿母さ、んにも、何でそれが分りますものか。是迄でも然うだけど、私達ばかりで決めとつても、貴方は又貴方で、私達と違つて何ういふ意りがお有りるか分りませんもの。」と言つたが、お房には精一杯の是が怨言なので、涙含んだ目に恐々男を見擧げて、曩も其れを阿母さんが私にお言ひた事で御座んすが……ねえ、是から何うお爲る意りか、何うぞ、貴方の意りを聞かせてお下れませう！」

欽哉は思はず立留つて其顏を眺めた。頷いて何か言出さうと爲たが、照付ける朝日を避けて、綿や甘藷畠の間作に丈の高い唐蜀黍の植つた、畦の日蔭へ道を變へて、而して、自分の今度歸省した本意を歩き〳〵お房に語つた。

何う爲る意りかと云つて、外に爲やうも意りも無い、今年遣り損つた大學を最う一年遣直して、來年こそは是非學士の肩書を土產に爲る意りであるが、其れには是迄のやうな無理な遣方では到底滿足な成績は得られぬ。自分で稼いで其傍らに勉强すると云ふ事は、思つたよりも困難で、現に今度の失敗が好い訓であつて、以前

の學資に不足無く勉強させて貰つた有難さも、此の二年間の苦しさで沁々覺つた。

で、今度歸つた自分の考では、何しろ二年間も便を爲ないのであるから、阿母さんも房さんも無論最う愛相を盡して見切つて居やう。それだのに、何時迄も籍を置いたまま、平氣で這箇の姓を冒して居るのも厚かましい、第一房さんの身の定りにも邪魔になるので、其の片も付け、自分は家も何も無い元の體になつて――然うなれば兄も亦、曩談した父の遺産の一部を渡さずにも居られまいから、其れを學資に最う一年勉強する意りだとの事。

始終を聞いて、お房はハラ〳〵と涙を零した。

「ぢや、彌張貴方は……私達を捨てる意りでお有りさすねえ！」

「那樣事は無い、那樣僕は意りぢや無い。」と欽哉は稍面食つて言つたが、「捨てる譯は決して無い！　阿母さんが女の手一つで、是迄僕を敎育して下すつたのは非常な御恩で、僕も是非其の恩を返したいと思ふのだ。けれど、其れには彌張遣懸けた大學を卒業して學士にでも成らなければ、外に何うも、僕には恩返しの爲やうが無いのだから……」

「けど、貴方は家を出てお了ひるのぢや御座んせんか？」

「家を出て了ふと何うだね？　家を出たつて恩返しは幾らでも出來る。」

「出來るか知りませんが……然ういふ恩返しは阿母さんは……」とお房は目を掩つた。

欽哉は頭を掉つて、其儘辭も無くて歩いて居たが、「家を出ると云ふと、何か薄情のやうに思ふのか知らないが、僕の本意は決して然うぢや

無いよ。那して二年も寄付かずに居て、今度ノコ〳〵歸つて來るさへ面目無いのに、此上又家の世話になると云ふ事は如何にも心苦しい！心苦しいばかりで無く、此儘家に居た日には――是迄僕に注込んで貰つた金は何位か知らないが、其れを返す働は今の僕の體には無論無いし、自然自分の思ふやうに恩返しも出來ない理窟だ。それよりも一時家を出て、最う一年勉强して、左に右く學士にもなつた上で……」

と言半して口を喋む。

然う決めて居るものなら、曩兄が自分の子を關の家へ入れやうと爲た話を聞いて、何故那麼に息卷いたか、其れを思つて、欽哉は獨り自分で赤くなつた。

「最う一年ぐらゐの事に、那樣、家をお出んでも、何とか外に！……勉强お爲れさうに思ひますにね？」

「一年ぐらゐと云ふが、學資も無しに、那麼是迄のやうな眞似を爲て居て、到底も滿足な卒業が出來るものぢや無い。運好く卒業出來た所で卒業の成績が好くなかつたら、世中へ出るにたつて非常に損なんだから……」

「ぢや、貴方」とお房は思入つたやうに立留つて言つた。

「阿母さんに寧そ、其譯を談いて見て、最う一年、家から出いてお貰ひたら何うですの？」

「學資を？」と欽哉も足を留めたが、「那樣事が出來るものか。僕の口から今更那樣事が言はれた義理でも無いし、阿母さんだつて肯きさうな筈が無いぢやないか！」

「……」

「だが房さんは、阿母さんが肯くと思ふのか

ね？」

「でも……談いて見ん事にや分りませんもの……」

「ぢや、談して見たら、阿母さんが又何うと云ふやうな當でも、房さんに有るのかね？」と熱心に問はれて見ると、お房も慥かな答は出來かねて俛れて了ふ。

大方那樣事だらうと思つたと云つたやうに、欽哉は苦笑を爲て、少し行くと、「明日僕は、津島へ行つて來やうと思ふが、房さんから些つと阿母さんに然う言つて呉れないか？」

「え、明日お行きますか？」と穩かならぬお房の面色を、訝しさうに欽哉は、「何故？　明日ぢや可けない？」

「いえ、那樣――貴方がお行きるのに、私が可いの惡いのと言ふ筈は御座んせんが……」と又涙含んで、「貴方は、最う其れぢや、何うでも津島の方へ還つてお了ひる意りで……？」

欽哉はチラと娘を振返つて見たが、其儘何とも答へずに目を逸らして了ふ。

暫くしてから、「明日は然し、其れで行くのぢや無いから……其事は未だまあ阿母さんの耳には入れずに置かう。明日は外に少し金の都合に行くので、這麼に僕も上京が延々になつて、東京の方の下宿や何かの拂が氣になるから、其丈でも兄に都合させて早く送らうと思つて……些いと一週間くらゐの意りで歸つたのが、何しろ最う一月近くになるのだからな。」と獨言ちて何やら偶と溜息を漏らしたが、目を遠くへ遣ると、「あゝ、稻も能く伸びたな、僕が歸つた時には漸と未だ植付けたばかりだつたに。」

それから、圖鄕の途中に大森で繁と落合つて翌日西と東へ別々に汽車に乘別れる時、「待つてて よ！」と繰返し言はれたのを欽哉は思出した。

が又、寂しい大人しやかな人形立の顏を俯けて後から物思しげに附いて來るお房の、其の賴り無い身の上も考へれば、「あゝ、是も可哀さうだ！」と熟々思つた。

で、何時か家の脊戸口へ歸り着いて、其所から泥足を濯ぎに井戸端へ廻ると、井戸の傍の眩げに日射を浴びた合歡の木の梢に、最うジイジイと油蟬の聲――今日も亦暑さうである。

九

鮮かな虹の影も段々薄れて消えたと思ふと、石卷山の天にチロリ明星が輝き初めて、靜かな夕靄が忍びやかに野面を度つて來る。耶の前の田圃續きの道端で、コツ〳〵餌を拾つて居た鷄の群は、知らぬ間に暗くなつて迷々して居る所へ、小走りに出て來たお房が、「可哀さうに太吉が忘れとるものだで。」と獨言ちながら、耶の中へ追入れて遣る。

「さあ、太吉や、那邊へ入つて行つたにの。」

すると、下男らしい男の聲が聞えて、木槿垣の向ふの薄暗い庭で、ト、、と鷄を追廻す氣勢。

田舍の慣で何時までも明を點けずに、最う眞暗な家の中の蚊を避けて、お房は其儘門口の小流に架つた細い土橋の上に、淡く入日の痕の殘つた西の空を眺て人待顏に佇んだ。家々の撥釣瓶の音に交つて、小兒の聲や牛の聲が一頻り村に漂つたが、晝の熱りの未だ冷め切らぬ地上に涼しい夕の天は露けく降つて、邊は深祕めいた色の漸く濃くなり勝る中に、土の香や草の匂が充て滿ちて居る。

小山のやうに苅取つた草を一荷づつ擔つて、菅子らしい二人連の女が、仄暗い田圃道をヨチヨチ歸つて來たが、「好い晩でお有りますのん。」とお房に聲懸けて通り過ぎる。其れと擦違ひに黑い人影が向ふから現れた。

「あ、兄さんでお有りるか知らん？」とお房は瞳を凝らして待つと、其れは郵便脚夫だつたので。

「關欽哉さんちふは？」

「は、這箇で御座んす。」と封書を受取つて、脚夫の去つた後で、西明に上書を返して見たが、最う暗くて讀めなかつた。

「今迄お歸りん所を見ると……」と呟いたお房は、旋て木槿の花の仄白く暮れ殘つた垣の内へ入つて行くと、入違ひに蝙蝠がヒラ〳〵翔出して、暫く其の周圍を飛廻つて見えなくなる。

物皆が生返る如き夏の此の夕を、優しい星の光が嬉しさうにワク〳〵顫へながら數を增して葉末に上つた青田の露に弱り笑しげな影を宿して、平和な村の夜を祝福するやうに蛙が啼き競ふ。

螢來い、螢來い、那邊の水は甘いに、
這邊の水は旨いに。

と田圃の向ふで小兒等の呼交す聲。

丁度此時、欽哉は豐川の向岸から渡舟に乘つたのであつた。暗い川面をチヨロ〳〵舟底に叩かせて豐の船頭と唯二人話も無く不意にギイと云ふ櫂の音を星明に透して見ると、豐橋通ひの川船が明も無しに船首を飜して行くのである。少し行つて、又ギイと云ふ音と一緒に、那箇の船頭の銜煙管の莫火がパッと赤く見えて、其れも見る〳〵遠かり行く下流の那方には、遙かに

豐橋の町の電燈の影が青白く空に映つて、祇園祭の稽古囃子が流を渡つて氣遠く聞えて來る。

此の音を聞くと、欽哉は偶と小兒の頃を思出した。町の祇園祭には毎年養母に連れられて行つたもので、祭が近くなると、夕暮方から毎も堤へ出て、川上の那の稽古囃子を聞いては、お房と二人が小い胸を甚麼に躍かしたらう！　最う幾つ寢ると連れて行つて貰へると、其れのみ言暮らして樂んだもので、「あゝ、那頃の感情を忘れて了つちや不實だ！」と思つた。

ザリ〳〵と舟底の當つたのに氣が付くと、舟は最う岸に着いたのである。渡錢を拂つて、蝙蝠傘を取つて、汀の砂地へ下り立つと、舟は直ぐ舳先を突いて悄音靜かに歸つて行く。と、夜目にも白く月見草の一面に咲いた露の中を分けて、堤に上つた欽哉は、降るやうな大空の星の下に、蛙の聲の滿ち度つた足元の大村を見遣つて、我にも無く仄やり佇んで了つた。が、風が持て來る川下の遠囃子に聞耳立てると、急足に堤を向ふへ下りたのである。

家では雨戸を細目に蚊燻を爲ながら、庭の緣臺へ出て、爰でも囃子の遠音を聞いて祇園祭の噂を爲て居る所へ、欽哉が歸つて來たので、「あれ！　お歸りましたか。」とお房は驚いて立迎へる。早速下男に行水の湯を取らせて、自分は飯の支度を爲る。

欽哉はサッと汗を流して揚ると、お房の出してくれた糊附の浴衣に着更へて、折から支度の出來た膳に向ふ。緣先に座を敷いて、戸はカラリと開放つたが、今迄燻し出してあつたので蚊も來ぬ。其代り青田を渡つて來る涼風に、折々燈火が瞬いては消えさうになるのを、お房は片

手の團扇で掩ひながら、「今日も私、遲いからお歸りんと思つとりました。」

「早く歸らうと思つても、何時までも話が付かないものだから。」と欽哉は箸を取擧げて、「時に阿母さんは？」

「今日は晩方から、謡中の寄合へお行きまして。」

「お留守か。」と頷いて、膝を崩して、「いや、今度と云ふ今度は、僕も熟々兄に愛相が盡きたよ！　慾が深いと云つても、全で那れぢや、道理も何も棄てゝ了つてるのだから驚く。那麼とは思はなかつたが……那麼無法な兄を少しでも當に爲て居たのは、全く迂濶だつた！」

「ぢや、故々貴方がお行きたに？」

「何にもならずさ！」と投出すやうに言ふ。

暫くしてから、「兄さんの方が其れぢや、貴方もお困りるで空う？」

「困るけれど、何うも爲方が無い。」

「爲方が無いとお言ひて……でも、東京の方の下宿や何やか、何時までも然う放つといたらお惡いでせう？」

「下宿や何か？」欽哉は些つと解せぬらしかつたが、「ああ然うさ、其れも困る。全く、兄なんか當に爲たのは迂濶極まつてた？」と忌々しげに繰返した。

其儘默つて考込んで了つた顏を、お房は心配さうに打戍つて居たが、「ねえ貴方、兄さんの方やなんか最う當にお爲ずに、何うでせう？差當りお困りる丈でも、阿母さんに私から相談して見たら。」

「然うさ、兄なんぞ到底も最う相談對手に成らないと覺つたから、僕も……」と欽哉は顏を振

擧げて獨言のやうに言ふ、「だが、まあ最う少し阿母さんに言出すのは待たう、未だ些と言出すには早いから——何うせ學校も九月にならなきや始まらないのだから。それよりも、何は……佐藤は家へ寄らなかつたかね？」

「佐藤の福さん？　え、貴方が津島へお立ちた翌日だつたか。」と答へたお房は、自分の言つた事を欽哉が取違へて居るらしいので、其れも氣に懸るが……「東京へお行きる途中だとか云つて、一晩お泊りて、翌朝急いでお立ちました。一日の事で、貴方と行違ひになつて殘念がつてお居でましたよ。」

「何か阿母さんに賴みは爲なかつたかね？」

「え、何だか新規に始めるちうて、金の相談でもお爲たやうで御座んしたが……」

「阿母さんは無論對手には爲まいね。實は其の前の日に津島へ來て、兄にも斷られたんださうだ。」

「へえ、然うでしたか。何でも是迄未だ醫者が爲んやうな、新規な事をお爲るだとか？」

「新規でも無からうが、佐藤も苦し紛れに那樣事を思立つのさ。花柳病や婦人病の通信治療とか云ふのださうで、究り新聞の廣告を利用して何か怪しげな事でも爲るのだらう。」

「へえ、那樣事を？」と言つたが、お房には能く分らなかつたやう。

「あ、名札が御座んした——貴方が東京へお來でたら、一遍お寄りて貰ひたいちつて——持つて來ますか？」

「何有、後で可い。」と箸を擱いて、「可哀さうに那男も段々墮落するばかりさなあ！」と欽哉は嘆じた。

話は途絶えて、裏田圃を行く村の若い者の驚節が聞える。短夜の睡氣を誘ふやうな蛙の聲々と、門の流れの囁が耳に付いて、折々風の工合で例の稽子囃子が遠くなつたり、近くなつたり爲る。其の音音に引かされて空とりと、一緒に心を遠く近く漂はせて居た欽哉は、偶とお房の方を見向いて何やら談懸けやうと爲たが、お房も同じやうに耳を澄して聞いて居る樣子。強ち夜目ばかりで無く、行水の後の身飭も薄り包はして居るらしく、毎もより色白の澤かな頰に微かに靨が動く。

「何を仄やりして居るの？」と優しく訊ねるとお房も空とりした顏を振向けて、「祇園祭が最う來ますね？」

「然う。一緒に能く行つたつけな、阿母さんに連れられて。」

「貴方は覺えてお居でますの？」

「覺えて居るとも。」

「私、那頃を思出すと、何だか小兒の時が可懷しいやうで……」と伏目になる。

「何うだね、今年は久振で、阿母さんと三人が出懸けやうぢや無いか？」

「え？」と意外らしげにお房は面を擧げたが、男の眼色を見ると、合點が行つたやうに和りした。

旋て、膳を下げて洗物に立つ時、欽哉は思出して、佐藤の住所を書いた其の名刺を持つて來ささする。

と、「今日晩方に來たのを、つい私、藏つといて忘れとりましたが……」と斷つて、お房は名刺と一緒に郵書を渡した。

「東京、京橋か。」と先づ佐藤の名刺を見て擱いて、それから、横長の小形な封筒に入つた其の郵書の上書を讀むと、欽哉は心持赤くなつた。差出名は唯苗字丈で——小野拜。

「お、貴方小野さん！」

呼留められて、伸は二三間行つてから漸と留つたが、柁を突かせて、白の透幌を揚げると、急いで蹴込を下りたのは繁である。

「まあ！　關さん、何時貴方出て被來つて？」

「昨日遲く。」と欽哉は大學の徽章の附いた麥藁帽子を脫いで、「新橋から直ぐ端書を出しましたが、未だ屆きませんか？」

「え、未だ拜見しませんの。突然ですわね。」

「急に思立つて——貴方の那麼手紙が來たものだから。」と言ふ男の其の鋭い目を避けて、繁は

+

密と横を向きながら、獨言のやうに、「……速うにそれは、出て被居る筈だけれど……最うあの一月にもお成んなさるんだもの……」

欽哉は默つて其顏を眺めた。暫く見ぬ間に恐しく繁は面窶が爲て、色澤も惡い。薄阿納戸の縮緬の透綾上布の帷子を着て、帶は大森の時にも繫めて居た見覺ある牡丹色の紋博多の單、片手に絹ハンケチで包んだ藥罐らしいものを持つて居る。

「體は未だ快けないんですか？」

「え、何ですか何うも……」と目映しさうに見擧げる。

「是から醫者へ行くんですね？」

「は……ですが、午までに行けば可いんですから……」と罐の包を持更へて、「貴方は何ら へ？」

「何らつて、無論貴方の所へ來たんだけれど…

……」と欽哉は手に持つた帽子を澁々頭に戴せながら、「何なら、出直して午後來ませうか？」

「でも……」と繁は少し考へて、「貴方宿は？本郷の彌張那裏ですか？」

「いや、未だ來たばかりで下宿へは行きません昨夜京橋の知つた家に泊つて。」

「では、今京橋から被來つたんですか？　まあ大變だわ！　此の暑いのに何うして其れが出直せるものですか。」と決然言つて、「左に右く私、俥を返して了ひますから。」

で、繁は俥の上の蝙蝠傘を取つて、車夫に其譯を言つて歸らせた。俥は帳場のらしい。

「醫者は何處です？」と欽哉が問く。

是を何う行つた所の何町と答へて、「學校の彌張校醫ですの。」

頷いて、「其邊まで行つたら、途中に何所か休む所が有るでせう。」

「え、何所か有りませう。」と繁は白の綾絹の傘をパッと開いて、「毎日暑いわね。貴方はそれでも、御壯健で結構ね。」

「壯健とも言へないが、僕は然し、眞夏の蒸としたのが好だから――暑いギラ〳〵した炎天を見ると、何だか頭を鋭く刺戟されるやうで好い氣持です。」と欽哉は歩き出した。

「だが、繁さんは然う云ふ體ぢや暑さが徹へるでせう。手紙には唯些つとした胃病のやうに書いてあつたが、醫者に懸るくらゐでは餘程惡いのですね？」

「え、醫者には尤も、此間始めて懸つたのですが、何ですか、胃病ばかしでも無いやうで、醫者も最う一度能く診察して見ねば分らないつて言ひまして……今日行つたら何とか分るでせう

よ」

「胃病くらゐに、然う念を入れなくとも分りさうなものだが……」と不審さう。

「私、脚氣ぢや無いかと思ふんですの。此の二三日、脚なんか少し水氣が有るやうですから。」

「脚氣は可けないな！　御心と云ふ事があるから氣を付けないと危險だ。是迄にも覺が有るんですか？」

「いゝえ、有りませんの。今年始めて。」

「始めて。」と欽哉は首を拈つた。

拈つて見た所が、固より素人勘で分る筈は無い。然し脚氣に爲た所で、未だ動悸なぞ覺えぬし、恁うして歩いて居ても何とも無いのであるから、那樣御心の、危險のと懸念するほどの大した容體でもあるまいと繁は言つて、それよりも、此の大道の照返す暑さの方が目が眩りさうだから、何處か木蔭でもあつたら早く休みたいとの事。で、町の直ぐ背後に涼しさうな見曠しの高臺が見えるから、欽哉は左も右くも那邊へと云ふので、横町を拔けて、細い崖のやうな小道を登つたが、繁には大分苦しさうだつた。

高臺の上は廣いパッとした空地で、空地の向ふの見るから暑さうな赤煉瓦の塀際に、俥が一臺柁を下して居る外には、崖に臨んだ松の木の蔭に――二株限だが、何らも周圍六疊敷餘りも濃い蔭を作つて居る――綠臺を置いて、ラムネと心太の入つた小桶を竝べて、傾樓の爺さんが一人居睡を爲て居る。爺さんの傍には、古綿のやうな毛並の煤ぼけた白犬が殊勝げに番を爲て居るのみで、二人には丁度誂向の休場所であるから、其の一方の少し離れた向ふの木蔭へ綠臺を借りて、生溫いラムネを申譯に取りは取つ

たが、心太の小皿の外にはコップも茶碗も無く罎から直かに口移しに吹んでくれと言はれて、欽哉も呆れて手を附けなかつた。爺さんは好い店番が出來た氣か何かで、元の木蔭へ歸つて安心して又居睡を續ける。

「ちよいと、リップ・フワン・キルクルの爺さん見たいね。」と小聲に繁が囁くと、欽哉も笑つて、「丁度ヲルフ（犬の名）も居るから妙でさ。」と卷莫を取出す。

柑には音も無いが、有繁に高臺で、戰々と涼しい風が吹くとも無く動いて居る。欽哉は莫を點けやうと爲てマッチを擦つたが、幾度びも消されて、漸う吹附け、マジ〳〵と一本燻らして了つて、さて吸殼を据てると言つた。「繁さん、一體貴方の那の手紙は何ういふ意味です？」

問はれて、繁はハッと前へ踏込んで了つた。曇から何れ其れを言出されるものとは覺悟を爲て居たが……

「實は、鄕里の方も未だ片が付かないのだけれど、何うも那の手紙を見ると不安心で成らないから、左に右く會つて、貴方に能く其の意味を問かうと思つて、それで這麼に突然出て來たんですよ。ね、那の手紙は究り何ういふ貴方の肚なんです？」

「何ういふ肚つて言ひまして……」と繁は僅かに面を擧げて、「那丈の事ですわ——何う爲たら可いか、貴方に御相談爲たので……」

「御相談？　那れが相談でせうか？　結婚を強ひられるから其れを何う爲やうと云ふ意味は、一言も手紙には無いぢや有りませんか。唯情無いとか、自分の意志の弱い事を始めて知つたとか、自分で自分が怨しいとか……繁さん、貴方は其實、結婚を最う承知して了つたのぢや無いんですか？」

「まあ！　何ぼ何でも、那樣私……」

「でも、那の手紙で見ると何だか那樣やうにも取れるから……僕は道々汽車の中でも繰返して讀んで見て、然う思つたですよ……事に由つたら是は最う結婚の話も決つたので、それには怨みたくても僕が怨めないやうに、何所までも同情させながら思切らさうと云ふ、繁さんの利口な策で、故ら這麼苦痛らしい辭を竝べて同情の押賣するんだと……」

「關さん！」と繁は遮つて、「それは餘りよ！餘り其れは貴方の邪推が過ぎるわ。苦痛を押賣するつて……私の苦痛が甚麼だか、貴方は些とも其れぢや察して下さらないんだわ！」と聲を顫はせて、白麻のハンケチを目へ當てた。

欽哉は肩を聳して、「察したくも察しやうが無いでせう。貴方の苦痛と云ふのは、僕には一向無意味に思はれますものな。」

「何故無意味ですの！」と探赤めた目で見詰める。

「無意味で無ければ、貴方は、ぢや好に苦痛を求めて居るのだ！　元々獨身主義で、結婚は貴方の素志ぢや無いのだから、其の素志を通して行けば何でも無いのに、それを今になつて枉げやうと爲るから、苦痛も感ずるのぢや有りませんか。」

「貴方は能く事情を御存じないから……私の身になつて見れば色々又、貴方の被仰るやうな、那樣無造作な譯に行かない事情があるんですもの。」

「甚麼事情でせう？　學校の舍監の言ふ事だか

らと云つて、何も學校以外の、那樣事まで貴方が服從せねば成らない義務も無いでせう。手紙では能く其邊の事情も分らないが、一體二宮とか四宮とか云ふ其の舍監は、貴方に甚麼權利があつて結婚なんか强ひるんです？」

「深切なんですわ。私の身を思つて、全く深切で勸めるんですから、私も仍と困るのよ。」

「深切か知らないが、第一女學校の教師とか舍監とか云ふものが、自分の所の生徒に、那樣結婚の仲人染みた事を爲るのが抑も不都合だのに況て其れを强ひると云ふ法は無い！　貴方も然うぢや有りませんか、三年か五年月謝を拂つて教へて貰つた丈で、何も親同胞と云ふでは無し那樣連中から結婚問題まで强制される義務は有りますまい、厭だと言つて斷つて了へば其丈のものだ。」

「いえ、其丈ではありません、全く親や同胞の何も、あの……」と繁は急いで口を挾んだ。

「二宮先生の事丈なら、何うにでも又口實を拵て斷れば斷れない事も無いんですが、實は——手紙には詳しい事も書かなかつたけれど——先生の事よりか、實は國から通し最う勸めて來て居るので。私も遁られる丈は話を遁げて居て、貴方にも一々那樣事は申上げずに居たけれど、私の困るのは却て國の方なんですよ！　此間又二宮先生が手紙を遣つてからと云ふものは、一層母や姉や、姉の連合や、皆して彌喧しく勸めて來るんですもの。」

「二宮が手紙で何を言つて遣つたんです？　彌張貴方に結婚させろつて？」

「え、ですから、今度は先生の話の方に悉皆國では乘つて了ひまして……」と衝い口走つたの

を、欽哉は聞尤めて、

「先生の話の方と云つて、ぢや、最う二宮の方には、貴方に世話爲やうと云ふ決つた先方が有るんですね？」

繁はハッと赤くなつた。

「有つても、那樣未だ決つた何は……私も、能く未だ聞いて見ませんから…」と答がとちる。

「何うも、それまで話が進行して居るとは僕も思はなかつた！」と言つた欽哉の氣色は變つて、

「繁さん、貴方は何故那樣に隱すんです？」

「何も私、隱しや爲ない事よ……」と伏目になる。

「いや、隱して居る、貴方の行かうと云ふ先方は現に最う決つて居るんでせう！　え、那樣堅かつた是迄の繁さんの素志を、急に然う翻へさした有力なものは何です？　富ですか？　人ですか？　今更何も隱す事は無い。結婚先を聞かして下さい！　え、繁さん、僕は是非聞きたい！」と急込む。

「那樣事を被仰つて……私何も、富だの人だのと、那樣事の爲めに私……貴方のそりや邪推だわ。」

「邪推なら、邪推の解けるやうに貴方も打明けたら可い。」

「だつて……打明ける事なんか無いんですもの。私全く、國の母に心配懸けるのが濟なくて……年加つた親に何時までも心配懸けて、私、自分の不孝を沁々思ひましたの。」

「不孝を……」

欽哉は何か言はうと爲たが、其儘凝と繁を見成つた。一時仄と紅を點したやうに赤かつた繁の顏は、急に又青醒めて了つて、病氣の所爲か、

微かに顫へて居る。リボンも花も無い束髪の後毛が、雪のやうな襟脚に悩々しく纏れて、兩方の脇明から、引緊つた帶の胴の周圍殊に纖細く、撫肩の沽りと、此の日盛を何うやら羅のサラ〳〵したのが肌に冷たさう。折から頭の上の梢へ蟬が來て啼出した。

炒付くやうな其の聲に、例の白犬は聞耳立てて聽さうに爺さんの足元を起上つたが、前脚を踏張つて欠を爲ると、直ぐ又コロリと臥そべつて了つて、長い舌を吐き〳〵喘いで居る。爺さんは相變らずコク〳〵居睡を續けて居るので、日は小桶に射込んで、水は白く泡立つて、心太も然ぞ煤るだらう。

「僕は、全く繁さんを見損つて居た！」と欽哉は再び口を開いた、「那樣意志の弱い繁さんとは思はなかつたが……貴方の是迄の獨身主義は、ぢや其丈の事で棄てゝ了ふんですね？」

「自分の不孝を沁々思ひまして……」と繁は同じ事を繰返す。

「其の不孝と云ふ事だが……では、何位まで子は親に服從すべきものだか？　從來の家族制度に重きを置いた東洋の倫理思想から云つたら、それは成程、孝が百行の本かも知らないけれど然し繁さんなぞ現代の新思潮にも觸れて、自由とか、人格とか、然う云ふ自覺の上から獨身主義も唱へてる事と僕は信じて居た……いや、貴方は然う唱へて居たんだが、今の話で見ると、何だか貴方の是迄言つて居た事は皆怪しい！」

「え、是迄の事は皆あの、私……私も今になつて迷が覺めました。」

「迷！　迷とは何う？」

「でも……迷が覺めたんですもの。迷が覺めて、

私、默々是迄の罪を悔悟しましたわ。」

「悔悟しました！」欽哉の目は險しく光る。

「は……。」と顏を背向ける。

太息を吁いて、「僕は實に、然う云ふ辭を貴方の口から聞かうとは思はなかつたので。迷が覺めた、罪を悔悟した――何が迷です？　え、何が罪です？　貴方は那樣事を言つて……戀に飽きたんでせう！」

「……」

「ね、然うでせう？　戀に飽きて、究り僕を……僕を棄てる口實に那樣事を言ふんでせう！」

「……」

「ね、然うなんでせう？　繁さん！」

繁は術無げに、「ぢや私、何う爲たら可いんでせう！　困るわ。」と外方を向いて、「貴方は貴方で那樣風にお取りなさるし、國からは那麼に彌喧しく言つて來るし、私困つて了ふわ！」

「僕が其麼風に取るから困ると云ふので？」

「だつて、那樣貴方を棄てるの、飽きたのと被仰るんですもの……」

「飽きたに違無いでせう！　他かないものが、何故戀を棄てるんです？」

「棄てると云ふと何ですけれど……關さん、貴方も女の身になつて察して下さいよ！」と涙含んで、「貴方はそれは、男の方だから可いけれど、女は然う自分の思ふまゝには行きませんもの。」

「行かない事は無い、貴方の意志一つでさ。」

「其の意志が弱いんですから。意志が弱いから、這麼悔悟しなければ成らないやうな事にもなつたので。貴方は何故非だと被仰るが、男と違つて、女が親に内密で……立派な其れは罪惡なんぢや有りませんか？――あゝ最う、取返し付か

ない罪惡を犯して了つたのよ！　私、情無い！」とばかり、面を掩ふ。

欽哉は首を掉つて、「貴方は取返しの付かない罪惡だと言ふが、殊更何も取返さうと爲なければ可い。取返されないものを取返さうと爲るから……」と言ふのを引取つて、

「いえ、取返されないから私、切めて悔悟で罪を贖ふんですわ！」

常は何ちかと云ふと控目な繁が、這麼にヅカヅカ喋るのは始めてなので、欽哉も稍意外であつた。此の樣子で見ると、何うやら口丈の悔悟でも無いらしいので、「心が最う蕩付いたのだ！」と思ふと、欽哉は何よりも先づ忌々しいと云ふ氣が先に立つ。で、設ひ切れて了はねば成らぬにもせよ、最う一度縒を還して、切れた後も永く自分と云ふものを忘れさせたく無い——情は薄いが、未練の深い男に能くある心持で。

で、躍起となつて、「繁さん、貴方は頻りに罪だとか罪惡だとか言ふが、お互の間には那樣世間的の善惡は無い筈ぢや有りませんか。我々は無意識に相愛したのぢや無い、丁と意識して、戀に對する理想も信仰もあつて、其の理想信仰を實行してるのに、今更悔悟と云ふのが分らない！　元々我々の戀は實世間を離れた戀で、今日の偏狹な社會制度や、因襲的の道德なんぞ始めから眼中に置いて無いのだ！　置いて無いのでは無い、寧ろ那樣ものに反抗したロオマンチックの戀で……恁ういふロオマンチックの戀を續けて、趣味の生活——藝術的生活を通さうと爲るには、無論俗惡な形式主義の世間と鬪はねば成らないが、其れは繁さんだつて覺悟だ！人生の其れこそ莊美だと言つた事も丁と僕は覺

えて居る、貴方は自分で豈かそれを忘れは爲ますまい？」

忘れは爲ないが、今の繁の目に映ずる莊美は、何時かの語學教師の送別會に見たやうな、金鎖の光や、寶石の指環や、馬車や手伸である。藝術的生活とか、ロオマンチックの戀とか、以前は聞いた丈でも胸を躍かしたものだが……

「それだのに、」と欽哉の方は熱心に續ける、「今になつて迷が覺めた、悔悟を爲る——何うも分らないぢや有りませんか。我々は始めから迷つたのぢや無い、戀に由つて覺めたのだ、覺醒の戀である！　今更悔悟すべき罪なんか認めないのだ！　然し、那樣道義上の問題で無しに、成程年加つた阿母さんに心亂懸けるのは子として忍びない——孝行だの、不孝だのと、那樣道義上の是非で無く、單に粧子の情として忍びないと云ふ事は、それは僕も察するので、其爲めに貴方が結婚する氣になつたと云ふのは尤もかも知れない。だが、繁さんが結婚したら、其れで阿母さんが必ず心亂が拔けるだらうか？　早い話が、貴方が不斷能く談す總領の姉さんのやうに、現に夫の爲めに、然うして阿母さんまでが憂目を見て居る例も有るぢやありませんか。阿母さんはそれは、從來の婦人觀で以て、女は是非夫に寄らなければ成らないもの、女には意志も自由も無い、何所までも人格を沒して了つて、家庭の器械と成らなければ生活出來ないと信じて居るからして、那樣心亂して結婚を勸めるのだが——孝行と云つた所で、究り親に安心させれば可いのでせう——結婚以外、家庭以外、女の浩々たる天地は幾らも有る、夫の奴隷とならなくとも、立派に獨立出來る事を繁さんが阿

母さんに見せたら可い、見せて安心させたら、それで些とも不孝な事は無いでせう。」

「けれど、其れで安心しますか何うだか……何だしろ昔人間なんですから……」

「其れで安心しなければ、それは阿母さんが無理と云ふものだ！」

「無理だと云つて、それで濟しちや居られませんから……私には一人の親なんですから……」

「一人の親なら、此麼無理も非道も通すんですか？」と思はず苛々する。

「あら！　何も那樣……非道で母は勸めるんぢや有りませんわ！」と言ふと、繁も御いハラ〳〵涙が零れて、「母は、一番私が末子で可愛いんですから……義兄さんが那樣で、最う姉さんの事は諦めて居ますし、仍更私を末の頼りに思つて……」

「それぢや、仍浮り結婚は出來ないぢや有りませんか。結婚したら最う夫の奴隷で、夫に若し其の心が無かつたら、貴方も彌張姉さんのやうに、思ふやうに阿母さんを顧みて上げる事も出來ないか分らない。それよりも、立派に獨立自活して――獨立出來なければ左に右く、繁さんは出來るのだから――獨立自活して、貴方の思ふやうに世話してお上げなすつたら、其の方が餘程僕は策を得たものだと思ひますな。」

「ですけれど……私のやうな者に獨立出來るか何うか、其れもあの、考へて見ると難しさうに思ひまして……」

「何故です？」と欽哉は眉を顰めて、「つい一月ばかり前まで、那程先に望を懸けて居た貴方が、何うして然う急に自信の無い事を言出したんです？」

「でも……」と膝の上のハンケチを疊んだり伸したり爲て居る。

「不思議だ！　實に不思議で成らん！　一體貴方を其程まで何させた……」と詰しげに言懸けたが、頭を掉つて歎めて、「何うも、少しの間歸つて居る内に、悉皆最う繁さんは人が變つて了ひましたなあ！」と情無さゝうに言つて、御と緣臺を放れた。

繁は臆病らしい目を爲て密と見遣つたが、怨に輝いた男の其の目に會ふと、射竦められるやうに直く又俯いて了ふ。と肩を聳して、クルリと向を向いた欽哉は、二三歩崖際へ出て町を見下した。果も無く續いた都大路の屋根瓦は、汕を流した如くギラ〳〵光つて、遠くは黑く燻つて、其の間から乾切つた往來が黄色に見える。日盛の赫とした空に、所々烟突の煙がドンヨリ濁つて、眞向ふの高臺の那方に、古綿を積んだやうな雲の峰がムク〳〵湧揚つて居る。

見て居る内に、欽哉は目が暗くなるやうに覺えて瞼を閉ぢたが、眦が潤んで、其れを拭ふと兩手を兩脇に支つて那邊這邊歩き出した。犬は木蔭を離れて、草熱蒸の湯氣のやうな原中で羽虫を側へて居る。

偶と欽哉が、「繁さん、最う醫者へ行かなくとも遲くなりや爲ませんか？」

「え、最う何時ですか知ら……」と繁も氣が付いて、持馴れた片硝子の小い金時計を出して見る。

が、強ち其の返事を聞くのでも無く、彌張那邊這邊歩き續けて居た欽哉は、立留つて、「分らないものですねえ！　久遠の戀とか何とか此間まで言つてたものが、最う這麼事になるのだも

の！」とガッカリしたやうに緣臺へ腰を落して、

「二人の間に限つて、甚麼事が有らうと、決して僕は變らないものだと思つて居ましたよ！

それが、僅か一年や二年で這麼事になつて了ふとは、如何に何でも餘り情無い！　繁さんはそれは、自分で戀を棄てるのだから何とも有るまいが、棄てられる僕の身になると……實に僕は……二年後の今日這麼厭な情無い思を爲ると知つてたら――這麼傷い戀と知つたら、僕は甚麼愁い思を爲ても我慢するんでしたに。あゝ、二年前の鈴子が怨しい！　繁さんだつて然うだ！

一時の那樣……一時の浮氣見たやうな那樣何なら、那時何故謝絕して下さらなかつた？　屹度り謝絕された方が慈だつたので、其の方が何の位僕の傷は輕かつたか知れない！　始めから成らずに了つたのなら、同じ失戀の痛でも何時か癒える時があるが、恁うして僞にも一旦成つて……あゝ僕はそれを思ふと――是から先の永い苦痛を思ふと、繁さん、僕は思つた丈でも頭が狂ひさうですよ！」

「……」

「あゝ最う、那れも悲しい追懷になるのか知らないが……」と崖の下へ目を遣つて、「氷川神社の高い那裏で、月の好い晩、二人が樂しい戀を語つた事を繁さんは覺えて居ますか？　僕は空に月がある限り、我々二人の戀も悠久だと言つた事を覺えて居るが、那時の事を思ふと、實に……何といふ今日の對照だらう！　月の震んだ、全で夢見たやうな春の晩だつたが、今日は……今日は又、酷烈な夏の眞晝間で……」と言ふ聲は、堪へられぬ情の激動に顫へながら、我にも無く女の手を取つた。

「繁さん！」

「え。」と見擧げた繁の美しい目も輝いたが、「貴方は……貴方は最う一度那時の心持に成れませんか？」と言はれると、溜息を吁いて、目を膝の上に落す。

「貴方は、冷い智の聲に肯かうと爲て居る！　佗しいぢや有りませんか。今から那樣青春の血を冷まして了つて……繁さん、貴方は佗しいとは思ひませんか？」

「……」

「ね、這麼明るい中へ出て了つて何の趣味があります？　最う一度那いふ夢見たやうな月に憧れませんか？」と夢みるやうな目を爲て欽哉は言ふ。

然し繁の答は無くて、取られた手を密と放した。

「那時の事は、皆僕覺えて居ますよ。貴方は僕に許嫁があるので先の事が案じられると言ふから、僕は大丈夫だが、貴方こそ先になつて變らなきや可いがと言つたら、繁さんは永久に誓ふと言つて誓つた筈だつけ。ね、貴方は覺えて居ませんか？」

「あの、許嫁と被仰れば……」繁は故と答を避けて、「貴方、許嫁の方は何う爲すつて？」と問く。

「何う爲るものですか。何時かの手紙にも言つた通り、那樣でさ。」

「お可哀さうぢや有りませんか？　何時までも然うして貴方を待つて被居るのに……」と又溜息を吁いて、「お可哀さうだわねえ！」

「そりや、可哀さうには可哀さうでさ……」欽哉の聲も沈んだ、一緒に祇園祭へ行かうと言つ

た時のお房の笑顔が、怜しく目に浮んで、「全く可哀さうで。それに養母も最う年を加つて居るし、葉子共實に可哀さうだが……僕は繁さん、忍んで其の可哀さうなのを犠牲に爲て居るんぢや有りませんか！　忍んで戀の犠牲に爲て居るので……養家の恩には背く、香浦からは擯斥される。此の二年間の僕の境遇は貴方も知つてる通りで、那して學費に窮して苦しんだのも、學校を今年迄れたのも、皆因はと言ふと戀の爲めで……然し、戀の爲めと思へば、僕は又些とも悔まない！　全くですよ。僕は全く其私に思ひもし爲ても居る。それだのに、繁さんは單に國の方の其位の事情で、平氣で最う戀を棄てる氣になつたと云ふのは、僕には殆ど信じられんですよ！　ねえ繁さん、僕が然うして郷里を棄てて居るから、貴方にも棄てよと言ふのぢやない、先になつて阿母さんを安心させて上げたら同じ事なんだから、貴方も素志を通して、ね、お互に改めて永久に誓はうぢや有りませんか？」

「……」

「ね、最う一度誓ひませう？」

「誠さん、」と繁は思切つたやうに面を擧げると、然も哀願するやうな眼色爲て、「私、あの、お願ですが……ねえ貴方、貴方も許嫁の方と結婚して上げて下さいな！」

欽哉は屹と見返した。

「お可哀さうぢや有りませんか！　那麼大人しい方を何時までも那樣……私一度でもお目に懸つてるから、同情せずに居られないわ！　ねえ結婚してお上げなされば、阿母さんも何だし、貴方だつて是迄の……」

「不名譽が取返されると言ふんですか？　何う

も、僕の爲めばかり思つて下すつて有難う！」と怒を抑へて言つたが、迫る息を暫く鎮めてから、「ぢや、僕が這麼に言つても、繁さんは終に戀を棄てる意りなんですね！」

「棄てるなんて、私那樣意りぢや有りませんけれど……でも、國の方が……國の母が……」と聲を顫はせて、「ねえ誠さん、貴方もお阿母さんの事を思つてお上げなすつたら……」

「貴方に、那樣勸告受ける必要無い！」と耐りかねたやうに叫んで、「さ、最う一度賭り言つて下さい！　貴方は最う何うあつても、結婚するんですか?!」

「堪忍して下さい！」とばかり、ハンケチに顔を埋めて繁は咽入る。

是丈聞けば最う疑ふ餘地は無い！　欽哉もハタと口を噤んで了つて、唯泣入る姿を腹立しげに見据ゑた。拳を拉つて駭く兩膝に突支へながら、今にも摑懸りさうな眼脈であつたが、「あゝあ！」と打溜るやうな太息を洩らすと共に、偶いと又緩拳を立つた。

「繁さんは何を泣くんだ！　繁さんに泣く事なんか些とも有りや爲ない！」

「えゝ、何うせ然うよ！」

「さあ最う——貴方も醫者へ行くんでせう——何時まで那樣空涙を流してるより、可い加減に行つたら可いでせう。何ぼ貴方でも、僕の前に居るのは愁いだらう！」

「可いわ、何とでも御仰るが……其内には、貴方だつて可哀さうだと氣がお付きなさるから……」と涙の間から繁は怨しげに見遣つて、「貴方はそれで、京橋の何所に被居るの？」

「聞いて何うするんです？　棄てた者に用は無

い筈だ！」

「所くらゐ聞かして下すつたつて可いわ。」

「結婚の時に招待狀でも下さるんですか？」と愴さげに言つたものゝ、欽哉も思返して、京橋の是々の所で、「佐藤醫院」と訓へる。

「然う、お醫者樣ですか？」と繁は頷いたが、醫者と云ふので思出して又時計を見る。

「私、何れ其内に、是非最う一度お目に懸つてお話爲るけれど……貴方は今日は腹を立てゝばかり被居るんだから……」

欽哉は何とも答へずに、繁が時計を藏つて帶揚を結び直すのを默つて見て居たが、不意に向ふの木蔭で大きな欠の聲が爲たので、振返つて見ると、例の爺さんが漸と目を覺して、キヨロキヨロ這邊を見て居るのであつた。で、何か言はうと爲て些つと躊躇したが、ツカ〳〵と傍へ寄ると、「繁さん！」と低い聲で鋭く呼んだ。

「え。」と恐しさうに見擧げる。

凝と見下して、「貴方は、何ういふ人と結婚するのか知らないが……能く貴方は、能く那樣處女の顏して結婚出來ますね？」

繁は眞靑になつて慄れて了ふ。

「僕も、繁さんの澄して結婚する顏が見たいものだ！」

「關さん！　貴方こそ、能く那樣……」と言つて唇を嚙むと、繁の美しい目は燃ゆるが如く、怨と怒とに眦も屹と釣上つたが、ジリ〳〵と溢るゝ涙の顏を轉と兩手で抑へながら、身悶して、

「可いわ、誰も怨む事無いわ！　自分が意志が弱かつたんだから……あゝ、自分を怨むより爲方が無いんだわ！」

十一

「何うも變ですからお待ちなさいよ。」と小聲に言つて、閉切つた離屋の雨戸の外から、植木屋の女房は手探に其所等を撫廻しながら小首を偏げた。

「變ですつて、何う變ですの？」と繁は胸を轟かして探寄る。

「何か入つてるか知れませんよ。貴方の部屋に。」

「あら、氣味の惡い！　何うして？」

「手探で能く分らないけれど、戸閉りが何だか何うも……」と眉を顰めて見返つたが、頷いて、

「何しろ明を持つて來ない事には……待つて被居い。」

上さんが母屋へ明を取りに行つた後で、繁は怖々雨戸を探つて見たが、何う變なのか更ぱり自分には分らぬ。密と隙間から覗いて見ると、中は唯眞暗で、自分の部屋ながら薄氣味が惡い。

間も無く、上さんはカンテラを點して來た。

繁は今更恐氣立つて、「お上さん、何うかあの……開けるのは舍して頂戴！」

「まあ、何故？」

「でも、何だか私、怖いやうですから……」

「那樣事を言つてゝ。貴方御自分の部屋ぢや御座いませんか。怖いからつて、何時まで打遣つて措かれるものぢや無し……」と最う戸の傍に立懸つて、「貴方は少し背後へ除いて被居い、私が見て上げますから。」

言はるゝまゝに、繁は背後の暗い方へ退いて顫へて居る。ガラリと戸を引開ける音に、思はず目を瞑つた。

「あ、那麼物が入つてる！」と上さんが叫んだ。

「え、其麼物？」

「眞黑な物！」と答へて、上さんは明を翳して戸の中を覗込む。

で、繁も始めて目を開いて見ると、カンテラの光朦朧と射入る狹い一間に、部屋一杯の黑い影！　繁はギヨツとして顏を背向けた。

カンテラの裸火が夜風に吹かれて瞬く毎に、部屋の中の黑い物もムク〳〵動くやうで、能く見ると黑いのでは無い、物の正體は赤いのであるが、周圍の壁に映る濃い影が黑いのである。

「ね、何うして那麼厭な物が貴方の部屋に有るんでせう？　心當りが御座いますの？」と上さんはジロ〳〵繁の顏を眺める。

漸う心も落着いた繁は、今は瞭り其物の正體が分ると、何とも言へぬ身顫がゾツと體中に渡つた。二人は旋て中へ入つたが、赤い物に圍まつて、狹い部屋の眞中に幅を取つた其れを、胡散らしげに見て居た上さんは、始めて得心の行つたやうに和やりと爲る。

「小野さんも、まあ油斷が成らない！　彌弘是は、一件のが持込んで來ちやつたんだよ！」

「何で狎々しい、失禮な口利くんだらう！」と思つて、繁は絶としたまゝ默つて居る。

「ねえ貴方、何時の間に那麼譬の後家さんなんかと近付にお成んなすつて？　小野さんに限つて、豈か私も那樣事はと思つて居たが……本當に、今の女學生さんは油斷が成らないよ。」

繁は机の前に固くなつて坐つたまゝ、强ひて耳を塞して居る。偶と氣が付くと、毎も屹ちんと整へて置く机の上が取散らかしてあつて、出しては無かつた筈の鏡が仰向きに放り出されて

居るし、誰か留守に入つて掻捜いたらしいので、其れを質さうと思つて、屹と上さんの方を見向いた時、「おや、此の足跡は何うだらう！」と頓狂な聲で上さんが叫ぶ。

カンテラを那邊這邊振照しながら、「自分が譬で見えないものだから、恐しいまあ、汚れた足で後家めが上つたと見えて、緣側も疊も、全で四脚でも匐廻つたやうですよ。」

「まあ、氣味の惡い！」

それだのに、机の上の散かつたぐらゐを、然う角目立つて尤められも爲ぬと思返して、繁は其儘机の上に面伏な目を落すと、自分の青閑れた顏が薄暗く鏡に映つた。

「大分な高だが……」と上さんは例の赤い物を玩り廻して、

「這麼になるまで何なすつた所を見ると、小野さんは餘程最う前から、那の後家とはお馴染なんですね。」

繁は其れを穿鑿されるのが何より愁い！　可い加減に最う行つてくれゝば可いと念じて居る内に、サツと水のやうな夜風が吹込んで、カンテラは一溜りも無く消えた？

「あれ、消えつちやつた！　貴方憚樣、マツチは御座んせんか？」

「えゝ、生憎マツチが……」

「ちや、那裏で點けて來ませう。」と言つたが、直ぐ立たうともせぬ。

明は消えて部屋は眞暗になつたが、外の薄明が射込んで、一旦目に付いた赤い厭な物は闇の中にも正々見える。

上さんが、「豈か是は、貴方お一人のつて事は御座んすまい？」

「え、私は全きり知らないと云つても可いんですよ！　本當に。這麼物をお込んだつて、私は知らないから可い！」と彝は腹立しげに言ふ。

「だつて、貴方が全きり知らないものをお込む譯が有りませんから――所様事を言つて被居らずに、早く何とか始末を付けてお了ひなさるが可う御座いますよ。」

「だつても……私知らないわ！」

「知らないわぢや濟みや爲ませんよ。御自分の身を大事と思つたら早く何うか成さらなければ……何しろ那いふ譬で、全で世間も顔も捨てゝ了つてるんですからね。那の譬後家に懸り合つてたら、それこそ尾ひには、首でも縊らなきや成らない事になつて了ひますよ。是迄には若い娘や女學生さんで、那の爲めに一生廢者になつた氣毒な人達が、私の知つてるのばかしでも五人や十人ぢや利きませんもの。當人ばかしなら未だしも――一體晋なんて者は執念深いもので、直き最う、親同胞にまで拘つて行きかねないんですからね。貴方もまあ、取んだ者に懸り合つてお了ひなすつたねえ！」

「……」

「ですが、若い方には爲方も御座んすまいよ。まあ〳〵懸り合つたのは爲方が無いとして、何でも早く始末を付けて了ふに限りますよ。何の道貴方が御自分に蒔いた種なんですから……」

「いえ、お上さん、」と彝は遮つて、「私は全く知らないんだから……つい其れは、言ふまゝに私も任したのは惡かつたか知らないけれど、元々這麼事に成つたのは……」

「成つたのは？」

「あの……」と口籠つて、「關さんの罪なんです

から……」

「あら！　那の方ですか？　へえ……」と感心したやうに、上さんは今更らしく彝を見遣つたが、眞暗で顔は分らぬ。「彌張ね、然うですか……薄々私も察しちや居ましたよ。那の方なら何も那麼後暗い後家さんなんかに何なさらずと、公然に貴方、幾らも何うでも成りさしたらうに……と言つた所で、今になつちや爲やうも有りませんが……早く其れぢや、關さんに御相談なすつたら可う御座いませう。那の方には又那の方で、甚麼考へがお有んなさるか知れませんから。」

「甚麼考へが有つたつて……困るわ！　這麼物を持込まれて了つて、私何ちにしても困るわ！」

「困るたつて爲やうが無いぢや有りませんか。恁うして最う貴方の部屋へ持込んで了つたものを、貴方も豈か打遣る譯にも行きませぬさ。何うも恁うなつた以上、貴方も知らないぢや通りませんから、お二人で能く御相談なすつて……」

「二人で相談したつて、彌張困るのは私一人よ！　這麼物を持込まれて――持込まれた私は……私こそ可い災難だわ！」

「そりや貴方、女は何うしても損なものと昔から決つてるんですもの。恁うなると、平氣で男が澄して居るのが憎らしう御座いますよね。」

「昔から決つてるか知れませんが、私、這麼物を一人で引受ける譯は無いんだから……」

「だつて、最う今になつて、幾ら引受ける譯が無いと言張つても、貴方は現に引受けて了つた後だから追着きや爲ませんわね。」と言ふと、上さんの立上る氣勢が爲て、「ね、今夜は貴方も氣が立つて被居るし、それに疲れても被居るやう

だし爲るから――今明を點けて來てお床を延べますから、今夜はまあ靜かにお睡つて、明朝緩くりお考へなさいよ、ね、然うなさいまし。」

暗闇を探り〳〵上さんは出て行つたが、今度はランプを點して持つて來た。寢床を取つて、蚊帳を釣つて、深切に寢衣まで手傳つて着更へさせ、脱捨てた着物を袖疊に爲て、旋て繁が枕に就くと、明を細目に爲て行つた。

繁は枕に就いたが睡付かれさうも無い。蚊帳越しに見るとも無く見遣ると、例の赤い厭な物が直ぐ目に付く。上さんが閉め忘れて行つた戸の間から、濕ぽい風が冷々と、蚊帳の戸ぐに通れて又もや其れがビク〳〵靡めくやうに見える。薄暗いランプの光に、仄黑い影が段々部屋へ擴がるやう。目を閉ぢて見まいと爲ると、赤い生々しい色が爲て、血腥い音が耳の底に聞えて、繁は耐らなくなつて起出た。明を消さうかと思つたが、眞暗に爲ても彌張赤い物は目に殘るのであるから、ランプの心を出して出來る丈明るく爲た。

再び蚊帳へ入つて、今度は傍目も振らずに凝とランプの火を見詰めて居たが、直き目が疲れて仄やりとなる。と、何だか引入れられるやうになつて……其所へ、上さんが連れに來たので繁は附いて行く。

兩側の所々、見知らぬ人が石のやうに默然と突立ちながら、唯目ばかり働かしてジロ〳〵自分を眺めて居る。上さんも亦一言も口を利かずにサッサと先へ行くので、遲れては見失ひさうになるが、口を利いては惡いのだと思つて默つて喘ぎ〳〵附いて行くと、爰へ横になれと言はれて、白い布片の掛つた寢臺の上に横になつた。

すると、行成帶に手を懸けて解かうと爲るので驚いて爭ふと、今迄上さんと思つて居たのは醫者であつた。

帶を解かれて、襟を擴げられて、見ると、自分の腹は眞赤に血の如く圓さづて居る。曩から誰とも知れぬ黑い鋭い目が、節穴のやうな所から瞬もせずに覗いて居るが、然かも聲は立たず、唇は動かず、唯恥しさと恐しさにワク〳〵顫へて居ると、其内に、偶と是は夢を見て居るなと自分で思つた。目さへ開けば此恐しさは遁れられると思つて、一生懸命で瞼を開けた。

曩の鋭い目は、小兒の時に能く徒を爲て追駈けられた、町の名物の何市とか云ふ明盲の按摩だつたので。先年歸省した時には最う死んだやうに聞いて居たが、其の見ぬ目を瞋らせながら、例の赤い物に荒繩を掛けて、ゲイ〳〵力任せに緊搦げるのが蚊帳越しに見える。緊搦げる毎に、息も留りさうな苦しさで、ハッと目を覺ますと、體はビッショリ汗を搔いて居た。

「あゝ、怖かつた！」と大息を吁いて、繁は寢衣の帶の固いのを弛めた。

「お寢みですか？」と言ふのは母屋の亭主の聲である。

で、漸と我に返つた繁は、綿のやうな體を大儀さうに起しながら、「いゝえ、未だ――何か用ですの？」

「何有、お寢みなら可うがすよ。今日ね、午後丁度本郷まで爲事に行つたから、次手に寫眞屋へ寄つて、お賴の寫眞を取つて來ましたから。」

「あら、其れは何うも……最う出來てましたか？」

「えゝ、最う速うに出來てたんださうで……貴

方は今日は何ですか、醫者へはお行で無かつたんで？」

「いえ、行きましたよ。何故？」

「でも、途中から伸を返しなすつたやうだが。」

「え、些つと知つた者に逢つたものですから……行くには行きましたの。」

「醫者は何てました？　彌張脚氣なんでせう。」

「えゝ……」と言つた限、繁は默つて了ふ。

「何うも水氣の工合が、私は的り然うだと思つて……脚氣なら醫者の藥なんか飲んだつて空でさ。明日から嘗に然う言つて、麥飯を焚かしてお上んなさい、其れに限るから。ぢや寫眞は机の上へ攔いときますよ。」

亭主の立去つた後で、繁は蚊帳を出て、机の上へ攔いて行つた其の寫眞を取つて見たが、自分ながら能く寫つて居る。手札形の半身で、稍横向きの顏がカツキリ浮出る如く、取分け寫した時の心の影が活々と、然ながら靑天を望む眉の鳥の輝くやうな其目！　飽かず見入つて居る内に、繁の顏は仄と美しく紅色點して、其儘寫眞の上に俯して了ふ。

「最う其れも、這麼になつて了つちや……」と程經つてから呟いて、力無げに擡げた顏は何時か靑醒めて居て、目も潤んだが、「あゝ情無いわねえ！」と沁々獨言つと、思切つたやうに寫眞を手箱の中へ放り込んで了つた。

ホツと溜息を吁いて、襟に顏を埋めて、又も永い物思に沈んで居たが、思はずホロリと爲て、雫が机の上に光ると、氣が付いて、目を瞑つて仰向いて暴に首を掉つた。それから、急に思立つて手紙を書出したが、一度出懸つた涙は拭いても〳〵留度が無いので。

十二

最う口テニスや容儀體操でも有るまいから一番野球でも練習して、女の持てるアメリカへ競技渡航でも試みやうと云ふ連中、今年は富士登山を企てゝ、同行十何人の寄宿生と一緒に、二宮節子も此の一週間ばかり那邊へ行つて居た。すると、其の留守へ繁の斷手紙が來たので、歸つて見て奇怪に思つて居る所へ、昨日圖らずも他から意外な事を聞込んだから、驚いて、今日早速北小路の宿を訪れたのである。

「……那樣事が有らうとは夢にも思ひませんものですから、私も不思議で成らないので御座いましてね。」と話を續けて、

「鄕里の方だつて、今申す通り悉皆乘氣になつて居ますし、本人も……有合せの寫眞では何で、故々新規に寫さうと爲るくらゐなんですから、本人も無論其氣は有つたので御座いませう。高が貴方、田舍の醫者の娘で、出世も出世、這麼幸福な事が有る譯のものぢや無いんですから、無論それは、有つたので御座いますとも！　それが、歸つて見ると然う云ふ手紙でせう――何にも言はずに唯、那の話は暫く見合せてくれと云ふ極めて冷淡な……其れも可いのですが、是迄入つて居た研究科の方も歇めると言ふのですから、私もね、始めは然う思つたので御座いますよ、是も結婚の方を斷つたから、私に濟なくて、それで學校の方まで舍さうと云ふのだらう。學校は學校、結婚の話は何も學校と關係無いのだから……私一箇人として勸めたのだから、其れを混同して那樣心得違を爲てくれては困る。からして、其事も有るし、色々會つて詳しい事

情も聞きたいし爲るから、一度私の所へ來るやうに手紙を遣つたので御座います。所が、來ませんものですから、私の方から出懸けて行つて、二度まで訪ねたのですが、二度ながら居ませんので……居ても留守を使つたのでせうよ！（怪しからないと云ふ意を顔で言つて）しますと貴方、昨日然る所で學校の校醫に逢ひますと、是々の女が是々で診て貰ひに來たが、事實成女大學の生徒なら、學校の體面にも關する事だから、貴方まで御注意して置くと、恁う申すのぢや御座いませんか！　私も餘りの事に、一時は信ずる事が出來なかつたので御座いますよ。」

鼻の頭に骨汁を掻いて、獨りで眞赤になつて辯ずる二宮の顏を、北小路はマジ〳〵見遣りながら聞いて居たが、話の切れるのを待つて、「慥か小野と云ふ名でしたね？」

「えゝ……」今更名なんぞ問かれて二宮は面喰ひながら、「小野繁――彌張小野の小町の亞流なんですわ。」と顏を歪めて警句らしげに言ふ。

「すると、才媛は由來多情なものと見えますね。」

「何が才媛なものですか！」と吐出すやうに、

「可卑汚女！　でさ。」

北小路は微笑して、「だが、始めの話では、是迄の卒業生にも無い生徒だとか、貴方は恐しく賞めて居たやうだが……」

「え、學校の成績は其れは、全く此の二三年這方の卒業生に無い出來でして……然し何うも、那樣品行の女とは些とも存じませんものですから、つい輕卒にお勸め申して、私、實に面目御座いませんので……」と薄赤くなつて言つた二宮の地黑な顏は、一層襲反つて見えた。

「いや、僕も輕卒だつたので……貴方に聞いた時には御い氣付かずに居たが、成女大學の小野と云ふ女學生なら、前に最う外から噂を聞いた事があるので、其女の對手の男は、實は僕と同窓の友人なのです。」

「貴方の？まあ！」と、杓んだ顏も此時ばかりは伸びて、

「然うですか！」

「名は必要も無いから言ふまいが、這箇の大學の文科の者で、何でも最う其女とは餘程前からの關係のやうに、僕は聞いて居たが……」と聞くと、二宮は思はず小膝を打つて、

「それで思當りましたよ！　文科と云ふので思當りましたが、私も其の大學生なら逢つた事が有りますので……」

那れは一昨年の春、小野と一緒に上野の洋食店へ入つて居た大學生が、忘れもせぬ、文科の襟印であつた事から、然う云ふ所を目擊したからこそ、間違の無い内にと思つて、無理に勸めて寄宿舍へ入れた事を二宮は話つて、「私が詰問した時には、同鄕の者で、緣續きか何かのやうに申して居ましたし、それに寄宿舍へ入つてからは、別段怪しい樣子も見えませんものですから、私も悉皆信用して了ひまして……何うも面目御座いません！　取んでも無い者をお勸め申して、それこそ、宇治樣へお出入出來なくなる所で御座いました！」と言つて、照れ隱しにハタハタ扇を使ふ。

宇治と云ふので北小路は思出して、「話が違ふが、叔母にも困つて了ひました。妹をね、今度本家へ嫁けやうと言出したのださうです。」

「御本家へ？　まあ！　御本家は二度目で微居

るぢや御座いませんか？」

「二度目の事は管はないとしても……」

「管はないぢやお可哀さうですわ！　お年だつて未だお十九ですもの、何も那麼、二度目の所へ故々被行るには及びませんわ。御本家は慥か最うお子様がお有り遊ばした筈ぢや御座いませんか？」

「妹も、實は其れを厭がるので。」

「私だつて厭で御座いますもの！」と力を入れて二宮は言つた。

然う言ふ顔を眺めて、北小路は何とも言はずに續様に瞬を爲る。

「それで、綾子様は何う遊ばすお考で御座いますの？」

「何う爲る考と云つて、妹の事だから深い考も有りは爲ない。叔母が行けと云ふ以上は、厭でも行かねばならないぐらゐに諦めて居るのでせう。然し、有繋に幾らか預貯もあると見えて昨日手紙を寄來して――僕が這箇へ來てから始めて寄來したのだが、恁う云ふ最う振袖を着るのも尾ひだから、記念に一枚送ると言つて、最近の寫眞に、何うやらして名も無い花でも春が惜まるゝと云つたやうな、述懐めいた歌を書いて寄來して……尤も、其丈の事で、本人は深い意味も無いのか知らないけれど、然しね、不斷那いふノンセンスな女丈に、那様歌の一つも詠んで寄來すと云ふのは、何だか僕には哀に感じましてね。」と沈んだ聲。

二宮も沁々頷いて「ですが、宇治の御隱居様にも、唯お一人の姪でお有んなさるぢや御座いませんか。豈か綾子様がお憎い譯でも有りますまいに、何故那様纏子のある二度目の所へなんぞ、擇りに擇つてお遣しなさらうと遊ばすんですう！」

「究り親族の縁が薄くならないやうにと云ふのと、一つは、自分の一門程貴い系統は無いと云ふ例の固陋の考からで、全で何うも、現今の科學思想とは正反對の見識を抱いて居るのだから困る！　妄みに親族々々と親族の縁ばかり重んじて、代々近親間の婚姻を踏襲して居るものだから……現に、本家へ嫁つた從姉は那通り癲癇性の病氣で死ぬし、叔母の所にも不具同様な厄介な小兒が有るし……其れでも未だ覺らないのだから困る。僕丈は幸ひに、まあ然う云ふ仲間入も遁れたけれど。」

「僕丈は　と被仰つて被居らずに、綾子様も那様お仲間入はお爲せたく無いぢや御座いませんか何とか貴方、お兄様の權力で、救つてお上げ申す法は無いもので御座いますか？」と熱心面に現れて「それに貴方、肝心の夫たる方が、那れでは如何にも綾子様がお可哀さうぢや御座いませんか？　ね、設ひ二度目で無く、お子様も無いとしましても、御本人が是迄のやうなお身持ぢや、妻たる者が實に不見目ですわ！　御本家の事を彼是申しては濟みませんけれど、那して外には始終お妾のやうな者が御座いますし、内では内で、召使なんぞに何なすつて、全で最う取更へ引更へ女を玩弄物に爲て被居るんですもの。那いふ方は奥様だつて彌張玩弄視して被居るのだから、耐つたものぢや有りや爲ません！」

「然やうさ……」北小路も熟と目を俯けたが、「自身では、其れを罪惡とも醜行とも思つて居ないのだから――何うも、貴族とか上流とか云はれる連中の、一般の其れは通弊だから……」と

話が逸れる。

「通弊かも知れませんが、既に最う弊と申す以上、一般たからと云つて許す譯には參りますまい！」

「けれど、然う云ふ不德な逸樂を貪つて、平氣……いや寧ろ、徒手遊食を誇として居る者が有り得ると云ふ事も、一方に又、男の玩弄に甘んじなければ成らないやうに、女に獨立の保障が與へられて無いと云ふ事も――究り婦人問題も――今日のやうな社會組織の缺陷上餘儀無い現象で……」

「ですが、」と遮つて、二宮も亦自分の持說を持出す、「今日のやうな社會組織でも、現に西洋の文明國なぞは、表面丈にもしろ、左に右く一夫一婦の制が行はれて居るのですから……一體日本人は、男子の貞操と云ふ事に少しも觀念が無いのですから、自然女を侮辱して平氣で居られるのですわ。」

「大きに其れもあるが……尤も、同じ貞操と云つても、婦人の貞操は種屬保存の上から殊に大切なので、男子は然し……」と言半して、北小路は口を噤んだ。

男子は先天的に多妻傾向を有して居ると云ふ說が、偶と胸に浮んだからで。而して一夫一婦と云ふ事の疑やら、各人性慾の差と云ふ生理上の問題やらを、自分が攻究中の社會主義のユートピヤに持つて行つて考へた。

で、妹の結婚談も衝い何うかなつて了つて、二人は又外の話に移つたが、曇迄赫々と照つて居た天は、何時の間にか曇つて、何うやら一白雨寄來しさうな雲脚。

話に心取られて知らずに居たが、二宮も氣が付いて、降出さぬ内にと慌てゝ歸支度を爲る。

さて、暇も告げてから思出したやうに、「安比古樓、貴方は小石川の香浦と云ふのを御存じで被居いましたね？」と附かぬ事を問く。

「香浦？　知つて居ますよ。」

「先頃新橋でお目に懸つた軍人の方が、慥か香浦と被仰つたやうに覺えて居ますが。」

「香浦速男と云つて、僕が中學頃の親友です。」

「今でも御親意で被居いますか？」

「親意です。一時疎遠になつて居たが、今度又這箇へ來てから些い〳〵往復して居るが……何故です？」

「那の方の御親父さんは、以前何所かの知事を爲て被居つたのですね。」と自分が頷いて、「那の香浦さんには、お孃さんが御座いませう？」

「有ります、那の男の妹で。」

「今年慥か……二十だつたと思ひますが、園枝さんと云つて、活潑な好いお孃さん！」と一旦立懸けた尻を又据ゑて、

「貴方、那のお孃さんは如何ですの？」

「如何と言つて、貰ふのですか？」

「は、那のお孃さんならお貰ひなすつても慥かでせう。家庭も聢りしてお居でのやうですし、學課なぞの成績は、私保證爲ますが……彌張育が育丈に、何所か外の女學生と違つて、學校に被居る頃から氣前なぞ好い所が御座いました。」

「又賞揚げますね？」と北小路は微笑する。

「あら、今度は何も那樣……」と二宮は態をして、「貴方の御友人のお妹で、私より却て貴方の方が能く御存じかも知れませんで御座いますもの。ですが、貴方は全くの所何う思召しますの？　那のお孃さんを。」

「然うですね……深くも知らないが、那の娘なぞ好い方でせうね。」

「では、外に是と云ふ事も無ければ、貰つても可いくらゐの思召は御座いますの？」

「けれど、知合丈に後で又紛紜があつても困るから、まあ最う少し慎重な事に……」

「え、それは最う、慎重でなければ成りませんけれど——前ので懲りて居ますから、決して最う輕卒にお勸め申したりなぞ爲ませんけれど、私又、前のが那樣でしたから、仍何うか好い方をお世話致したいと存じまして……おや！眞暗に天が成りまして……何れ又緩くりお話に出ますけれど、貴方も一つお考へ遊ばして。」

是丈言遺いて、二宮は最う挨拶も匆々に急いで歸つたのである。道の二三町も行つたと思ふ頃、早くもポツリ、ポツリと豆のやうな大粒なのが落して來たので。向ふの物干で慌てゝ干物を藏込むと、サット一吹き吹下した冷たい風に、消飛ぶ如く雀が飛去つた後から、忽ち簾を束ねたやうな大雨。下では雨戸を繰る音ガラ〳〵ガラ〳〵と彌喧しく聞えて、樂吹交りにハラ〳〵二階へも降込む庭下へ、北小路は衝と立つて行つて外を見遣つた。

「傳が有れば可いが……濡れたらう。」と然う思ひながら、浮り佇んで居る鼻先へ、光りと目を射る電光！

十三

ピリ〳〵と戸障子の震ひ裂けるやうな雷鳴！夏の日中の痙攣つた萬象が、一時に生氣を吹返して活動した。樋を溢れて瀧のやうな雨水は屋根も浮くばかりで、照續きの砂埃を流し、大地

は見る〳〵小川を作つて小石が美しく洗ひ出される。乾揚つた塀も壁も濡色に澤立つて、暑さに蒸された庭樹は水煙を浴び、蒼の梧桐の雨に渴した廣葉が活返つたやうに青々と、涼しい雫に叩かれては嬉しさうに繁吹を顫合つて居る。

と、又光つて、鳴る。

「カアル・マルクス！　ミハイル・バクニーン！」と北小路は突然獨言ちた。十九世紀の半ば、社會問題のドイツに勃興した當時、其等の人々が雄々しい活動の生涯を偶と思浮べて。

すると、今迄胸に往來して居た園枝の事や、妹の事や、乃至小野と云ふ女學生の事なぞは、サッと白雨に洗はれたやうに忘れて了つて、屹と胸を反らしながら、小氣味好げに雨を眺めて立つたが、「然うだ！　歴史や學説なんぞ雲で、雲ばかり一杯頭に湧かして居たつて、雨に成らなければ一雫も世を潤しは爲ん！」

其内に、雨は少しく小降になり騒つたが、雷は未だ〳〵激しい。

所へ、帳場の番頭が上つて來て、「や、是は降込みまして大變で御座んしたらう！　婢共は雷鳴に顫揚つて居まして、二階もお客樣も悉皆はや……申譯も御座んせんで、へい。只今閉めさせませうから……」

「最う然し、小降になつたやうだから、閉めるのも憂陶しい。」

「へい。では、お後で拭かせませうで。」と片手の名刺を出して、「此のお方がお見えで御座いますが。」

北小路は名刺を受取つて見ると、「宜しい、通してくれ。」「へい。」と番頭は立去る。

「此の降るのに能く遣つて來た、那の男に會ふ

ほど好い氣持は無い！」と可懷しさうに名刺を眺めながら、居間へ入つた。

間も無く廊下の外から、「何うだ、恐しい雨ぢや無いか！」と呶鳴るのは速男の聲である。白の雪駄の袖に、金の星章の一つ附いた尉官の夏服を著て、片手に帽子、片手に軍刀の鞘を握つてノッソリ入つて來たが、速男一人と思ひの外、兄の背後に附いて園枝も一緒であつた。

「や、これは。」と北小路は立つて、「さあ、まあ何うぞ……緣側は濡れて居ますから。」

速男は帶皮を解いて佩刀を擱き、自分で絹麻の茵を引寄せて足座を掻いたが、園枝の方は有繋に薦められるのも辭して、女丈に先づ淑かに挨拶爲る。北小路は衝い曩二宮から話のあつた後なので、何と無く氣が射して、改る氣味。で、自ら目に留まる園枝の姿は、涼しさうな明石の薄監に袖丹の朱鷺色が透けて、花で云へば紫繡毬の色に、初夏の日射の眩ゆ迄を見るやうだと思つた。白紗に立田撫子を淺り縫つた半襟、白く光琳浪をヌーボー式に拔いた花菖蒲の染絹の帶を粧雅に結んで、亂れたまゝの束髮に銀の星の附いたピンを一本、櫛も簪も無い、指環も金の高彫の桂に眞珠の實を鑄めたのを一つ丈嵌めて、緣の細いトウキルシルクのハンケチを動かす度び、仄かにリリイらしい薫が爲る。

「今日は何らへか？」と北小路は茶を滝れながら。

「え、病院まで……」と茵を敷きながら、園枝が答へやうと爲た途端に、又光つて、ハッとして息を呑む。

次いで凄じいのが鳴つた。

鳴り歇むのを待つて、速男が代つて言ふのを聞くと、一二年來癇疾の胃病で始終勝れなかつた香浦の老人が、今年の此の暑さでメッキリ衰弱した爲めに、醫者の勸で、今日腸胃病院へ入院したのださうだ。二人は其れを送つて行つた歸りなので、途中の此の雷雨に伸も遣りかねて少し寄道ではあつたが、雨宿りに這箇へ廻つたとの事。

「雨宿りと云つては何だか失禮ですけれど……」と兄の辭に附いて園枝は濟まなさうに言ふ。

「私、雷鳴が誠に嫌なものですから……」

「いや、誰だつて餘り好な者はありませんが……其れは然し、御心亂でせう。」と北小路は眉を顰めて、速男に、「入院なさるやうでは、餘程お惡い……？」

「惡いにや惡いが、然し胃病なんだからね。根治しない代り、生命に關するやうな病氣で無いから……何しろ此の、家ぢや自由過ぎて我儘が利くものだから、つい不衛生を爲る、其れが重なり重なつて段々惡くなつたんさ。」

「では、早く那樣に惡くならない内に、入院なすつたら可かつたらうに。」

「醫者が今日まで默つてるものだから、那樣必要は無いのだと思つて居て……何有、元々性の知れた病氣で、一月も病院で辛抱したら可いんだらう。」と事も無げに言つて、妹に、「最う鳴らなくなつたぢや無いか？　雷鳴は。」

「え、曩ので最う歇んだんですか知ら。」と園枝は耳を澄して見て、「未だそれでも、遠くで聞えるわ。」

「まあ緩くりしてお居でなさい、其内には雨も霽るでせう。」北小路は茱子など薦める。

「時に、何時かのお話の、關と關係して居るのは小野と云ひましたね？」

「え、小野さん――小野繁さんと云ひますの。」

「其女の事で、實は……」と言懸けて、北小路は口を噤む。

「小野さんの事で、何うか爲まして？」

「いや、別に……」と少し考へて、「まあ他日に爲ませう。其れよりも、何時か拜借した關の詩集をお返し爲ますから。」

と、其れを取りに立つた北小路の背後姿を眺めて、園枝は訝しさうに小首を偏げた。兄は何う取つたかと那邊を見ると、丁度廊下へ立つて行つて開かなかつたらしい。雷は遠退いた代りに、一時小降になつた雨がザーザと又土砂降に降出すのを、速男は舌打して見遣るのであつた。

床間には和洋の書籍や、新聞雜誌や、スクラブブックなぞが亂雜に取散らされて居て、捜しても容易に詩集が見付からぬらしいので、園枝は見かねて、「貴方、今日で無くても可い事よ、何うせ最う要らないんですから。」

「何所へ紛込んだか……慥か袂へ載せて置いた筈なんですが……」北小路は座に還りながら、

「掃除する時に片付けたと見えますから、後で婢に捜させます。」

「いえ、其れには及びませんの。」と膝を進めて、「尾ひまでお讀みなすつて？」

「讀みました、彌張巧いものですね。」

園枝は和り頷いて、「其内にも『顯世』が好いでせう？」

「骨ら折つてあるし、長い事も長いし、那れがまあ一番謹慎へがあるやうで……後はほんの添物でせうが、然し、ソンネット風の短い物の中

にも、那の男の才氣が迸つて居て、棄難いのが有る。」

「ですが、彌張『顯世』が好いでせう？」と繰返し訊ねる。

「好いには無論好いが……恁う言ふと又關の事を貶すやうだけれど……詩として那れなぞ甚麼ものでせうか？『顯世』よりか彌張短い物の方が、渾然たる藝術品では無いですか知ら？」

「ぢや『顯世』は藝術品ぢや有りませんの？」と不平さう。

「藝術で無いとは言へないが、少くとも渾然たると云ふ評は與へられない。第一空想に乏しい、讀んで居て人をヂスインテレストする力が……究り脱我させない。一言に評すると、自分の性情閲歴を其儘强ひて藝術の形式へ盛上げたもので、其れが決して惡いのでは無いが、充分に未だ詩化されて居ないやうだ。技巧の白粉で骨を折つて塗隱さうと爲て居る下から、露骨な生地が些い〳〵透けて見えるから、讀んで居ても時時冷りと爲る。何だか作家自身の人格……とまで丶無くても、那の男の性情がチラ〳〵目に浮ぶやうで……是は然し、僕が關を知つて居るからか知れないので、脱我しないのは這箇の罪かも知れないが……」

「然うですわ、其れは貴方が關さんを知つて被居るから、それで然う取れるんですわ。」

「然うかも知れません。」と北小路は速男の方を見た。

速男は廊下に立つたまゝ默つて聞いて居たが

「君は、ぢや、那の唱つてある思想を何う思ふね？」

「彌張近代思想と云ふのだらうね。戀愛たの獸

樂たのに渇して、生活の欲望を無限に遂げやうと云ふ點。それから、道義上の努力や苦痛を避けて、義務も責悪も無く、我より外には何等の尊むものも無いと云つたやうな極端な個人主義……關自身に言はせたら、從來の消極的道德に代るに、積極な、自由な、新道德を以て爲ると云ふのだらうが、究りは放縱な無道德に陷つて居る。」

「うむ、僕も然う思ふんだ！」と意を得たやうに言つて、速男は元の茵に歸る。

其れを憎らしさうに園枝は見遣つて、「兄さんは、關さんの事を貶しさへ爲れば喜ぶんだわ。」

「園枝は又、關の事となると無上に賞めるんだから。」

「僞よ！」と赤くなつて、「無上に何も賞めや爲ないわ。以前は其れは崇拜した事もあるけれど……」

「此節は冷めたのか？　はゝゝゝ。」と突拍子な高笑。

「それは、崇拜は爲なくなつたけれど、兄さんのやうに那樣貶しは爲なくつてよ！　私、彌張好意を持つてゝよ。」と言つて、園枝は濟した顏を爲て横手の掛額に目を遣る。

「俺だつて何も、好意は些とも變りや爲ない！けれども、好意は好意、缺點は缺點、園枝のやうに闇雲に盲拜しないばかりさ。」

「モウハイつて何？　妙な新熟語ね！」とプリプリしながら、改めて北小路に向つて、「性情閲歷が唱つてあるから――關さんの人格や性情が目に浮ぶから、『黙世』を讀んでも貴方は冷りと爲る事があると被仰つたが、那樣に冷りと爲るやうな厭な性情や、閲歷か那の人に有りますの？」

「いや『黙世』にある通りな閲歷が實際に有つては大變だが、」と微笑して、「僕の言つたのは、性情其物の閲歷と云ふ意味です。空想や借物では無い、那の男の躬ら閲し來つた心の閲歷、情の眞の閲歷を有りのまゝ忌憚無く發表して居ると云ふので――尤も、近代文學の其れが特色だらうが……特色を些と街ひ過ぎて、却つて眞以上に誇張されて居るかとも思はれるが、左に右く僕は、『黙世』を讀んで一層關の人物が能く分りました。」

「何う？」速男が傍らから。

「何うと云つて『黙世』の中の戀愛でも生活でも皆利己では無いか、頻りに神と云ふ事を言つて居るが、神が彌張自我の影で。尾ひの方は又汎神論のやうな傾も見えるが、其れだつて實在即ち我なのだから、我以外に、恐らく宇宙も世界も那の男には有りは爲さい。だから、美の世界とか淨樂界とか云つても、一面に肉や物質の滿足が否定出來なくて、煩渇して居るのが能く分る……」

到頭、人生觀だの世界觀だのと彌喧しい事になつて了つたので。北小路も勞めて論じて見たが、閑手にも能くは分らぬやうだし、自分でも厭になつて、「……舍さう、這麼面倒のお喋りは。寧ろ是は關の領分だ。」と言つて、中途で歇めて了ふ。

「然うだ、那樣人生だの宇宙だのつて、耶蘇坊主の演說見たやうな事は、僕にも分らん。」と速男は飾氣無く、「だが此の、一口に言ふと利口過ぎるんだね。利口過ぎて、何事も先づ自分の利害得失から打算する……」

「利害得失から打算する人が、那麼に何も彼も犠牲にして悔さないのは不思議だわ。」と獨言のやうに言つて、園枝は横を向いて手帛で胸を扇ぐ、フハ〳〵とリヽイの白い薫。

「犠牲にして悔まないつて？　小野の一件か？」と那邊を見向いて、「那れだつて何時まで永持するか何うか……事に由つたら最う冷めてるかも知れんよ。七日か十日と言つて歸つたのが、一月の餘にもなるのに未だ出て來ん所を見ると。」

「では、關は未だ出て來ないのだね？」と北小路は問いた。

「出て來ないんだらう。出て來りや、僕の所へ是非知らせる用もあるんだから。」

「然うか。」と頷いて、難しい顔を爲て腕を組んだが、暫くして、「何か然ういふ形迹でも有るのかね？　冷めたと思はれるやうな。」

「でも、郷里にや許嫁が有るんだし、永く居りや居るほど怪しいぢや無いか。何時かの君の話のやうに……そら、洋食屋の娘とかを迷しといて突然郷里へ姿を隱して了つた、彌張其傳ぢや無からうかと思ふので……歸つてから、着いたつて端書を一本寄來した限、僕の方へも更ぱり便が無いし、それに、何時までも此の、永引いちや成らない事情も有るんだが……或ひは當分最う出て來ん意りで、それで打遣つとくのぢや無からうかと僕も疑つてるので。」

「果して然うだとすると、いや、實に怪しからん男だ！」と北小路は何時に無く躍起となつて言つた。

園枝は最う何にも言ふまいと決めたやうに、堅く唇を結んで、淸しいパッチリした目に凝いと北小路を見詰めて居る。

北小路は再び腕を組んで默つて了つたが、飲半しの茶を干すと、銀瓶を取揚げ、戸部燒の急須に湯を注がうと爲て、一雫も無いのに驚れて暴に電鈴を押した。が、女中が用を聞きに來た時には、最う何で呼んだのか忘れたらしく、「ええと……待つてくれ、何だつけ……」

「湯ぢや無いか。」と速男が注意する。

「あゝ然う、湯が無い。」と湯沸を女中に渡して遣つて、其手で白麗摩の單衣の襟を掻直すと言つた。「今の其の、高等學校時代の話で思出したが、那時僕は、關の事を眞面目に戀愛なんぞ爲る男で無いと言つた……」

改つて那樣事を言出したので、速男も園枝も怪訝さうに顔を眺める。

「那れは間違つて居る、眞面目に戀愛を爲ないのでは無い、那の男は出來ないのだ——少し意味が違ふ——園枝さんは情熱家だと言ふし、僕は又薄情な人間のやうに言つたが、何らも當を得て居ないので……ツルゲーネフの『ルージン』を又思出すが、其中に主人公を評して、渠は頭が冷たいので無く、血が冷たいのだと云ふ意味の事が言つてある。關も其れで、自分では物事眞面目に、獻身的に、魂を打込んで夢中になりたい、犠牲にもならうと云ふ美しい心は始終持つて居る——高等學校時代にも其點は僕も認めたので——けれど、那の男の慣むべき一面の性情は、終に戀愛さへ自我を忘れて夢中になる事が出來ないのだ！　利口だから先が見える、先が見えるから自然臆病で……それなら、險難な戀愛なぞに指を染めなければ可いが、其所は又意志が弱いから、情を抑へて凝と我慢を爲るほどの克己心も無いし、見す〳〵先は何うなると

云ふ事も知つて居ながら、對手を御い利己の犠牲に爲て了ふ。了つた結果は、然う云ふ冷酷な——自分の爲めに一身を過らした者を打遣つて身を隠すと云ふやうな、冷酷な事も爲なければ成らないやうになるので……」

速男は大きな手で顔を一つ撫でて、「だが、出て來なからうてのは僕の唯想像で、今度は些と此の、面倒な事で關も歸つたんだから、其爲めに遲れるのかも知れんから……」

「然うですとも！　少し永引いたからつて、其れで最う冷めたと言ふのは甚いわ。」然う言つて園枝はクル〳〵とハンケチを揉固めて袂へ藏ふと、「兄さん、私、先へ歸つても可くつて？」

「何だ！　出抜に。一緒に歸つたら可いぢや無いか。」

「たつて、兄さんは未だお話が有るんでせう。」

「まあ可いでせう。」と北小路は笑顔を向けて、「關の惡口は最う言ひますまいから。」

「あら、何も那樣……」と園枝は目の緣を仄と染めたが、外を見遣つて、「雨も丁度今小降ですし、歸つて少し用事も有りますから……」と茵を下りて、「兄さん、可いでせう？」

「ちや、俺の俥も一緒に歸れと言つてくれ。」

園枝は一人先づ歸つた。

北小路は玄關まで送出して置いて、座敷へ歸ると笑ひながら、「園枝さんの御機嫌を損じたやうだ、餘り關の惡口を言ふものだから。」と座に著く。

「關崇拜だからね、那れは。」と速男も笑つて、足座を搔直しながら、「然し、邪魔しても可いんだらうね？　僕は。」

「可いとも、僕も別に用事は無いのだから、緩

くり談し給へ。」

「それなら可いが……」と小兒のやうな顔を爲て和々しながら、「僕は、未だ實は飯前だが……ビイルを一本拔かしてくれ給へ。」

「飯前なのか？」と呆れて、「今頃まで何うしたのだ？」

「病院で食はうと思つたんだが、園枝が厭だと言ふものだから。」

「園枝さんもそれでは腹が空いて居たらう、早く然う言ば可いものを。」

「園枝は何有、家へ歸つて食つた方が勝手なんだ。ビイル丈で、下物は何にも要らんよ。」と勵る、未だ命じやうとも言はぬのに。

北小路も思はず笑を洩らして、「ビイルもビイルだが、何か腹の膨れる物を食べたら可からう、何なりと言ひ給へ。」

「全く要らんのだ、却て水菓子か何か腹に溜らん物の方が可い。」

「それではと云ふので、北小路は女中を呼んで、速男の言ふまゝにビイルと水菓子を命じて遣つた。自身には一切アルコオル分の物を口にせぬので、付合ひにヂンヂヤエルを一本持つて來さする。

「時に、關の女だね、小野とか云ふ……」

「うむ、何うか爲たかね？」

「小野とか云ふ女は、」とコップを献してビイルを注ぎながら、「懷姙して居るさうだ！」

「何？　懷姙してる！」速男は愕然として、飲懸けたコップも下に擱いて、「事實か？！」

「事實らしい！　僕も妙な方から聞込んだので……」

其所で北小路は、自分と二宮舍監との關係を

談して、其れから聞いた今日の顚末を速男に話つたが、然し、自分の緣談に就いてとは有繋に明かさなかつた。

聞終つて、速男は濃い眉根を寄せながら、「ふむ……そりや然し、女も困つてるだらう！　關に早く上京するやうに、僕から手紙を遣らう。」

「然う、然うして遣り給へ、今更關が責任を避けるやうな事があつては、女が可哀さうだ！」

「精神的だとか、ブラ何とかだとか口ぢや言つて居ても……」とコップを取擧げたが、凝と其れを見入つて、「那の女が……懷姙したか！」と聲を落して太息を吩いた。

何だか自分の手から出た物でも、餘所へ行つて毀されたやうな氣持が爲る、自分の物では無いが惜い！　手にしたビイルも忘れて了つて仄やり速男は外を眺めたが、雨も最う霽ると見えて天が明るくなつた。

「甚く考へ込んで了つたね。さあ、まあビイルを注がう。」と北小路は勸める。

氣が付いて、速男はグッと一息に干すと、更に盈々と注いで貰ひながら、「だが、關も今些つと困るだらう！　學校も未だ一年あるし、書生中に那樣――言はゞ私生兒なんだから……可哀さうに、那の男も始終煩悶の絕えん男だ！」

「煩悶と云ふが、何有、那の男の煩悶は海上の浪見たやうなもので、些つとした風にも恐しく激するが、心の底は極めて冷靜なのだから……自我の強いと共に、自信……とも違ふ、自惚とでも云ふのか、物事を易く見て、上面をスーと撫でて通ると云ふ質で、人間が存外眞面目で無い。だから、一度自惚も何も無くなつて了ふやうな大打擊に打突つのも那の男の藥で、而して

眞の煩悶も爲て見て、成程自分は、小い微なものだと正直に覺らない事には、何時までも眞面目な人物には成れないのだ。（少し考へて）然し、又、藥が餘り强過ぎると、那いふ意志の薄弱な男だから、或ひはメチヤになつて了はうも知れないが……」

「え、此のお方が、今朝程電話を戴いたとかで……」と其所へ番頭が名刺を持つて來た。

受取つて見て、北小路は頷いて、「何所か空いた座敷へ通してくれ。」

「では、每もの三番へお通し申しませうで、へい。」

番頭の立去つた後で、速男が、「お客か？　何なら僕は歸つても可い。」

「何有、活版屋の主人さ。直き濟むから、君は緩くりビイルでも遣つて居てくれ給へ。」

「活版屋とは、妙な客だね？」

「今度實は社會主義の雜誌を起さうと思つて、印刷の見積を爲したので。」

「雜誌を？」速男は不思議さうに、「君が遣るのか？」

「雜誌を手始めに――大學院なぞ行らないからボツ〳〵活動して見る積りだ。」

北小路は立つて行つて、床間に置いてあつた活版の見積書を搜すと、曩知れなかつた詩集が出て來たので、「あ、園枝さんに是を返すのを忘れた、君歸る時に持つて行つて貰はう。」

詩集は精々五六十ページばかりの小册子であるが、小口へギルトを施して、白の肉厚の紙表紙に、琴の圖と『うつしよ』の四字を、銀で打込にした菊判半切の切放し。北小路が見積書を持つて出て行つた後で、速男は何の氣無しに其れ

を取擧げると、中に挿んであつた二枚掛のブロマイドの寫眞がハラリと膝の上に落ちた。拾つて見ると、其儘吸付けられた如く瞳が据つて了ふ。

旋て、目が覺めたやうに顏を撫廻して、溜息を洩らしたが、寫眞を投げ出すと、徳と立つて廊下へ出た。雨は歇んで、所々青い空が見えて、雲間を洩るゝ烈しい眩い日射に、綠の滴るやうな澤かな庭樹は喜ばしげに輝き渡つて、簷の梧桐の雫が玉の如く廣葉を煌めき零れる。爽かな新しい大氣と、鮮かな光とが滿ち流れて、濡色の最う乾揚る中に蒸すやうな夏の匂が爲る。

偶と足音が耳に入つて、見ると、北小路が歸つて來たのであつた。

「最う濟んだのか？」

「何うも失敬した。」と座敷へ入ると、北小路は直ぐ寫眞に目を付けて、「おや、何所から是が出たい？」

「其の本の間から。」と外を見ながら答へて、「君の其りや妹さんか？」

「何時か君に談した……是さ。」

「名は？」

「綾子」

「綾子さん――好い名だ！」と振返つた速男は、日に燒けた男らしい顏をパッと眞赤に染めて、キラ〳〵輝く目に北小路の目を直り見詰めたが

「君、妹さんを僕に下れ！」

十四

電氣と瓦斯と、滿圃の白光然ながら水中の世界を見る如き夜の日比谷は、ゾロ〳〵と魚のやうに涼の人の身輕な姿が續いて、有樂門から心

字の池の邊は白地の浴衣の絕間無き中を、斜に公會堂の敷地へと拔けて、人影稀疎な所へ出ると、欽哉は立留つて繁を待合せた。浴衣著のまま帽子丈冠つて、女の歸るのを送つて來たのである。

「歩くのが難儀ですか？」

「いゝえ、那樣でも有りません。」

「ちや、公園の中を少し散歩しませう、色々未だ話も有るから。」

二人は並んで、今は花壇に爲てある公會堂の敷地の細道を縫ひ行く。繁は袴に靴、手に蝙蝠傘を突いたが、今日欽哉を訪ねて、京橋の佐藤の所へ來た其の歸りなので。

「佐藤の診斷でも、最う其れに疑無いやうですね？」

「え、私何うしたら可いでせう!?」

「何うも困つた事になつた！」と欽哉は頭を掉つた。

道の兩側は草花の植込で、百合や、天笠牡丹や、グラヂオラスや、夜目には濃い一色に咲き競つて、萩も最う可也に茂つた枝が白い葉裏を見せて睡つて居る。早咲の黃蜀葵が電氣の影に仄白う幻の如く、夜露に濕つた花の匂は色々に交つて、チユベローズの甘い薫のみパッと際立つて來る。醉へるが如き夏の夜は、折々重い太息を吁くやうな風の戰めきと一緒に、昆蟲の微な羽音が聞える。

プンと鼻先へ翔つて來たのを欽哉は手で拂ひながら、

「實に困つた！　繁さんも何故最つと早く、其れが氣が付かなかつたんでせう？」

「何故つて……最つと早く氣が付いたら何うか

なりまして？」

「……」

「彌張同じぢや有りませんか。困つた〳〵と言つて被居らずに、何うしたら可いか、貴君も眞劍に考へて頂戴よ！」

「實に何うも、困つた事になつて了つた！」と彌張其れを繰返して、「今日佐藤も言つてたが、我々が全く不用意だつた！」

「其れを言つたつて、最う恁うなつてから爲方が無いわ。」と繁は俯れて小聲に言ふ。

「爲方が無いけれど……何しろ貴方には濟まない！　元はと云へば僕が――皆僕が惡いのだから。」

「那樣過去つた事なんか何うだつて可い事よ！　那樣事より、差當り何うしたら可いか、其れを貴方……」

「だから、佐藤とも其れを相談したんだが……」とマジ〳〵繁の顏を見遣つたが、其儘欽哉は躊躇して歇めた。

花壇は盡きて、二人は運動場へ出た。カラリと開いた大廣場は青白い明かり一面、曉の海を見る如く、廣い明るい中を影繪のやうに人が動いて居る。外れの方は段々淡く靄が立つて、人影は其中へ消えて行くので、靄の上から遙に愛宕山の燈がチラ〳〵星のやうに見える。

で、餘りにパッとして居るのが、何だか一緒に歩くのに嚔がましいので、足は自ら躑躅丘の方へ向いて、火取蟲の撒いたやうに落ち散つた燈柱の下を曲ると。繁は又もや、「ねえ、何うしたら可いでせう？　佐藤……さんですか、那の方に相談なすつて、それで何うしたの？」

「何うと云つて……」欽哉は立留つて見返した

が、「然し、那いふ男の言ふ事だから……」と辭を濁して歩き出した。

「何の方はそれで――結婚問題の方は何う爲ました。」

「何う爲るも爲ないも、這麼體ぢや貴方……」と怨しさうに繁は見擧げて、「貴方も些とは私の身になつて察して下さるが可いわ！　體は體で通し最う厭な氣持ですし、色々考へれば考へるほど只唯情無くつて、此の二三日と云ふもの獨りで泣いてばかし居ますの。昨夜なぞも明方まで睡られなくて、夜一夜床の中で泣いて居ましたの。這麼風で續いたら、尾ひには私、氣が違や爲ないかと然う思つてよ！」

「だが、僕の又此頃中の惱惱と云ふものは有りませんでしたよ。那箇の高氣でも言つたが、僕こそ全く氣が違ひさうで……」

「私は、那樣浮いた事ぢや無いんですもの！」と遮つて、「私は貴方、此事から研究科の方も歇めて了つて、學校との關係絶つて了つたし、それに、國の方へ知れでも爲たら、母や皆が甚麼に情無く思ふか……私最う親同胞に顏向け出來なくなつて、それこそ家へも寄付けない事になるんですもの。」

「けれど……貴方は浮いた事と思ふか知らないが、僕には何うして、精神上の大打擊です！」と自分の事のみ欽哉は言つて、「繁さんは一體然う云ふ氣だから平氣で戀か棄てられるんだ！　棄てられた僕の苦痛も、彌張それぢや貴方には分りますまい。僕は實に懊惱した！　最う一度貴方に會つて見て、それでも終に貴方の心が動かなかつたら、僕は斷然東京を去つて了ふ意りで……憖ひ東京に居ると、色々思出すやうな機

會も多いから、傷けられた身に到底も堪へられない苦痛だ！　絶望の上に那樣又苦痛を受けて居た日には、それこそ頭が狂ふも知れないから切めて絶望の悲丈でも紛れるまで――紛れるか何うか分らないが、暫く旅行でも爲て、何所か恁う寂しい誰も來ない所で、獨りで心行くまで物を思ひたい！　苦い冷い涙で此の新しい傷を心行くまで洗ひたい！　と然う思つて……僕は東京を見棄てると共に、當分最う學校も何も棄てゝ了ふ覺悟だつた！　繁さんには浮いた事か知らないが、僕には――是限或ひは半生を葬むるやうな……」と聲が顫へる。

「那樣――貴方のやうな有望な方が、那樣事の有りやうが無いわ。」と一口に言消して了つて、繁は男の顏から目を逸らすと、「それは、浮いた事と言つたのは惡かつたか知りませんけれど……でも私は、貴方のやうに最う紛れるの、紛れないのと言つちや居られない場合なんですから――差當り今困るんですから。」

「僕だつて、精神上の苦痛は……」と欽哉の言懸けるのを、引手繰るやうに、「精神上々々と貴方は被仰るけれど、私は精神上の騒ぢや無いんですもの！　體が最う這麼のですもの！」

「繁さんは又、自分の體の事ばかりヤイ〳〵言つて、全で僕の苦痛は洒落か何ぞのやうに思つてる！　肉體ばかりが苦痛ぢや無い！」と欽哉も息卷く。

「だつて、心の苦痛と違つて、體の事は何う自分で思つても、最う成るやうにしか成らないから氣が揉めるぢや有りませんか。未だ恁うして目に立たないから可いけれど、段々是が人目に立つやうになつたら、私何う爲やうかと思つて

……女は全く悠うなると可哀さうだわ！　男と違つて體に、あの……何なのだから……」と胸先を抑へる。

「體に何で無かつたら、濟して結婚したのだらう！」と思ふと、欽哉は我知らず皮肉な冷笑が口元に浮んだのを、自分ながら恐しい氣が爲て唇を結んだ。

「本當に、私ばかり這麼愁い報を受けて、貴方は一向……平氣で被居るのが羨しい！」と更に繁は言つた。

が、欽哉は最う何にも言はずに默つて歩いて居る。躑躅丘を廻つて、小い石橋を渡ると、壽泉池とか云ふ彌喧しい名の池に、鶴の噴水が涼しい音を立てながら、瓦斯の火影に白銀の霧を散らして居る。群を拔いて黑く巨人のやうに突立つた女夫銀杏を心に、籠りと植込が深いので涼の人も爰まで入つて來るのは少なく、二人は仄暗い藤棚の下を通つて、池に臨んだ印度式の阿屋に、欽哉が先づ腰を下すと、繁も默つて一緒に腰掛けた。

汀に茂つた菖蒲や燕子花や、池に沿つた草木の青葉は濕どに噴水の繁吹を浴びて、濡色が白熱瓦斯に照らされて、影が水に映つて、池も周圍も燐光に包まれたやう。シウ〳〵八方に噴上げる水は銀の音色を咲かしながら、サ、、、と水晶の瓔珞を綴つて落ちるのが、冷い玉の光をハラ〳〵ハラ〳〵池に射還して、小波キラ〳〵と真母の鱗を織り湧して居る。

サッと風が渡ると、繁吹が紗のやうに白く顏に當つて冷々と涼しい。ムシヤクシヤして居た二人も、自と胸が清々しく、差當る苦勞も斷く忘れて了つて、欽哉は莫を取出した。

葉出な首抜の浴衣を着た若い女を連れて、同じ阿屋に休んで居た商人風の男が立去ると、繁は其の背後影を沁々見送りながら、「何でせう？今のは」

「今の二人？」

「え。夫婦でせうねえ！」

然う言ふ顔を、欽哉はチラと偸見て、「夫婦なものですか、無論夫婦ぢや無い！」と力を入れて打消す。

「然う、私又夫婦かと思つて……」と俛れて、凝と考へて居たが、「人の事なんか何うだつて……それよりか、何う爲たものでせうね？私」

「えゝ、けれど……」妙に慌てゝ、「けれど、お互に今未だ一緒になる譯にも行かないし……ねそれで困る！」

「え、貴方も然うだが、私なんか到底も其れは出來ないんですから。」と繁の答も恁うで、「親に默つて結婚するなんて、私、那樣譯には行かない體なんですから。」と言つて力無い溜息を爲たが、急に又苛々した調子で、「本當にもう、何う爲たら可いんだらう？！　關さん、貴方も何とか考へて下さらなきや困るわ！　私にばかり這麼思ひを爲せて……」

「僕だつて色々是で頭を惱してるんだから——繁さんのやうに然う言つたつて爲方がありや爲ない！」

「たつて私、體の方が何時まで然うは……貴方は御自分の體で無いから那樣事を言つて居られるけれど、私は……私獨り困るわ！」と身を揉みながら、ハンケチで目を掩つた。

腕を組んで默然と眺めた欽哉は、一つ唾津を呑んで、「たが……幾月にも未だ成らないんでせう！」

「貴方は那樣……御自分の體で無いものだから……」と同じ事を言つて繁は啜揚げる。

「幾月にも成らないんだから……佐藤も實は然う言つて居たが……」

不意にガサ〳〵としてポタッと云ふ音、欽哉はギョッとして邊を見廻したが、其れは熟した木實でも枝を落ちたのらしい。目に入るものは水の煌めきと、木葉の靑光と、遙に運動場の方の人聲か、噴水の音に絡んで潮の騷くやうに聞えて來るばかり。

「佐藤さんが、何うあの……？」と涙の顔を擧げて繁が訊ねると、欽哉は又遲つて了つて、「ですが……まあ最う一度能く問いて見ない事には……尤も、品性は那麼でも醫術の方には精通して居るから、那の男が受合へば大丈夫だけう！」

「貴方は那樣……御自分の體で無いものだから……」と同じ事を言つて繁は啜揚げる。

「幾月にも成らないんだから……佐藤も實は然う言つて居たが……」

不意にガサ〳〵としてポタッと云ふ音、欽哉はギョッとして邊を見廻したが、其れは熟した木實でも枝を落ちたのらしい。目に入るものは水の煌めきと、木葉の靑光と、遙に運動場の方の人聲か、噴水の音に絡んで潮の騷くやうに聞えて來るばかり。

「佐藤さんが、何うあの……？」と涙の顔を擧げて繁が訊ねると、欽哉は又遲つて了つて、「ですが……まあ最う一度能く問いて見ない事には……尤も、品性は那麼でも醫術の方には精通して居るから、那の男が受合へば大丈夫だけれど……」と獨言のやうに言ふ。

「何か大丈夫ですの？　那の人が何う受合つて？」と繁は氣に爲る。

「だから、能く最う一度確めて見なければ……」

「ですからさ、何を確めて見なさるの？　佐藤さんに。」

「佐藤にですか……」と額に手を當てゝ、「醫者だから、單に生理上の合理的といふ事しか考へないのだけれど……佐藤は究り然う言ふんですな……」と面を振起した向ふに、生憎人影。

パナマの帽子に薄羽織なぞ翻つかせた連中が池を廻つてゾロ〳〵這裏へ遣つて來るので、欽哉も言縣けたのを歇めると、繁が、「行きませう、人が來て煩いから。」とベンチを放れる。

一緒に阿屋を出て、其所から竹林の方へ曲ると、背後で、「例の墮落式部かな」「いや、淫賣か

も知れん」などと口々に其の連中の聲。繁は面を掩つて獨り先へ駈出した。

一方は檜や松の常盤木、一方は孟宗竹の隙間も無く植つた密林の向ふから、大通路の電氣燈が朧に照らして、細い寂しい歩道を當も無く繁は行くので、欽哉が後から聲懸けて、「那樣方へ行つちゃ損ですよ。」

繁はハタと立留つた。

後れて來るのを待合せて、行成、「貴方、結婚して頂戴な！」

「え、何です？　出抜に。」

「悔しいわ！　私。」と男の腕に縋付いて、「那麼……那麼事を言はれて……」

「充らん事を。」と始めて分つて苦笑を爲ながら「何か言つて見るんでさ。見ず知らずの者が通懸りに言つた事を、何も那樣、氣に懸けるがものは無いぢゃ有りませんか。」

「いえ、此事ばかりぢゃ有りません、是から屹度最う色々な事を人に言はれてよ！　言はれても爲方が無いんですもの、女の操を破つて、内密で這麼……這麼淺ましい體になつたんだから……」

「……」

「ね、此體じゃ私、國へ知れても言譯の爲やうが無いわ！」

「然し、」と欽哉は重々しく口を開いて、「繁さんは今激して居るから、能くまあ氣を落着けたら可いでせう。つい曩、何うしても親に默つて結婚出來ないと言つて居たものが、突然那樣事を言出して、僕には氣紛れとしか思はれない。」と言ふと、縋つて居た女の手も自然に放れる。

繁も其實を云ふと、今迄眞面目に欽哉と結婚

する氣なぞ無い、唯然う言つて見た丈で。

二人は何時か霞門へ向つた大通路へ出た。行手に聳えた海軍省の大建物に、今宵は燈火の影二つ三つ睡さうに窓を洩れて、櫻田外のお濠から蛙の聲が絶々に聞えて來る。と、欽哉は偶と故郷の夜景色が胸に浮んだのであつた。

氣が付いて、鈍くなつた足を急に早めながら、

「さあ、まあ繁さんも、餘りクヨ〳〵思はないで……思つたつて爲方が無いから。」

「爲方が無いと云つちゃ居られませんもの！」

「何うにか成りますさ。佐藤が言つてる事もあるし……何れ手紙で詳しく言ひますよ。」

「曩から幾度も其れを被仰るが、那の人が一體甚麼事を言つてますの？」

「手紙を上げますよ、口で言つて、貴方の肚に落ちないと困るから。」

「手紙も、口で伺ふも同じぢゃ有りませんか？」

「手紙を上げますよ。」と欽哉は强情に繰返す。

「然う！」

「いよ、海老茶式部！」と不意に呶鳴られて、二人は喫驚して左右へ離れた。

其間を、故と割つて通つた職人體の男、「畜生！　旨く逃つてやがら。」

「姉くない！　見ともねえ。」と連の男が言ふと、へゝゝゝと厭な笑を爲た後から、二人に當付けて、冷汗の出るやうな下懸りの唄を唄つて行く。

「旦さん、最う私可いから、爰でお別爲てよ！」と繁は泣聲になつて言ふ。

「でも、濠端まで送りませう、道が寂しいから。」

「いゝえ、爰で最う可い事よ、外へ出れば俥に乘りますから。」

「俥が直く有れば可いが、無いと困るから。」

「未だ宵の口ですもの、有りますわ。」

丁長然し、竹樋兵營の消燈喇叭が鳴り出したのである。

十五

唯さへ凌ぎかねる此頃の暑さを、繁は身重の體を扨て痿々と早に凋む花の如く窶れて行く。時ならぬ惡寒に顏も青醒め、身内も冷くなるかと思ふと、急に又火のやうに赫と逆せて、物を食へば嘔すし、消化の不良に加へて、近頃更に睡眠不足に襲はれるのであつた。で、氣怠い體を畳もウツラ〳〵と寢床に横へて、白いシーツの當つた敷布團にモスリンの小掻卷、枕元には健胃劑の水藥と、牛乳の罎が其儘口も附けずに置かれて、僅に蜜柑の汁ぐらゐを吸つて凌いで居る。

繁が綺麗好の所から、机も本箱も片隅に位置正しく、部屋は毎ものやうに屹んと片付いて居るが、何しろ六疊一間の所へ寢床で場を取つて了つて、枕元に坐つた欽哉も窮屈さうに割膝を爲て居るぐらゐ。母屋とは渡縁になつた離屋建で、前は少しばかりの植込に續いてカラリと開いた苗木圃、周圍も相應に透いては居ても、一方口で風の通さぬ爲めに日中は可也暑い。薄曇のドンヨリした日射を浴びながら、植込と圃の間にダラリと垂れた六角堂の藥柳は、折々甦るやうに枝の戰くのも見るが、庇内に釣した風鈴は凝として音もせぬ。唯遠近の蟬時雨のみ日ねもす啼頻つて、風も其れが食み盡して了ふのかと思はれる。

此の狹い暑くるしい所に惱しい身を垂籠めて、話對手と云つては母屋の夫婦ぐらゐな者だが、是とても話對手と云ふ丈で何の力になるのでは無し、唯獨り途方に暮れ、悔悟に責められながら、一日悶え悶えて泣いて居るのかと思ふと、欽哉も沁々可哀さうで成らなかつた。是から更に殘暑の苦熱が續くし、轉地とまでは行かぬも、切めては何所か涼しい家を捜して轉宿したらばと勸めても見たが、其れすら今は思ふに任せぬ繁の境遇。

と云ふのが、學校を欲めて、縁談の方も斷つて了ふと同時に、二宮舍監から其旨を繁の郷里へ通知して、本人が恁く恁くの次第故、是迄の話は一切水に流すと云ふ手紙が行つた。其丈の通知で、校醫から聞いた繁の體の事なぞ有繁に云つては遣らなかつたが、郷里では乗地になつて居た縁談を、娘が一了簡で斷つて了つた上に、學校も突然欲めたと云ふのであるから、大いに怪んで、左も右くも直ぐ歸郷せよと母から促して來た。けれど、此儘今歸られる體で無いから、繁も一日延しに延して居る内に、宜しい！　歸郷せねば送金も留めるとばかりに、今度は姉婿の嚴しい手紙で、現に先月の宿料も未だ拂へずに滯つて居る始末。尤も、爰の家とは繁も古い馴染で、案外深切者の植木屋夫婦は、今の渠の境遇を太くも氣毒がつて居るのであるから、少しぐらゐ滯つたとて厭な顏なぞ見せも爲ないが、然し轉宿するとなると是非其れは片付けねば成らぬし、且つ、送金を絶たれながら馴染も無い家へ移れば、其月から直ぐ最う困らねば成らぬのも目に見えて居るので。

が、那樣事よりも、新に又降つて湧いた當惑は、姉婿が今度愈よ繁を迎に來ると云ふ知らせで。出拔に出て來て、否應無しに連れ歸る手筈

なのを、姉が心配して、知つての通り一國な人であるから、逆らつて間違なぞ無いやうにと、内密で先へ注意して寄來したのである。

欽哉も今日は其事で來たのであるが、相變らず困つた困つたと繰返した擧句が、何うです？ 姉さんからも然う云ふ手紙が來て居るのだから一應まあ歸つて見たら。」と言ふのであつた。

「貴方は――だから、私の身になつて考へて下さいつて始終言ふんですわ！ 這麽體を爲て國へ歸れるか歸れないか……」

「歸れないと云つても、連れに來れば厭でも一應は歸らねば成らんでせう。それに、送金の方も被居工合だし、强ひて恁うして居るのは、繁さんの爲めに不得策だと思ふので――段々其内に身が詰つて、僕が學資を絶たれて苦しんだと同じやうな苦境に陷らなければ成らない。尤もそれは、學校の方も卒業して、立派に最う自活の資格が出來てるのだから、僕の困方とは又違ふけれど……」

「駄目よ。」と繁は力無げに首を掉つて、「今度の事で學校との關係が絶えて了つたから。何うして貴方、學校からでも盡力して貰はなかつたら、田舍の女教員にだつて、なかなか此節は口が無いんですつて。何にしても私、情無い境界になつて了つたわ！ ね、何とか爲なければ、此先最う……此儘ぢや私……全く死にでも爲るより道が無いわ！」と苛々する内に、面は眞赤に逆上せて來て、「何も、貴方ばかし惡いと云ふんぢや無いけれど……あゝ、何うして私那麽氣だつたんだらう！ 取留も無い事ばかし思つて、全で夢見たやうな事を本氣になつて喜んで居たんですもの！ 恁う爲れば那成るとか、先の事と

か、那樣事は些とも考へてなかつたんですもの！ 眞面目で無かつたんだわ、ねえ。」

二人の戀は、其の夢見たやうな事を本氣になつて喜合つた中に出來たので、其れを喜ばなくなつた今は、究り戀の後始末で――後始末と云ふものは何に由らず厭なものである。お互に身勝手も出れば、義務や責任の塗付合も起る。

然し又、恁う明樣に女の方から、戀が醒めたと云はないばかりの事を言はれて見ると、欽哉は腹が立つよりもグッと癪に障る。自分とても恐らく末の末懸けて戀したものでも無い事は、内々心の内で承知も爲て居ながら――で、欽哉の心持を正直に言つたら、何うせ一度は醒める戀だ、醒めたのは腹も立たぬが、這箇が先に醒まさなかつたのが悔しいのであらう。

「自分は元々戀なんぞ何でも無いのだ、醒めやうと醒めまいと、苦しむのは那箇ばかりだらう！」癪に障つた餘りに、欽哉は管はず然う言つて遣らうかとも思つた。けれど、髮は亂れて、汗ばんだ額の後毛頻く、空色メリンスの袴下をグル〳〵卷の襟が擴つて、胸の邊のムックリした肉附も冷さうに青白み、鎖骨も現に頸筋細つて、惻々しいほど窶れた繁の其の姿を見れば有繋に不憫でもある。片手を襟に挿込んで、片手に下腹を抑へながら、何やら考込んで面を垂れたが、眞岡の浴衣の膝が崩れて、中形の秋草模樣にポトリ〳〵搾り落すやうに涙の露を浸染ませて居るのを見ては、欽哉も胸が塞がつて言はうと思つた事も出なかつた。

「最う然し那樣憎まれ口を利くがものは無い」と思返して、而して冷靜に心も落着くと、辭も優しく、改めて繁に歸國の利を說いて勸めるの

である。

恁うして居れば段々身が詰るばかりだと云ふ事を繰返して、今郷里の方を慍らして了ふのは最も不得策だから、言ふまゝに素直に歸つて、其上で何とか又策を講じたらばと云ふので、

「……其の手紙の樣子では、何時最う迎に來られるか知れないので、一應まあ國へ歸つて、左に右く爰の所を一時無事に濟すより他には、差當り何うも爲方が無いでせう。」

「無いでせう？　然う！」と繁は尻拗りに引取つて、「全で最う人の事のやうに――貴方は實に冷淡だわ！　不關獻身的だの、犧牲が何だのと口癖のやうに言つて那樣つて、今になつて那樣……不關被仰つた辭に對しても、貴方は……」

「那樣事を言つたら、僕より繁さんは何うだ！」と賣辭に賣辭で、「何時か、那の高臺で貴方の態度は何うでした！　僕は然う思つて居た、那麼に綺麗に擦付けたのだから、二度と最う繁さんから便も有るまい、有れば、それは結婚の通知ぐらゐだと……」

「歸さん！　貴方那樣事を今更持出したつて、」と行成遮つた繁は、目に一杯涙を溜めながらも、眞面に男の顏を見遣つて、「私を虐めるんだわ！　那樣……那樣事を貴方は持出して……其事とは性質が違ひますもの！　那時は未だ恁ういふ體と分らなかつたけれど、恁う分つて見れば、此事は是非貴方に御相談しなけりや成らない事ですもの。」

「だから、體の事が無かつたら、繁さんも那限僕なんか顧みなかつたのだが、今になつて……ね、貴方も現金だと云ふんでさ。」

「ぢや貴方は、私獨りで始末しろと被仰るんですか？！」と悔しさうに身を顫はせて、ハラ〳〵涙を零すと、「分つたわ！　貴方の心持は――私獨りに押付けて了つて、貴方は知らん顏をなさるお意りなんだわ。」

然う言はれて見ると、欽哉も有繋に躍起とならずには居られぬ。

肩を聳して、「繁さん、僕は未だ其程卑劣な人間ぢや有りませんよ！　是でも自分の責任くらゐは知つてる！　怪しからん事を――何時僕が、貴方獨りに押付けるやうな事を言ひました」

「國へ歸れ〳〵つて、妄みに私を歸さうとなさるぢや有りませんか？」

「妄みに歸さうと爲るんぢや無い！　那程利害を說いてるのに……」

「それは貴方の利害でせう！」

「然うですか！」欽哉も艶として横を向いたが、暫くしてから、「僕が自分の利害で勸めると思ふなら、繁さんも斷然歸らないと決心なさい。貴方さへ決心すりや、僕も亦其のやうな方法を取るから……」

「方法と云つて？　でも、歸らないと決心したつて、義兄が迎れに來るんですから……」

「いや、然うなれば最う義兄も郷里も無い、お互に世間を捨てゝ了ふので、二人が身を隱すのです！」

繁は、顏を見詰めたまゝ、默つて居る。

其目を避けるやうに、欽哉は些つと目を庭へ逸らした。屋根を越えて西日の影が、薄蟄の煙つたやうな中へ黃金色の光線を斜に放射して、其所丈サッと際立つて眩しい黴塵の中を、細かい羽蟲の群が纏れつ潛りつ爲て居る。日脚は餘程最う傾いたらしい、風は悉皆絶えて了つて、柳

の葉も動かぬ。

「何うです？　其迄の決心が出來ますか？」

「出來ないのを知つて〻言ふんだわ。」と繁は心に思つた。

「到底も出來ないでせう、阿母さんの言ふ事なら甚麼事でも――平氣で戀を棄てやうと云ふ親孝行の繁さんですものな。」と賞めるのか訓すのか分らぬ言方で、「まあ〳〵、素直に國へ歸つた方が貴方の爲めに安全でせう。」

「貴方こそ、御自分の安全ばかし圖つて被居るんだわ！　這麼體で歸つて、私、何で安全なものですか！」と繁は激するばかり。

欽哉も亦同じやうに言返さうと爲たが、何時まで這麼言ひたい事ばかり言合つて居ても果しが無いし、繁の身になれば激するのも無理は無いと思直したので、涙に洗はれた其窶顏を凝と眺めながら、今度は沁りと言つた、「繁さん、貴方は僕の言ふ事を惡い方にばかり取つてるやうだが――僕も獨い腹が立つから心にも無い事を言ふのだが――實はね……虛心に聞いて下さい……國から連れに來ると云ふ繁さんの昨日の手紙で、僕は昨夜一晩マンジリとも爲ずに考へ明して、佐藤にも相談して見るし、色々是でも心配し拔いて來たんですよ。僕が單に歸れと勸めるから、何か繁さん獨りに押付けて了つて逃げでも爲るやうに、一概に冷淡たとか、知らん顏を爲るとか……然う取られるのも全くそれは爲方が無いかも知れない、けれど、僕の又今の境遇も考へて下さい、今の僕の身では外に何うも策の出やうが無いのだから……自分ながら餘り意氣地が無いと思ふけれど愁し突飛な事を爲て繁さんを一層窮境へ落しでも爲るよりか、先づ

まあ安全でもあり得策だとも思つて、それで歸國を……勸めるのぢや無い、繁さんに賴んで一時僕が然うして貰ふのだ！　恁う差迫つちや何うにも最う方法が無いので、然うして貰つて一時爰の所を延ばせば、其内には僕の方でも何とか策を謀ずるし、繁さんも一應歸つた上で、國の方との折合も好くして、而して又上京すると云ふ事も強ち難事ぢや無からうと思つて、ね、それで僕は勸めるんですが……」

「え、貴方の被仰る事は能く分つてよ……」と頷いた繁は、聲と袂で面を掩つて了つた。漸う心が解けると共に留度無く堰上ぐる涙の間から

「それは、貴方の被仰る事も無理とは思ひませんけれど……でも、恁ういふ體を爲て、到底も私……」

「其れは察します！　繁さんの愁い事は充分察するが、暫く其れを辛抱して貰ふので、體の方も幸ひ未だ、今の所ぢや目に立つほどでも無いから……」

「目に立たないつて、それは貴方が男で御存じないからですよ、女が見れば直き分りますわ。」

「然し、佐藤に聞くと、外の病氣でも同じやうな徵候のある事が有つて、醫者でも些つと斷定に迷ふと云ふから……胃病とか何とか、未だ詐して詐されない事も無いでせう。」

「駄目よ！　母は自分で最う三人も生んだ經驗が有るんですもの。義兄だつて貴方、左に右く醫者ですし、詐すなんて到底も駄目だわ！」と固く首を掉つて、「それに、體だつて此儘ぢや居ませんし、何時まで胃病で通るものですか。」

「何時までなんて、那樣永い事ぢや無いので……」

「永く無くつても、何所か悪いと見れば、義兄だつて直ぐ診察せずには措きませんし、然うすりや忽ち現れて了ふぢや有りませんか。」

是には欽哉もグッと詰つて了つた。

「繁さんは、成程、義兄さんが醫者でしたなあ！」と太息を吩いて腕を組んだ。

「義兄も、最う明日あたり出て來るか知れませんが……私……私何う爲う！」とばかり、枕に顏を當てゝ、繁は忍音に泣伏したのである。

欽哉は固く腕を組んだまゝ投首して居たが、旋て思餘つたやうに兩手で頭を攫んで、衝と起つと、其の手を兩脇に支つて、緣側を那邊這邊行きつ還りつ爲る。汗に張附いた浴衣の上から骨細な體の痩も現はに尖つた肩の邊、ヒクヒク刻みながら忍泣に泣いて居る女の姿を、怜しさうに見遣つては、足を留めて、何か言ひたさうに屏を動かして見るが、何うも言出し悪いと云つた風。遠近の蟬の聲も衰へて、西日の影が段々薄れて來る。

「寧そ……身を隱さうか知ら。」と程經つてから繁が呟いた。

欽哉は思はず立留つて訝しさうに眺めたが、何ういふ意りで言つたのか、色に讀まうと思つても、俯いたまゝ顏を見せぬ。で、冷な眼色して、首を掉つて、又歩き出すと、繁は思出したやうに身を揉んで啜泣げる。

不意に涙の顏を擧げて、「這麼體なんか、最う……此儘無くなつて了へば可いに！」

「では、何うです？　最後の手段として……繁さん。」と喉へ引掛るやうな聲で然う言ひながら欽哉が敷居の内へ入らうと爲ると、緣側の舞戸を開けて母屋の上さんが來た。

「何うも蒸熱いぢや御座いませんか、袴でもお脱りなすつたらお宜しいに。」と欽哉に愛相を言つて、それから、「小野さん、貴方湯を取りますから、些いと汗をお流しなさいましな。」

繁は慌てゝ涙を拭つて、「有難う、今日は私、何う爲やうか知ら……」

「一日然うして被居つて、氣味がお悪いでせう、お拭きなさる丈でも……」

「ですが……氣分が少し何ですから、今日は舍しませう。」

「然うですか。ぢや、直きに御飯を持つて來ますから。」

「え、持つて來て戴いても空ですから——欲しい時には私の方から言ひますから、彌張支度せずに措いて下さい。」

「でも、然う何にも召上らなかつたら、體が弱りなさるばかしですよ。無理にも少し召上れな。」

「欲しい時には言いますから。」と繁は同じ事を言つて斷る。

上さんの立去つた後で、欽哉は、「最う那樣時刻かな。」と始めて心付いたやうに邊を見廻した。

部屋の中は何時か薄暗くなつて、蚊が出て來た。煮物の焦げる匂が母屋の方から鼻を衝いて來る。二人は默込んで了つて、夕の色の次第に濃くなり勝る中に仄やり相向ひ合つて居たが、欽哉は内々最う歸る切懸を待つて居るので。上さんがランプを點けて持つて來ると、繁に、「僕は最う歸りますよ。」と出抜に言ふ。

繁は默つて顏を見たが、上さんが行つてから、「此儘歸つてお了ひなすつちゃ、私途方に晦れる

れ！」

「ですから、此間手紙で云ふと言つた事ですね。」と袂を探つて、「書いたまゝ出さずに居たが今日其の手紙を持つて來たから、まあ讀んで御覽なさい。」

「然う、拜見。」

所へ、上さんが又來て「小野さん、小石川の……そら、那の方が被來いましたよ！」

「え、小石川の？」

「能く先に被來つた……そら……」と上さんは自分で牾しがつて「そら、那の方ですよ！」

「園枝さんでせう！」と欽哉が言ふと、繁は色を變へて、

「あの、香浦さんですか？　お上さん。」

「然うです〳〵、其の香浦さんです。」

「會つちゃ拙い、僕は歸らう！」と行成欽哉は起つた、「手紙は爰に置きますよ。」

帽子を眞深に冠つて、沓脱の下駄を引掛けると、足早に庭を出たが、井戸の横の仄暗い常磐木の蔭で、丁度母屋の方から來る園枝と行遇つた。先方はヒヨイと足を留めたが、欽哉は顏を背向けて衝と木戸を出たのであつた。

木戸の外には、香浦の定紋の附いた印燈を點けて、俥が一臺待つて居た。通へ出ると、欽哉の足は次第に鈍くなつて、何やら考込みながら終に立留つて了つたが、仄白い地平へ朧に映つた自分の影を見て、偶と仰ぐと、低く覆冠さるやうに掻曇つた雲の切れ目を、眞圓な月が侘しさうに覗いて居る。

「舊の十四五日ぐらゐかな。」暫くして、「然うだ、今日あたり最う豐穣の祇園祭だ！」

欽哉は深い溜息を洩らして、頭を垂れたが、急に急々歩き出した。行手の空には、電が走つて、大氣は重く死んだやう。

十六

寢床を揚げる間も無く、其儘二つに折つて片隅へ押寄せたが、部屋の中は暑いので、敷居際へ縞蓆の茵を敷いて園枝を誘じた。場末で蚊が多いからと言つて、母屋の上さんはブリキの蚊遣器を持つて來るやら、麥湯の冷したのを汲んでくれるやら、以前能く繁の所へ遊びに來た頃園枝に些い〳〵心附を爲て貰つた覺があるので自ら持成振も格別なのである。

で、お希しいの十度びも繰返して、漸く上さんが引退ると、其の背後姿を園枝は見送つて、

「相變らず深切ね。」

「え、那れで最少し口數が少ないと可いんですけれど……貴方使つて頂戴、蚊が甚いんですから。」と繁は團扇を薦める。

「何うしてもね、周圍に樹が多いから。」と團扇を取りながら、「其代り涼しいわ。」

「餘り涼しか無い事よ、此通り風が更ぱり入らないから。」

「今日は別だわ——蒸すのね。」と這麼事を口では言つて居るが、曩から沁々繁の樣子を打戍つた園枝は、我にも無く目を潤ませて、「小野さん、貴方窶れてねえ！」

出抜で、繁は面食ひながら、目映しさうに火影を背向けた顏を兩手で掌つて、「那樣に窶れて？」

「え、頰なんか全で見遣へるほど瘦せたわ！」

「始終あの、體が快けないものですから……」と小聲に答へながら、俛れて些つと襟を合せる。

「隱しても知つてるわ！」と園枝は心で呟いたが、口へ出しては氣毒で言はなかつた。

話を變へて、「何は……何う爲すつて？　驚さんは――未だお國から出て被來らなくて？」

「えゝ……」と曖昧な返事を爲て、繁は思出したやうに自分の團扇で對手の周圍をハタ〳〵扇ぎながら、「藪蚊だから、螫すと痛い事よ。」

園枝は默つて其顏を眺めて、獨り小首を偏げた。曩井戸の横の薄暗で行違つた男の姿が、何うも腑に落ちぬのである。

繁は又、今頃園枝が出拔に訪ねて來たのが訝しくて、「今日は、何らへか貴方被行つたお歸りなんですか？」と改めて問く。

「え、學校まで些つと――二宮先生の所へ。」

「二宮先生の所へ？」

園枝は頷いて、「私、到頭結婚する事になつたの！」と言つて、美しい頰をサッと染めた。

二宮！　結婚！　繁の頭に忽ち閃くものがある。

「まあ然う、お愛でたいわね！　夫は何ういふ方？」

と强ひて何氣無げに訪ねても、息が喘む。

「法學士なの。」

「法學士――的り然うだ！」と思ひながら、「法學士で、而して？――何れ貴方の理想的の夫？」

「いゝえ、」と園枝は首を掉つて面を垂れた。密と目を拭つて、「私、何だか氣が進まないので、唯ね、阿父樣を安心さす爲めに、爲方無しに承知したの。」

其話に由ると、園枝の父の尙德は痼疾の胃病が終に病腫となつて、然かも老體の上に療治が手後れて、所詮最う永くは無いとの事。で、今

度の縁談は父や兄が大乘氣で、父は命の有る內に、是非娘の身の定りを見て安心爲たいと言ふし、兄は兄で、其の法學士が自分の氣の合つた友達である所から、這麼良緣は又と無いやうに勸めると云ふよりは寧ろ强ひるのださうで。

「阿父樣か――まあ然うですか！」と言つて、繁も暫く辭が無かつたが、又遠廻しに、「それでお兄樣のお友達と被仰ると、彌張東京の方？」

「いえ、京都の者で――今は尤も這邊ですが――京都の公卿華族で子爵だものだから、それで阿父樣は那樣に乘氣になるのよ。人爵なんか、私些とも有難か無いわ！」

繁の目には妬しさうな色が見えた。

「それで、二宮先生の所へ被行つたと云ふのは――何ですか、二宮先生が彌張あの、中にでも立つたので……」

「え、那の人が最初言つて來た話なの。」

「では、お話が纏つて、今日は貴方御自身に、(妙に力を入れて)お禮に被行つた其のお歸りなんですね？」

「あら、お禮なんかに、私……」と園枝の言ふのを冠せるやうに、「だつて、お話纏つたんでせう？　ね、纏らないのに二宮先生の所へ被行る筈が無いわ。氣が進まないなんて僞！　貴方は嬉しいものだから、人にも聞かせて羨ませやうと思つて、それで私の所へお寄んなすつたんでせう？　乾度！」

始めは評ふのかと思つたが、顏が恐しく眞面目なので、園枝は怪訝さうにマジ〳〵見戍つて居る。

「本當に、香浦さんは人が惡いわ！」と言ふ聲は頭へて、只の厭味らしく無い。

「何と云ふ邪推だらう！　這麼人ぢや、無かつたに。」と園枝は情無く思つた。究りは恁ういふ今不幸な身に陥つて居る所から、自然那様僻も出るのであらうと察すると、一倍氣毒でも有るが其の氣毒な所へ、何か自分の幸福でも炫かしに來たやうに取られるのも愁い。

で、「小野さん、貴方那様風にお取りなさるのは甚いわ！　貴方は知らないけれど、私は……私は一度最う……何して了つてから……」と切切に言つて、ハンケチで目を抑へて、「其限最う、私の胸には愛なんか無いんですから——甚麼夫を持たうと何うせ無意味なんだから、唯父や兄の言ふなりに任して、今度の縁談だつて、自分と云ふものは全で無いものに爲て居るんですもの！　這麼事は、人の最う妻となつたら口へも出せない事なんだから、其前に、園枝は一生恁うして寂しい思を胸に祕めて送るのだつて事を貴方に……切めて貴方丈でも同情して貰はうと思つて來たのに、貴方は……貴方はそれだのに……」

「堪忍して下さいよ！」と矢庭に手を取つて繁は言つた。目を數瞬いて、「ね、私つい厭な事を言つて……貴方の心持は能く知つてゝよ！　けれど、貴方は御自分を那様に悲觀して被居るが、一緒にお暮らしなさる内には、其内には又夫婦間の愛情と云ふものが發りますから……」

「だつて、無い愛情が、後になつて必ず發るやら、其れは當にならない事なんだから。」

「御自分で努めて發さうと爲すれば——能く能く心に滿たない夫なら左に右く——何時まで那様、愛情の發きないつて事無いでせう。」

「那様努めて發さうとした愛情なんか……でも

何だか神聖で無いやうだわ。」

「然うでも無いでせうよ……」と伏目になつて、ホッと溜息を洩らした繁は、旋て誠の籠つた輝く目を凝と向けて、「香浦さん！　貴方那様、決して悲觀なさる事無いから、正しい暖な愛情を持つて、何うぞ幸福に暮らして下さいな！　貴方は志操が堅固だから、今迄だつて過も無いし、是からも屹度幸福よ！　私なんか意志が弱いものだから、つい女の道を迷つて了つて、今では沁々後悔して居ますの。お話爲たくも出來ないやうな情無い、悲しい今の身の上で、此先甚麼事になるか……！到底も最う幸福なんて望んでも望まれないし、何うせ私、薄命で一生終らなきや成らないでせうよ！　ねえ香浦さん、女と云ふものは些つと間違ふと、最う其れで生涯の運命が決つて了ふんですもの、實に……傷いわねえ！」と言つて、ハラ〳〵涙を零した。

園枝も耐らなくなつて、俄と其の痩せた手を握緊めながら、「那……那様心細い事を言つて！……關さんは何う爲すつたの？　何故貴方、早く關さんと結婚なさらないの？」

「結婚したつて貴方、今未だ爲やうが無いわ！」と打遣るやうに言つたが、「然う云へば、貴方の結婚は何時？」

「えゝ……」些つと迷付いて、「父が那様のですから、何れ最う急でせう。」

「急に最う？　然う。」と頷いて、繁は又溜息を吶いて俛れる。

宵から南の方の空で光つては居たが、此程遥に遠雷の轟くのが聞えて、雷鳴嫌の園枝は思はず耳を聳てた。

「法學士、子爵……」と繁は獨言ちて、「ぢや最

う近い内に、貴方は子爵夫人ね？」

「厭よ！」と言つた園枝の顔は、心から厭なやう。

其所へ、母屋の上さんが遣つて來た。園枝の車夫が、若し未だお手間が取れるやうなら、些つと夕飯を濟して來たいから、お嬢樣に御都合を伺つてくれとの事だが、如何でせう？　家の茶漬ではと愛相の好い事を云ふ。然し、餘り遲くなつても家で心配するし、それに空模樣も怪しくなつて來たので、園枝は直ぐ歸支度を爲たのである。

別際に、「是で最う、貴方にもお目に懸れないかも知れませんねえ！」と繁は涙含んで言つた。

「何故那樣心細い事ばかし被仰るのよ！　私又遊びに來るわ——結婚したつて相變らず來てよ。ね、貴方も以前のやうに些と被來つて下さいな！」

繁は何か未だ言はうと爲たが、色の褪せた唇を顫はしたのみで歇めた。

園枝の歸つた後で、繁は行成床の上に身を投出して了つて、枕も浮くばかりに獨り泣いたのであつた。心行くまで泣いてから、偶と欽哉の置いて行つた机の上の手紙に氣が付いて、披いて讀懸けると、見る〳〵顏は土色に變つて、體を戦々顫はせながら、額に冷い汗が流れる。讀終つてから、其の周圍を捜すと、机の脚の蔭に新聞紙で裹んだ小罎が置いてあるので、怖々包を解いて、ランプの火に罎を透して見ると、中には赤黒い液體。

外は悉皆曇つて了つて、仄暗な庭の隅でジーと引入れられるやうな虹蚓の音が爲出した。墨の如き濃い闇を劈いて銀色の電　閃先に閃くと

何所かの梢で喫驚したやうに一聲蜩が啼いて、雷は近くはなつたが、未だ蚊遣の煙を靡かすほどの風も動かぬ、蒸熱い、而して物凄い夜であつた……

十七

其夜、十時頃から終に降出して、四時間餘りと云ふもの、息も吋けぬ凄じい雷雨であつたが、三時頃から次第に小降になつて、旋て簷の雨垂音靜に、人々漸う穏な睡に付いた所を又叩起された。主の佐藤は宵に出たまゝで——希しくも無い事だが——先生の留守を可い事に、代診も書生も激しく門を叩く音に目は覺しても、夜中の往診を厭つて容易に返事も爲なかつたが、外で呼ばつて居るのを聞くと、「大塚から來ましたが、這箇に醫さんと云ふ方がお居ですか？」と云ふので。

欽哉は愕然として飛起きたのである。

無論繁の使で、急病だから直ぐにと急立てらるゝまゝに、前後の考へも無く、慌てゝ欽哉は寢衣を著更へて飛出した。使は植木屋の亭主である。

連立つて逆々繁の容體を聞くと、昨夜は那の雷雨で、母屋の方が雨漏を爲出した爲めに、捨てゝも措かれず、亭主の起出たのは彼是一時頃だつたらう。其の次手に離屋の方を見廻りに行つて、始めて繁の只ならぬ容體を知つたのださうで、其時には手足が痙攣つて、亭主の見た所では瀕死と少しも違はなかつた。驚いて介抱しながら、女房と共に交る交る大聲に呼んで見たが、繁は最う心神朦朧として言ふ事も惚けて居る。其内に段々氣は遠くなつて行くし、何うし

て可いか素人には手が附けられぬので、左も右くも近所の醫者を叩き起して、直ぐ來て貰つて、漸う其の手當で落著くには落著いたが、引續いて又發るかも知れぬと醫者も言ふし、繁も夢中で欽哉に會ひたいと言ふから、旁大急ぎで迎ひに來たとの事。

「……女の癲癇は些と色消だが、醫者の言ふのぢや、何有、藥に中つたんださうで。」と亭主は言足した。

「量が過ぎたのか知ら?!」と欽哉は青くなつて口走つたが、急込んで、「外に言つてなかつたかね？　醫者は。え、君、外に何とか？」

「外に？　然う〳〵、身重だらうと聞くから、噂か然うだと言つたら、何だか變な顏を爲て歸つたつけ。」

「仲で行かう！　俥は無からうか？」と氣を揉み出す。

「俥ですか？　然うですね、夜明しでも巧く出會しや可いが……俥しろ三時ハ……」と大きな嘆を爲て、「畜生！　昨日は滅法暑かつたが、昨夜の雨で俄に涼しくなつたやうだ。其筈さね、土用も速うに明いて、木犀がポツ〳〵咲出したんだもの。」と肩を窄めて、亭主は浴衣の上に端折つた紺の印半纏を引合せる。

何樣、夜明前の大氣は雨擊句の水氣を含んで冷々と秋のやう。空は綺麗に晴れて、星影冷く、月は西に落懸つて、鈍い其光を脊に、家や、電柱や、立樹や、濃い影が黑く密りと聳つて居る。淡く水蒸氣の立つた仄暗い大道は、晝よりも町幅廣々と續いたが、軒燈が所々睡氣に消え殘つて、藏ひ忘れた氷屋の旗が昨夜の雨に濡朽ちたまゝ、バタ〳〵朝風に動いて居る外には、見渡す限り深として、自分等二人の足音のみ耳立つ。

明易い夏の夜の段々東が白み懸ると、逸早くも新聞配達の鈴の音や、牛乳配達の車輪が聞え出して、欽哉は心も心ならず行く内に、彼是道の半分も來た頃、漸と俥を一臺見付けて、自分丈一人先へ飛ばした。頭は混亂して、俥の上でも唯早く〳〵とのみ夢中で躁つて居たが、大塚の手前の唯ある大寺院の前まで來た時、境内の松林で不意に銀鈴を振立てるやうな、高く曉の空に啼出した蜩の淸しい透通る聲を聞くと、突然、死には爲まいか?!　と云ふ恐が電のやうに頭を掠めて、慄然とする。

「あゝ、可哀さうな事を爲て了つた！　助かつてさへくれゝば、自分は最う其麼犧牲も厭はぬ！」と思つて、兩手で脊と胸を抱いた。

植木屋の木戸口で俥を乘棄てゝ、欽哉は苗木圃を通つて直ぐ離屋へ廻つた。離屋は未だ雨戸が閉めてあつて、一枚丈僅に細目に爲てある。其所を開けて入ると、立籠めた生暖い空氣がムッと面を打つて、曉の蚊の聲細く、白々と明行く外の色が戸の隙間から縞のやうに射込んで、ランプが燻つたまゝ未だ消さずにある。

繁の枕元に坐つて居た上さんは、「おや」、と振返つて、小い聲で「被來いまし。今ね、少し顯々して被居いますから……」

欽哉は頷いて、無言のまゝ其横に坐つた。

見ると、一晩の内に繁は全く面色が變つて了つた。それで無くても窶れて居た顏が、更に削いだやうにゲッソリ肉落して、目は窪み、小鼻は尖り、頰骨が立つて、顎も突出た。緋メリンスの括枕に振亂した黑髮が、血の氣の失せた灰色の面に掩懸つて居るので、顏が殊に小く尖

つて見える。青白い死の影を宿したやうな額に苦痛の痕が深く皺に刻まれて、ジリ〳〵と切なさうな膩汗が浸染んで居る。顔にも手にも、絶えずピク〳〵と襲るゝやうな痙攣。

此の變果てた淺ましい姿を見ては、欽哉も耐らなくなつてホロ〳〵男泣に泣いた。悔恨やら恐怖やら、身も世も有られぬ思で、齒を喫緊りながら、ワク付く胸を抑へて啜り腕を組んだが體がガタ〳〵顫へる。

思はず駭揚げて、小聲で上さんに、「助かるでせうか？」

「さあ……」と上さんも不安らしげな目を爲て「お醫者はね、別段那樣難しさうな事は言ひませんけれど……何しろ大變な下血で御座んして、悉皆お弱りなさいました。」と囁く。

「此儘、親も一緒に闇へ行くのぢや無からうか？」と心に思つて、欽哉は悚然と爲た。

今の所では、大分落着いてお居でのやうであるから、此間に朝の支度を爲て來るからと言つて、後は欽哉に托して置いて、上さんは母屋へ歸つた。机の上のランプも此時汕が盡きて、ポツポと二三度焰が立つと、フッと消えて、眞黑に煙つた火屋の口から搖々騰る油煙の匂は鼻を突くやう。庭では雀が啼出して、部屋の中も明るくなつた。

偶と、薄墨を含んだやうな繁の唇が動いたので、欽哉は固唾を呑んで見成つたが、口邊に縺れた髮毛を密と掻退けて遣ると、手が頰に觸つて冷りと爲る。繁は暫く又口をムグ〳〵させて、フッと目を開いたが、瞳は最う散いて了つて、枕元の人顔が謝別出來ぬやう。

凝と見詰められたまゝ、欽哉は息を凝らして

居ると、旋て掠れた弱々しい聲で、「お上さん、未だあの、關さんは……？」

「繁さん！　僕が分りませんか？」と叫んで、搜細つた女の手を握緊ると、手は氷のやうに冷い、顔を差寄せて、「僕關ですよ！　繁さん。」

「え？……關さん！」とばかり、繁は男の膝に泣き縋つた。

「繁さん、赦して下さい！　僕が惡かつた!!」と言つて、湯のやうな涙をハラ〳〵浴せる。

「いゝえ、いゝえ、私が自分で……自……自分で求めたんです！」と聲を搾つて、絶入るばかりに泣いたが、不意に涙の目を擧げて、見えぬ瞳に凝然と欽哉の顔を見入りながら、「貴方、結婚して下さいな！　私と。」

「爲ますとも！　爲るから、早く元の體になつて下さい、ね、繁さん。」

「私最う、助からないかも知れません……」と言ふと、全身劇しい痙攣に戰いて、「死……死ぬにしても私、結婚してから死にたい！」

欽哉は何とも言はずに、行成繁の冷い額に接吻した。

「ちよいと〳〵、大變ですよ！」母屋の上さんが慌てゝ飛んで來る。

「何でッ？」と欽哉は思はず繁の手を放す。

「今警察から……爰へ見えます！」

「え、警察から？」と色を變へて立懸けたが、直ぐ繁の耳に口を寄せて、「何も貴方言つちや可けませんよ！　皆僕に任して置くんですよ！　ね、僕一人で引受けるから……」と辭忙しく言含めたのである。

上さんは急いで雨戸を繰る。朝風冷りと渡つて、苗木圃の横の傘のやうに茂つた多行松の蔭から、厳めしい二三人の靴音！　佩劍の響！

秋之卷

一

ルネッサンス式の嚴めしい煉瓦門は、白綠色に塗られた鐵格子の扉と、鐵鋲の一面に鎧はれた欅の扉と、二重にハタと閉されて、永劫開く時も無いやう。秋の夜の深沈たる空を抜いて、巍然と城の如く聳つた門屋根を斜に、銀河の影淡く流れて、利鎌のやうな殘月が蛇腹の端に落懸つて居る。高くアーチの上の鰻石に點された電氣の青白い光は、辛うじて地面へ屆いて、赤い煉瓦と白い石帶とで疊揚げられた柱の裾に、黑く凍付いたやうに二つの人影。

一方の柱の前に小く立つた衞舍の中から、眠さうな聲が聞えた。「未だ放免時間には間が有るで、今から那樣所に待つとつても爲方が有りませんぞ。」

すると、二つの人影は何やらボソ〳〵囁合つて、旋て其所を離れて、門の直き前の、「御差入物取扱、御休息所」と書いた軒障子が一枚丈、仄と明の點して居る茶店へ入つた。

「お歸りなさいまし。未だ早う御座いましたでせう？」細帶に半纏を引被けた茶店の女房は、欠を噛潰しながら出て來て、二人の男女を店の横の小座敷へ案内する。

「何うせ未だお間が御座いますから、御緩くりなさいまし。」と言捨いて、框際の障子を閉めて行つた。

湯沸のグラ〳〵煮立つた火鉢を中に二人、女の方は小野繁で、男は繁が下宿して居た大塚の植木屋の亭主である。

「何うも、明方になると寒うがすね。」と亭主は唐棧の羽織の肩を搖動つて、火鉢の炭を攪げて、二三度火の上で揉手を爲てから、グイとランプの心を捩上げる。何所かで鷄の聲が聞えた。

「最う二番鷄だ！　追付け明るくなりませう。」

「えゝ、四時最う廻つて居ますもの。」と繁は時計を出して見て、其れを藏ひながら、「ですが、お氣毒でしたわね、這麼夜深に故々來て戴いて。」

「何有貴方、私も知らない方ぢや無し、是でも噂とね、毎日のやうに關さんの出てお來でなさる日を指折つて待つてたんですから、貴方からお手紙が無くたつて、今日は是非お迎に來る意りだつたんで。」

「有難う、關さんも甚麼にか喜びませう！　那麼事になつてから、引續いて裁判の決るまでと云ふもの、本當に最う御迷惑ばかし懸けて——御深切は沁々私も嬉しく思つて居ますの。」

「さあ〳〵、那樣事は何うでも……」と手を掉つて、「それよりか、私もね、正直な事を言ひますと、愈よ二年半と裁判が決つた時には、關さんの那の體で無事に勤め完されるか何うか、其れを實は案じたんですよ。恁うしてまあお迎に來て、無事な顏が見られるのは何より結構でさ。」

「ですが……然ぞ變つて出て來ますでせうよ。」と繁の聲は潤む。

「二年や二年半で、那樣に何有變るもんですか、食ふ物でも食はないで居るんぢや無し……」

「二年や二年半と云つて……未決から勘定すると、丁度全三年ですもの。」

「三年と云ふと永いやうだが、恁うなつて見ると、案外月日の經つのは早いものでさね。」

「でも、隨分永う御座んしたわ！」と言つて、ホロリと爲る。

「然うでせうとも！」亭主も衝い引入れられて、「隨分そりや、貴方の苦勞も大抵おや無かつたんですからねえ！　だが、關さんも無事で出てお來でなさりや、まあ苦勞甲斐が有つたと云ふもので、お二人共是から好い目も出るのでさ。」と慰めながら、明を氣に爲て又もや心を捩上る。

ジリ〳〵暗くなつたランプは一時パッと明るく、繁は目映しさうに目を細めたが、三四年前とは近視の度が進んだやうで、物を見る度輕く眉を皺めるのが癖になつた。一體寂しい方の顏立ではあつたが、其中に又オットリした溫みを持つて居たのが、最う然ういふ娘らしい媚は無くなつた代りに、何所か氣が利いて品も附いた。肉附の緊つた所爲も有らうが、顏も體も些と搜過ぎるくらゐ搜削のスラリとした姿に、角通しか何かのパッとした小紋の羽織を引被けたのが、恐しく意氣に見える。が、着物は彌張女學生好みの絕の入つた糸織の袷で、頭も例の束髮、薄紫紐の半襟の下には、肌襦袢の白い襟も重ねて居る。

薄く白粉を爲ては居るが、顏色が餘り好く無く、それに目頭から下瞶へ影のやうな隈が出來て、何所と無く深けた。と云ふもの〻數へ年の二十四、娘盛は過ぎても女は未だ未だ盛の花、青葉に見らる〻年でも無いので。額付から鼻筋の整つて美しい事は昔と變らぬし、何うかする拍子にパッチリ見開いて、長い睫毛の蔭に黑い

瞳が潤を持ちながら仄とした目を爲る――元からの癖で――其の若々しい目付が今も好い。

で、夜深しに慣れない楠木屋の亭主は、睡氣の催すのを話に紛らして、ガブ〳〵茶ばかり飲んで居たが、氣に爲たランプの心も盡きて消縣つた時、丁度監獄署の正門の開く音が爲て、茶店の女房も起きて來る。亭主は身繕する繁を牾しげに急立て〻、再び門前へ詰縣けたのであつたが、月は最う落ちて了つて、星影疎に、東の空も白み縣つた。

二重扉の欅の門丈開いて、未だ一重、外のは其儘網を張つたやうに閉された鐵格子の、扉の人一人潜らる〻丈の小門が、旋てガチヤリと響いて内へ開く。と、二年六ヶ月の刑期今日滿ちて、關欽哉は放免されて出て來たのである。

薄明に其と透して見ると、亭主は行成駈寄つて叫んだ。

「關さん！　お愛でたう!!　お迎に來ましたよ！」

欽哉は戰々と立竦んだまゝ辭も出なかつた。繁も亦、離れて突立つたまゝ足も聲も出なかつた。

左も右も茶屋へと云ふので、一同は先の小座敷へ引取ると、火鉢の周圍に丁と三人分の茵が揃へてあつて、ランプも取替へられ、座敷の中は心地好く明るい。

「御深切に、色々何うも……」と欽哉は始めて口を開いて亭主に禮を言つたが、其儘ハラ〳〵と涙を零して面を擧げ得ぬ。

「何しろまあ、貴女もお愛でたうがさ！　ね、何しろお愛でたい！」お愛でたいを繰返すより外に、亭主も挨拶の爲やうが無いので。

繁は繁で、胸が最う一杯になつて口も利かれぬ。暴から未だ一言も辭を懸けぬので、唯凝と欽哉を見詰めたまゝ、ハンケチを銜へてホロホロ泣いて居る。

見て居るに忍びないのと、一つは二人の間に氣も利して亭主が便所へと立つと、欽哉は漸う顏を擧げて繁を見たのであつた。

「繁さん。」

「は……」と答へた限、繁はハンケチで面を掩つて了ふ。

「繁さん。」と重ねて呼んで、先方が顏を見せると、實に、愁かつたですよ！」

「お繁し申してよ！　關さん。」

二人は湧出る涙を拭はうとも爲ずに、何時までも目と目を見合せて居る。

繁も變つたが、別けて欽哉は、此世ならぬ憂き月日の三年に殆ど昔の面色を失つて了つた。營養不充分の爲め色澤の惡いのは言ふまでも無いが、痩せて頰骨が立つて、昔のやうに活々と顏に引緊つた所が無く、唇冷さうに褪せ、目は疲切つたやうにドンヨリ濁つて、三年の月日は實に渠の青春を食み盡して了つたやう。

「這麼にも變つて了つて、昔の關さんに最う一度成れやうか？」と然う思ふと、何だか此先心許無いやうな氣が爲て、繁は情無さゝうに溜息を附いた。

間も無く、亭主は便所から歸つて來て、「何うです？　可い加減に妻を退擧げやうぢや有りませんか、ね、餘り明るくなつても妙で無い。」

「え、然うですね。」と繁も同じく、欽哉に、「では、左に右く佐藤さんの所へ落着く事に爲てありますから、那邊へ參りませう。那の人も、實

は最う京橋の方も退拂つて、お國へ立つ筈のを、貴方の出て被來るのを待つて延して居るんですから。」

欽哉は唯素直に頷く。

亭主が、「それで、伸ですがね、妻からぢや何だか車屋に顏見られるやうだから、私の所で些と休んで、それから伸で京橋へお出でなさるやうに、ね、然ういふ事に小野さんと相談爲ましたから……貴方も體が疲れてお居でなさるのに歩くのも大儀でせうが、妻から何有、大塚まで譯は有りません、私が手を貸して上げますから少し我慢なすつて……嘸ずや其意りで、飯でも暖に焚いて待つてませうから、那れにも會つてやつてお下んなさい。」

「色々何うも……濟みません！」と言つて、欽哉は心弱くも又涙を零す。

「ぢや、着物をお着更へなさいな。」と勸めて、繁はメリンスの風呂敷包を解縣ける。

「着更へたものかね？」

「着更へつ了ひなさいとも！汚らはしいから。」

と亭主。

曩出獄の時獄衣と着更へて、未決の折に差入れて貰つた袷に羽織、然ほど着古しても居ないが、欽哉は言はるゝままに帶を解く。

繁は風呂敷包を開いて、新大島の綿入に秩父銘仙の書生羽織、何れも仕立下しで、襦袢に足袋に兵兒帶、ハンケチも二枚用意して、それに革緒の立つた桐の薩摩下駄まで揃へてある。着物を重ねて、男の背後へ廻つて着せ被けて遣るとブル〳〵頭へて居るので、「お寒いのですか？」

默つて首を掉つて、手を通した袖で密と欽哉は目を拭つて、「勿……勿體ないやうで……」

「短かないか知ら？　丈は。」と獨言ちた繁は、耐らなくなつて蹤つた。裾の仕付を取りながら、火影に背いて密に泣くので。

旋て支度が出來て、一同茶店を出ると、仄々と白み渡つた夜明の空に、黒く聳ち續いた監獄署の建物を振返つて、「あゝ、恐しい三年だつた！」と欽哉は身を顫はした。

「那樣最う、背後なんか見つ事無し！」と遮つた亭主は、行手の天のサッと赤み懸つた東を見遣つて、「お、最う日の出だ、此の驅梅ぢやお天氣ですぜ！」

「お天氣になれば可いが！……厭な雲が有るやうだ、ねえ繁さん。」

「私は目が悪いから……何だか霧か有るやうぢやありませんか？」

二

花柳病、婦人病の通信治療、京橋佐藤醫院の廣告は、東京、大阪を始め、各地方の新聞を通して毎日目に觸れない事は無いくらゐであつたが、此の一月ばかりパッタリ見えなくなつたと思ふと、今度急に閉院して了つた。直接に診察も爲ず、單に患者が素人拵の容體書に由つて、治療法を通信すると云ふ事からして無責任な遣方で、究り花柳病だの婦人病だのゝ、誰しも醫者に見せるのを恥づる其の弱點を利用して、高い通信料を捲揚げるのが主意。で、詐欺的だの瞞着手段だのと新聞でも叩かれるし、地方人も追々狡が付いて釣られなくなつたし、それに警察でも注意を爲出して、爰等が最う見切時と察した佐藤は、一つは思つたほどに實入の無いのが厭になつたからでもあつた。盛に爲れば爲るほど廣告料に引けて、世間からは資本要らずの詐欺同樣に言れながら、彌張旨い汁を吸れぬやうに出來て居るので。

閉院すると共に都落と決めて、目欲しい物は悉く道具屋に拂つて了つて、後には最う醫療機械と自分の體丈。外に一人書生が居るが、是は苦學生搦りで、昔握つた俥の梶を何時でも亦握る覺悟であるから、家を疊んで了ふまでは、屋根代の出ぬ丈も、木賃宿より增くらゐに思つて殘つて居るのであらう。三度の食事は近所の仕出屋から賄はせて、其を食ふ茶碗も飯臺も、皆最う道具屋へ約束濟なのである。

普請は古いが、心去の柱に丙法長押、一間の床に一間の棚と云ふ物々しい座敷の眞中に、道具も何も無く、飯臺一つ据ゑて、白の毛布を茵代りに、欽哉と繁と、而して主の佐藤が手を叩いて酒を呼ぶと、「はあ！」と太い聲が爲て、例の書生が貧乏德利の口に繩の附いたのを提げて來る始末。殺風景と云ふよりは、寧ろ侘しい情無い感が爲る。別して欽哉は、暖い慰樂と趣味とに渇して居るのであるから、周圍の落莫が堪へ難い苦痛を感じたのであつた。

然し、三年此方乞匪も嗅げなかつた酒を久振に飲んで、猪口を二つ三つ重ねると、欽哉は最う好い心持に醉つて了つた。澤の惡い頬も紅に熱し、濁つた目も輝いて、手足は拔け去るやうに氣怠く、其儘横になつてボカ〳〵卷莨を貪り吸つて居る。

と、獨りでグビ〳〵遣らかして居る佐藤が、「君、莫も然う安みに吸ふと眩暈を發すですよ、酒と違つて、莫に醉つたのは耐らないものだか

ら。」と注意して、腰を探ると、一角枠の根附をダイと帶から拔取つて、金唐革の觀世縒の袋に猩々の六分玉の緒緊を附けた一下げの莫入を其所へ投出して、「さあ――君の未だ體では刻が可い、是を遣り給へ。」

「何といふ尊大な風だらう！」と繁は傍で憎らしく思つた。

が、當の欽哉は、昨日まで鬼畜の群に苦役されて居た學句で、人の言ふ事が皆優く嬉く、吸半しの卷莫を火鉢に突挿すと、金更紗の懷中筒を受取つて、煙管を出して刻莫を燻す。

「何が愁いと云つて、一番此の莫の吸はれないのが愁かつた。」

「誰も然うだつて事だね。まあ然し、君が一人で背負つてくれて、繁さんも體に狀が附かず、僕も證據不充分で危く助つた。同じ墮胎の幇助でも、醫師達姿なぞは一等罪が重いんだからね、それに、本人合意と云ふ事になれば、死に致さん以上君も六ヶ月以内で濟んだのだが、其代り繁さんも御同道を免れないので――左に右く君の義氣で人二人助つたよ。」

「義氣も何も、君に累を及ぼしては濟まんと思つて……」と欽哉の顏は曇つた。「だが、まあ其話は爲ない事にしてくれ給へ、僕も努めて忘れて了ひたいので。過去は一切過去に葬つて、是から全然新生涯に入りたいと思ふ。」

「結構だね。」と佐藤は盃を下に擱いて、「それで、君は差當り何う爲る考だね？　一應國へ歸るか？」

「國？　國へなんぞ歸られるものか！」とムックリ起直つて、「未だそへる間も無いから、何う爲るとも決らないが、何の道國へは歸らない！」

「ちや、這箇に倘くまで踏留まるので？」と頷くと、繁の方を些つと見遣つて、「繁さんも無論それを希望されるだらうし、僕も至極賛成だ。今國へ歸ると云ふのは、君の體面上些と面白くないからね。所で、這箇に踏留まるに就てはだ、君も出て來たばかりで然ぞ困るだらうから、其邊の便宜も圖らはうし、僕の又、力で出來る事なら御相談にも乘らうぢや無いか。」

「有難う、君の好意は實に謝す！」と感激の目を潤ませて、「何うか力になつてくれ給へ。僕も最う半生を葬つて了つたのだから、是から又新しく築き揚げて行かねば成らないし、人が二年で進む所を、一年にも半年にも努力せねば追著かないのだからね。努力は覺悟だが、然うして力になつてくれる人が有れば、何の位心强いか知れない！」

「何故那麼弱い事を言ふんだらう！」と繁は齒痒く思つて居る。

「世の中の事は、究り力に成りつ成られつで、お互さ。」と言つて、佐藤は飲半しの盃をグイと空けると、「君、最一つ獻じやう。」

「最う僕は澤山！　肱量が爲さうだ。」

「久振だからね。」と强ても薦めず、其盃を繁に向けて、

「貴方何うです！　お一つ丈。」

「いえ、私は少しも行けないんですから。」と斷つて、繁は德利を取揚げ、「貴方まあ……お酌爲ませう。」

「然うですか、恐縮ですね、關令夫人のお酌では。」

繁は和りとも爲すに、唯默つて注いだ。

其を又一息に干して、佐藤はハンケチで口端

を拭ふと、綺麗にピンと撥た髯を兩方に拈上げて、一時に、曩も些つと談した通り、這箇を退拂つて、愈よ豐橋の方で開業するとなると、是非誰か、土地の有力者に庇護して貰はねば立行かないのだが――學士とか何とか肩書でも有れば左に右く、僕なぞのやうな無名な者が、突然知らない所で開業したつて洛つ事無いからね。何うだらう？　一番是は昔馴染と云ふので、君の家の助力を願はうと思ふのだが……」と躍出る。

「僕の家？」欽哉は訝しさうに、「大村の養家の事かね？」

「大村の小母さんには、以前僕も世話になつた緣故も有るし爲るから。」

「それは、出來る事なら助力も爲るだらうが……」と心許無げに見遣つて、「究り、開業の資金なんだね？」

「資金も資金だが、第一闕と云ふ名義さ。那して大村なんか仁今は引込んで居られるが、舊藩の闕と云ふと豐橋でも知られた家格なんだからね、那れを利用せずに埋沒さして了ふのは僞だ。」と言つて、手酌で又一杯飲んで、「何うだらう？　君の周旋で、僕に闕の名義を名乘らして貰へないだらうか？」

「名義を名乘ると云ふと……」

「何なら、僕が養子に行つても可いのだ。」と終に本音を吐いた。

力に成るの成らぬのと、深切らしげな事を言つたのも其爲めかと思ふと、欽哉も眞醒めて辭は無かつたが、肇も肚の内で、「そらね、大方那樣事だらうと思つた！」

佐藤は例の髯を拈り〳〵、對手の顏をマジ

マジ眺めて居たが、何時までも答が無いので、「這麼事を言つて、君は氣を惡くしたか知らないが……」

「いや、那樣事は無い！」

「無ければ可いが、何だか君の後釜でも狙ふやうで……」

「那樣事は無い！」と二度言つて、欽哉は持つて居た「小州形の金煙管を瀨戸燒の手爐で力任せに擯くと、佐藤が、

「あ、君、お手和に！　それでも無垢なんだからね。」と苦笑を爲る。

「然うか、是は失敬。」と欽哉も苦笑を爲て、「僕は氣を惡くなんぞ些とも爲ない！　後釜を何うだとか、那樣事を思ふものか、何の道曼う養家とは緣の切れたもので、僕も今更歸らうと思はなければ、養家の方でも亦、這麼體になつた者を元々通り家へ入れも爲まい。だから、君が進んで僕の後へ行つてくれると云ふのは、何よりも僕は喜ぶので……賴りに爲て居た僕が這麼事になつて、又養子の代りと云つても然う思ふやうな者も無からうし、女二人限で――段々年は加つて行くし――然ぞ心細いだらうと、僕も非常に其れを氣毒に思つて居るのだから、其所へ氣心の知れた君が行つてくれゝば――君ならば僕なんかのやうな意氣地無しと違つて、立派に世の中に處して行く技倆も持つてるのだから、然うなれば、僕も幾らか自分の罪が輕くなるやうで寢覺も好い譯だ……けれど、君は衷心から闕の跡を遣つてくれる意りかね？」

「何故？　遣るも遣らないも、養子に行かうとまで言つてるんぢや無いか。」

「だが……」と少し考へて、「君は曩、闕の家格

を利用するとか爲ないとか……利用と云ふ辭が何だか耳立つので。」

「利用したつて可いぢや無いか。折角利用する丈の價値のあるものを、利用しないで打遣つて措くのは愚だ！」と一口に佐藤は言つて、「だが利用して了つたら、最う用が無いと云つて棄てて了ふ、那樣殺生な眞似は爲ないから……家格なり財産なり、究り關家の爲めに利用するので、縱橫に利用して、僕も腕を揮へば、關の家も永久に太らして行くんだから。」

「それなら可いが……何だしろ、那して親子二人限の賴り無い境遇なんだからね。」欽哉は未だ何うやら心許無い樣子で、獨り溜息を吩いたが、

「全く棄毒だ！　蛍坂も直き最う六十なので。僕のやうな者でも、何うか一廉の人間にして老後の世話も爲て貰はうと思へばこそ、小兒の內から手入に賺けて育てたので——生みの親も及ばないと云ふが、實際腹を痛めた自分の娘よりも却て僕の方を可愛がつてくれたのだからね。君も知つてる通り津島（地名）の實家は有つても無い同樣、那通り慾の深い因業な兄で、腹も違ふが、現に小學校さへ尋常科で舍さして了はうと爲たくらゐで、那僅關の家へ貰はれて來なかつたら、無論僕は丁稚奉公にでも遣られて居たに違無い。それを左に右く高等の教育まで受けて、理窟の一つも分るやうに爲て貰つたのは、皆養家の恩で……其恩に背いて、折角末を樂みに爲て居た僕が這麼事になつて了つたのだから年寄の力落しは甚麼だらう！　其れを思ふと僕も實に濟まんので。這麼無用者で無く、立派な跡取を早く見付けて、今迄の苦勞の埋合せに、何うか年寄や娘の幸福なやうにと、眞心から僕

も祈つて居るのだから……」

「居るのだから——僕には其の資格が無いと言ふので？」

「いや、然うぢや無い。君が年寄や娘を眞實可哀さうだと思つてさへくれて、衷心から那の二人を……」と言半すのを、佐藤が引取つて、「衷心から其れは思ふさ。先頃國へ歸つた次手に些つと大村へも寄つて見てね、君の前だが、小母さんや房さんが僕も可哀さうで成らなかつたので……何有、僕だつて是で人並の同情も持つてるから、屆く丈の事は爲るよ。所でだ、本人豈か自分で申込む譯にも行くまいから、何とか巧く、君から一つ推薦して貰ひたいものだが、何うだらう？」

「だが、然し……推薦するとは？」と欽哉は當惑さうに分つた事を問く。

「僕を關の養子に——君の後釜へ推薦してくれるのさ。」

「推薦すると云つて……困つたな。恁ういふ今の身の上で、養母は恐く僕には愛相を盡して居やうと思ふから——僕なんか信用の無い者が、却て其れ樣口を出さない方が可さゝうに思はれるが……」

「然うで無いね。小母さんは愛相を盡して居るか知らないが、肝心の房さんの方は……」と佐藤は和やゝ笑ひながら、繁の方を向いて、「ね、其の方は是非關君の靈力で無きや收まりませんや——貴方だつて然う思ひなさるでせう？」

「如何ですか？　私には……」と繁は素氣無く横を向いて了ふ。

其れには佐藤も有繁に艶としたらしかつたが苦笑を爲て、「如何ですか分らないと被仰る所を

見ると、ぢや貴方は、房さんと云ふ其の許嫁も彌張最う關君には愛相を盡してるお見込で？

有難い！　然うと分れば、僕直かに當つて見る勇氣も出るので。」と皮肉な事を言つて、更に欽哉に「それでと……最う一つ君に聞いて置かねばならない肝心な事は、ね、小母さんは正直何のくらゐ持つてるだらう？」

欽哉は厭な顏を爲て「何の位持つてるか……無論殖すかと云つても、減らすやうな氣遣は無い。」

「殖した所か、公債の利子や田地の得米ぢや知れたものさね。僕に是で、千と纏つて持たせて見給へ、一萬くらゐに延さすのは瞬く間だ。」と大きな事を言つて、手酌で頻りに呷る。

儲けるよりは、使ふ事の上手であつた浪費家の佐藤の口から、這麼事を聞くので、欽哉も異樣に思つて今更に其の顏が見られる。

或人が今の衆議院議員中少數の例外を除いて一種代議士面とも云ふべき型があると言つた事がある。何れも赭顔の、體のデップリした、他に類似を求めたら先づ相場師に近いとの事で、今の代議士連の人格も其れで頷かれたが、佐藤の風采容貌が彌張其の型であつて、何だか醫者らしく無く欽哉は思つた。此前と比べて然して肉附いたのでも無いのに、皮薄の頰の罅切れさうに、口尻が垂れて、酒太りらしい腫ぼつたい顏を爲て、目が充血して居る。襟や膝の少しく穢れた平阿召か何かの一つ小袖に、黑縮緬の五紋の羽織をゾロリと引被けたが、赤く燒けた胸を擽げて、大足座を掻いて、殖すの殖さぬと言つて居る所は、

「あゝ、何う見ても是が、一緒に學校に居た那

の情熱家の佐藤とは思はれぬ。」

何樣、佐藤の性格は變つて了つたのであつた。姿形や、口で言ふ事ばかりでは無く、人間其者が悉皆變つて了つた。二言目には直ぐ金儲の話で、それが又投機縣つた事か、然も無ければ詐欺染みた、儲ける爲めなら平氣で法律の網を潜りさうな言草。然し、豈かに口で言ふほどでもあるまいと欽哉の思つたのも、未だ〳〵親友の慾目であつたので、其れが眞實佐藤の本音である事は後で分つた。

「う、忘れて居た！」と不意に佐藤は叫んだ、飲半しの盃を擱いて、被らしい金時計を帶の間から出して見て「十時廻つた、這奴は大變！關君、僕は是から些つと裁判所まで行つて來るから、君等はまあ緩り遣つてくれ給へ。今鰻を命じて置いたから、其れでも食べて、ね、お二人が大いに精を附けるさ。」と言ひながら繁の顏を見て薄笑を爲て、最り立上る。

繁は何とも答へずに、衝いと又庭の方へ目を逸らしたが、此時丁度庭口の木戸を開けて書生が入つて來た。

「先生、伸が來ました。」と東北訛。

「可し。」と頷いて、書生が立去つた後で、佐藤は手早く帶を緊直して「直き歸る、今日は唯判決の言渡がある丈だから。」

「何の事件だね？」

「何有、些いとした民事さ。」と輕く答へて、是丈は本物らしい時計の金鎖を帶に絡ませながら急足に玄關へ出て行つた。

「何だらう？　明日にも東京を退拂はうと云ふ間際まで、民事だの裁判だのと……」然う思つて、欽哉は訝しげに小首を拈るのであつた。

ガラ〳〵と俥を挽出す音が爲て、其れと入違ひに、「お待遠様！」と言ふ女の聲が爲た。佐藤の言遣いた鰻の誂が來たので、書生は岡持毎座敷へ持つて來る。

其儘默つて二人の前に置いて、直ぐ行かうとする書生を、欽哉は呼留めて、「君、佐藤君は何所へ出掛けたんだね？」

「裁判所で有ります。」

「事件は何だね？」

書生は苦笑を爲て、「究り先生が誤診すたので有ります。」

妙な事を言ふので、欽哉も可怪く思つて段々問いて見ると、此の一二年佐藤が高利の貸元を爲て居る事が分つた。貸元と云つても大した遊金の有りやうは無いので、例の詐欺同様な通信治療で寄せ集めた金を、利の好い銀行へでも預ける氣で、三十、五十と纏めては高利貸の手へ廻すのであつた。廻される方も、固より小口一方の日濟貸の毛の生えたくらゐ、十、二十と細かく貸出して——細かい代りに割は可い。片目の何とか云はれて高利貸仲間には名の通つた爺だが、渠の貸元は何れも恁ういつた方面で、醫者は愚か、學者もあれば教育家もある、甚しいのは高等官の細君なぞが、夫に内密で小び小び廻して居るのも有るさう。所が、然ういふ身分ある方面のみ擇つて引出すのが渠の手で、始めの内は几帳面に入れるものを——然かも割好く——入れて喜ばせて置いて、貸元の乘地になつた所で、更に大く纏まる丈纏させて一度に引出し其儘寄付かずに引掛けて了ふ。掛けられた方では腹が立つても、表沙汰に爲れば這箇の名が出るし、何れも身分を厭つて泣寢入に爲る

ので、詰め可い氣になつて、今度又其手で佐藤を引掛けやうと爲たのであつたが……

どつこい！　其手は佐藤は食はぬ。患者の體溫や脈搏ばかり氣に爲て居るのとは違つて、溫度表よりは氣壓表、顯微鏡を買ふ金で合百でも買はうと云ふドクトルであるから、直ちに貸金請求の訴を起した。やれ詐欺に成るの成らぬのやれ證書が何うだの、滑つたの轉んだのと云つて久しく雜付いて居たが、今日は愈々其の判決があるので、無論原告の勝訴に決るらしいとの事。

「……でありますから、先方も彌張先生所を誤診すたのでありますな、はゝゝゝ。」と書生は聲高に笑つて話を終ると、其れで最う用は濟んだと言はぬばかりにプイと立つて行く。

呆れた顏を爲て見送つた繁は、口元に微な笑を浮べて、小聲で、「變つてるわね。」

「變つた！」と大な聲を爲て欽哉は面を振擧げると、拱いて居た腕を解いて、「實に變つたものだ！」

繁は怪訝さうに其顏を眺めたが、「あら、誰の事？」

「僕は佐藤と少年時代から知つて居る丈に、實に今日の變方には驚く！　一緒に學校に居た頃は、氣前の好い爽ばりした男で、自分だつて始終學資が足らなくて困つて居ながら、同鄕の苦學生に無けなしの小遣を貢いだり、著てゐる著物を脱いで友人を救つたり、毎も人の爲めに貧乏して居たものです。其代り金を借りても催促されねば返さぬし、人に貸しても忘れて了ふと云ふ風で、金銀なぞには極無頓著な人間だつたが……其れが、如何に變ればつて、豈か高利貸

の那様事まで爲やうとは僕も思はなかつた。酒や女なら、那の男の事だから隨分墮落爲さうにも思はれるが、何うも然ういふ利慾の方に墮落爲やうとは……(目を閉ぢて)あゝ、年を加ると皆若い時の俤は無くなつて了ふ、人の心も何う變るか分らないものですなあ！」

三

午砲が鳴つてから仍暫く待つて見たが、なかなか佐藤の歸りさうも無いので、二人は先づ午飯を濟した。其の飯の最中に、前垂掛の男が默つて木戸口から入つて來て、飯を食つて居る鼻先で尻端折高々と、庭の植木を片端から掘起し始めた。庭と云つても僅に五坪足らずの細長い日蔭で、植木らしいものは鎌倉檜葉が二三本。後は躑躅や山茶花や、何れも緣日物の野育つたやうな木振も枝振も無いので、花の散つた萩や、山吹の枯懸つたのや、那様物ばかりゴチャ〳〵植込んであるのを、一つ殘らず起して、鉢前の虎耳草まで引いて持つて行つた。が、一番目欲しい例の檜葉丈は手を附けずに殘してある。書生の話に由ると、那丈は邸に附いた植木だが、後は皆佐藤が住つてから植ゑたので、諸道具を賣拂ふ次手に、道具屋の迷惑がるのを強ひて若干かに引取らしたのださうだ。

那様物でも植つて居る内は賑かだつたが、後は一面に土を掘散らして、落葉や折枝の狼藉とした庭の向ふは、隣界の古い健仁寺垣の鼠色に曝れたのが現に見えて、半枯になつた朝顔の蔓のブラリと下つたのも侘しげに目に付く。何所からか、片足取れた蟋蟀が座敷へ上つて來た。其れを片手で逐遣りながら、欽哉が「那麼植

木なんか、賣つたつて幾らにも成るまいに……」と庭を見て呟いたが、「いや、高利貸へ小金を廻してるくらゐだ、草一本でも只殘すのは惜いんだらう。」

「那様方では無かつたやうですにね。」と繁は飯臺の上を拭つた紙を庭へ放つて、「全く分らないものだわ、私が知つてからでも、然う被仰れば、悉皆人が變つて了つたやうね。」

「ですもの、小兒の時から知つてる僕には、只唯驚くより外は無いので——繁さんの知つたのは、如未だ二三年だけれど……」と言半すと、急に顏を曇らせて、「一昨々年の夏、那時始めてでせう？　佐藤を知つたのは。」

「え、那時よ……」と繁の顏も曇つた。

衝い何の氣無しに言つた事が、努めて忘れやうと爲て居た過去の恐しい記憶を呼起したので欽哉は古い創痕でも觸つたやうに、顏を蹙めて唇を嚙んだが、默つて居れば居るほど追想は湧き募つて、一度び觸つた創の痛みは容易に紛れやうも無い。

「那の年は又、毎もより暑さが烈しくて、厭な夏でしたなあ。」と終に呻き出した。「僕は、未だそれでも大して暑さに弱らない方だが、繁さんは一體夏負する所へ以て、那いふ始末で……僕は繁さんの那の窶れた顏が始終目に付いて忘られなかつた。其後の樣子も些い〳〵佐藤から聞くには聞いても、何だか信じられなくて、未決へ面會に來て下すつた那れまでと云ふものは、何うも僕には、繁さんは最う此世に無い人のやうに思はれて成らなかつたですよ。」

「私は、寧そ那時は死んで了ひたいと思ひましたわ！　直ぐ翌日田舍の義兄が出て來て、私は

苦しくつて口も未だ利けないで居るのに、其の枕元で色々な事を言つて責めるんですもの。」其時の愁かつた事を思出して、繁は我にも無く目を潤ませたが、「それでも、未だ義兄に言はれるのは我慢出來ないけれど、義兄と代つて母が出て來まして、母は又誰りも何うもせずに、唯私を見てはホロ〳〵泣いてばかし居るんでせう國へ歸つてからでも、皆して私の事を惡く言ふんですけれど、母丈は何にも言はないで、私の顏さへ見れば每も情無さうに涙含んで居ますので、私もう、何を言はれるよりも一番其れが愁くつて……」と目を拭つて、「ですが、あれは亡くなる二日ばかし前でした、枕元へ私を……」

「えー　阿母さんは亡くなつたんですか？」と驚いて欽哉に問かれると、涙は又新しく湧出て、「えゝ、不斷から病身では有りましたけれど、私の事を餘り苦勞して、其れが幾らか病氣を手傳つたのでせう……枕元へ私を呼んで言ひますには、姉さん達はお前を庇ひたくも女で權力が無し、私が死んだら、此上其麼愁い思を爲なけりや成らないかも知れないから、それよりも知つた東京へ出て、而して一旦緣があつて那いふ事にもなつたのだから、貴方の出て被來るまで、教師を爲るなり何なり爲て待つてるが可いつて自身の藥食や何かに小び〳〵使つて居た貯金の殘りを、內密で私に下れまして……」

「では、僕の出て來るまで待つてろつて？　貴方に。然うですか！　阿母さんが？」と辭尾が顫へて、欽哉の靑白い顏は血色を增したが、「僕は、ね、繁さん、貴方の阿母さんからも皆さんからも、然ぞ僕は怨まれてるだらうと思つて居ましたよ！　大事な貴方の體を那麼事に爲て、

誰よりも、阿母さんこそ一番僕を怨んでお居でだらうと思つて居た……」

「いえ、母が一番未だ同情持つてたのよ。貴方の所へ面會に行きました那時だつて、明日は愈よ國へ逃れられて歸ると云ふ前の日ですし、それに、漸と腰が立つたばかしの體で出たいと言ふのですから、何所へ私が行くか、其位の事は母も察しない事は無かつたんですわ。けれど、故と氣の付かない振爲て出してくれたんですし……」

「然うですか、那樣に好意を持つて〻下すつたんですか！」と目を輝かして、「言つても追着かん事だけれど、僕も一度お目にも懸つて置きたかつた！　何時お亡くなりです？」

「一昨年の秋――私が歸つてから一年と經たなかつたでせうよ。」

「だが、其間始終貴方は阿母さんの傍だつたんでせう？」

「え、其間ズッと最う母の傍で謹慎してましたの。だつて、お友達から來た端書すら私に見せないくらゐで、些つとでも自分の自由に何か爲やうものなら、義兄が直ぐ彌喧しく母に言ふものですから、母に氣毒で、私も其の一年ばかしと云ふもの、全で座敷牢へ入つた氣で門へも出ませんでした。」

「能くそれだのに、又東京へ出られましたね？」

「出られないのを、默つて逃出したんですわ。母の初七日を濟すと、其の翌朝密と家を脫出して、東京の方へは直ぐ追手の懸るのが知れてますから、故と宇都宮へ廻つて、那所で丁度五月ばかしも遊んで居ましたの。一緒に學校に居たお友達で、宇都宮の女學校に敎師を爲て居る者、

が有りましたから。」

「ちや、香浦の所へは何うして來たんです？」

「それも今お話爲ますが、宇都宮では本當に私雜儀爲ましたよ。友達だつて僅な給料ですし、それに獨なら左に右く、年寄や弟を自分が養つて居るのですから、其所へ幾日も幾日も遊んで厄介になつてるのは、實に心苦しくつて……と云つて、東京へ出るにはお貨が無し、汽車貨ぐらゐは友達が貸してくれるに爲ましても、當無しに出て、其日から寢る所も無いやうだと、東京丈に仍困りますもの。ですから、當分まあ宇都宮に腰を据ゑて、自分の食べる丈でもと、色々口を捜して、市から二里ばかし田舍の小學校の助教にも成りましたし、郵便局の女子採用試驗にも應じて見ましたし、方々頼み廻つて、それは隨分切ない思も爲れば恥しい目にも出遭つて、沁々生活の困難と云ふ事を其時知りましたわ。」

「那樣に雜儀を爲たんですか！」と欽哉は對手の顏を見詰めながら、「知らない土地へ行つて、若い女の身で、自分に生活の道を求めねば成らないと云ふのだから——僕も察しますよ。」

「なか〳〵恁うして、口で今お話するやうな事では無かつたんですよ、其時の心持と云つたら……」と又涙含む。

「然うでせうとも！　ですが、東京へ來たのは何ういふ機會でした？　來ると直ぐ香浦へ行つたんですか？」と其事のみ聞きたがる。

繁は頷いて、「恁うなんです、私は元々宇都宮に居る事だつて誰にも知らさずに居たくらゐですが、友達が私の餘り困つて居るのを見るに見かねたと見えて、内密で園枝さんの所へ悉皆言

つてやつたものなんです。園枝さんは喫驚して飛んで來て、何でも東京へ連れて行かうと言ふし、友達も勸めるものですから、私も到頭其氣になつたんですが……那時若しか園枝さんに救つて貰はなかつたなら、私、甚麼窮境に陥つたか知れなくつてよ——全く恩人だわ！　ね、それで賞めるんぢや無いけれど、那麼又心の美しい深切な方つて有りませんわ。一緒に東京へ來てからも、色々私の身を心配して下すつて、始めは家庭教師にと云ふので、公爵や貴族院議員なんかで二三軒好い口も有つたんですが、お兄さんが、那樣知らない所へ入つて氣兼を爲るより、寧そ家へ來て家政の取締を爲てくれつて——それも彌張私の爲めを思つて、深切に言つて下さるものですから、私も渡仰る通りに隨つて、それから引續き香浦さんの所の女執事と云ふ格で、今日までまあ御厄介になつて居ますの。私のやうな者に、到底も家政の取締なんて出來や爲ませんけれど、一體奥樣と云ふのがお姫樣見たやうな……やうなぢや無い、お姫樣なんですが、極大人しやなかな方で、それにお産から這方始終體がお弱いものですから……」

「ちよつと、」と遮つて、「奥さんと云ふのは、速男君の奥さんですか？」

「は。で無くて、奥樣の有る筈が無いぢやありませんか？　阿父樣はお亡くなりだし、外に最う男と云つては……」

「何？　香浦の老人が亡くなりました？！」欽哉は喫驚して、「何時？」

「あら、御存じ無いんですか？」と繁は呆れたが、考へて見れば、香浦の老人の死んだのは欽哉が刑事被告となつてからなので、然う、御存

じないかも知れないわね。那れは一昨々年の冬、胃癌でお亡くなりですの。」

「然うですか！」とばかり、面を垂れて暫く辭も無い。

會つた事は無いが、繁の母も死んだ。今又自分の多少世話になつた香浦の老人が死んだと聞いては、欽哉も今更に、後れ先立つ人の身の儚さを感ぜずには居られぬ。

が、其れよりも、「速男君の其の細君と云ふのは、何所から來たんです？」と改めて問いた。

繁は何故か目の緣を仄と染めて、「何でも京都の華族樣で、北小路と云ひました。」

「京都の華族で、北小路？」と獨言ちて眉を寄せたが、「男の同胞は有りや爲ませんか？」

「え、兄さんがお有りですわ、法學士の。」と答へて、又赤くなる。

「ちや、僕は知つてる！　速男君へ來た其の妹は知らないが、兄は北小路安比古と云ふんでせう？　僕の學友です！」

「まあ！」と今度は繁が驚いて、「然うですか、お友達で居被るんですか？」

「高等學校からの親友で、科は違つて居たが、僕が這箇の大學へ轉校するまでは、京都で一緒でした。」

「まあ、ねえ！」

パッチリ目を見張つて、男の顏を見詰めて居た繁は、一旦褪めた頰を更に又赤くして、其儘伏目になる。

暫くしてから、「では、貴方の未だ意外な事が有りますわ。」と言つて寂しく微笑んだ顏は、最う常の色で、「ねえ貴方、其のお兄さんの北小路樣の所へ、園枝さんはお嫁きなすつたのですよ」

「成程。」と頷いて、欽哉も最う驚きは爲なかつた。

「而して、何らも最うお子さんがお有りなさいますわ。」

「然うでせうな。」

人生の春は過ぎた、花は散つて、お互に實を結ぶべき夏が來たのである。同じ年輩の友人は皆然うして夫となり、妻となり、親となつた。自分達も早く身の定りを付ければ成らぬと、二人は口に言はずに然う思つた。

「えゝと……繁さんは今年は二十五でしたか？」

唐突に問かれて、繁は些つと面食つたが、「あら、可哀さうに！　四ですよ。」

「然う〳〵、僕に六歲違だから成程四だ。」

「二十四ですものね、一歲や二歲多かつたつて、最う可哀さうと云ふ年でも有りませんわねえ。」

と爲方無さゝうに笑ふ。

「那樣事を言つたら、僕なんか何う爲るんです？　最う三十だ。」

「男の方は貴方、三十が四十だつて、何時までも盛で居られるから可いわ。女は最う二十越したら駄目よ。」

「何う駄目なんです？　女だつて二十くらゐ過ぎなきゃ、人生の眞味は分りや爲ない。繁さんだつて、意味ある生活は是からでせう。」

然う言ふ欽哉の顏は、何か意味有りさうに見えたが、繁は其れを讀み得なかつたやうに頷いて見せた。

刻の入つた莫人は佐藤が持つて出掛けたので欽哉は自分の卷莫を一本拔出して、其れを火に押附けたまゝ、先の燻り出すまで凝と見て居たが、「然し、國との關係は今何うなつて居ます？

繁さんの體は。」と附かぬ事を言出して、莫を口へ持つて行く。火がハラ〳〵膝へ零れる。

繁は白綾のハンケチで手早く其れを拂落して遣つて、「私の體？」

「えゝ。」と煙を吐きながら。

「何うつて？」

「究りね、貴方の一身上の事は、貴方の最う意のまゝに成るのか？　それとも、彌張兎里の方の干渉を受けなきや成らないのか？　繁さんと家との關係は此飯何うなつて居るのか……？」

「あ、其事ですが、其れは最う全く無關係ですの。」と躊躇無く答へて、「私が家を出て了つて、義兄は却つて厄介拂を爲たくらゐに思つてるんでせう。母は亡くなりましたし、姉達は心配しても追着きませんから、懇ひ家に居て義兄に虐められるのを傍で見て居るよりは、恁うしてまあ何うか恁うか獨で私が遣つて居れば、それで姉二人は安心爲てますの。生意氣言ふやうですけれど、這箇は最う扶養義務者に對する扶養權利とかを放棄してるんですもの、其上何も義兄なんかの干渉受けなくても澤山だわ！」と言發つた繁の顏は激して眞赤である。

欽哉は目を圓くして聞いて居たが、和や〳〵笑出して、

「繁さんは豪い事を知つて居ますね、扶養權利とか何とか？……」

「知つてますとも！」と濟して言つたが、欽哉の笑つて居るのに衝い自分も和と爲て、「私是でも民法を調べたんですもの。」

「那樣物まで讀ませるんですか？　學校で。」

「學校なもんですか、私自分で調べたの。」

「自分で？　それは感心だ！　僕はお恥しいが民法なんて覗いた事も無い。」

「私が民法讀んだのは讀む譯が有つたんです！」と繁は眞面目になる。「家に居る頃、義兄の恁向が餘り甚いものですから、一體戸主と家族とは、法律上何麼關係になつてるものか、其時始めて民法の親族法を調べて見ましたの。法律で何うかなるものなら、裁判へ出ても私、義兄の手元を離れて了ひたいと、一時は全く那樣氣にまで成つたくらゐですの。」

「能く〳〵苦しかつたんですね？」

「苦しいつて貴方、何ぞと云ふと二言目には那事を云立てゝ、全で女の屑か、人間の廢物のやうに云つて口穢く罵るんですもの。義兄が其れですから、親類と云ふ親類、家へ出入する者は赤の他人までも、皆私を大變な者に思つて了つて、蔭では無論の事ですが、面と向つてまで何の彼のと……もう〳〵其れは、悔しい！　恥しい！　事ばかしで、能くまあ氣狂にもならずに一年も辛抱出來たと自分で不思議なくらゐ。今でも私、那時の事を思ふと悔しくつて涙が零れますわ！　えゝ、今思出しても私……」とばかり、ハンケチで面を掩つた。

欽哉は黙然と其れを聞いて居たが、旋て太息を吁いて、「それぢや成程、繁さんも愁かつたらう！」と重々しげに言つて、「が、僕も實に愁かつた！　ねえ繁さん、お互に苦い經驗を嘗めましたなあ！」

「全くねえ！」

苦い經驗！　其れは然し苦い丈で、無意味のやうに欽哉は思はれるので。話に聞けば繁にも苦痛の三年であつた。自分は殊に牛生を犧牲にして、其の三年を獄裏の罪囚とまでなつたが、

然かも三年後の今日得る所のものは、三年以前に既に得つゝあつた二人の其れでは無いか。三年振に漸と斯うして再會して、さて二人が何う爲やうかと云ふに、唯結婚！　結婚丈なら、何も那樣懲役に行つたり反法を調べたり爲なくても、三年前に譯無く出來たのだ。其の譯無く出來た事を出來さずに、故々二人は三年も苦しんで、而して彌張其の譯無く出來た事を今日出來すのに過ぎないでは無いか。

然う思つて、其通り繁に談して、「……ね、然うでせう？　那時最う少し考へたら、那樣苦い經驗なんか嘗めなくても——繁さんも然うだが僕も何も法律上の罪人とまで成らなくても、お互に今日ある事は出來たのだ！」

「でせうか？」と繁は不得心らしく、「私は然うは思ひませんわ。だつて、那れまでと云ふものはお互に未だ心が決らないやうで、何だか考が眞面目で無かつたんですもの。それが、那いふ事に貴方はお成りなさるし、私も其の爲めに辛抱爲通して——全くですよ、家に居る頃も、あゝ今頃は、甚麽に貴方は苦しい目をなすつて被居るだらう、其れを思ふと、是位の苦痛は何でも無いと、毎も然う思つては自分で勵まして居たんですもの。貴方の事を思ふのが全く私には　力　だつたので、其度び勇氣を起しては、反抗……も大袈裟ですが、左に右く義兄や皆の迫害を忍んで、結局其れに打勝つたからこそ、態うして鄕里の干渉も逝れて、誰にも憚らずに、自分の意志の自由に結婚だつて出來る身になつたんぢや有りませんか？　ですもの、私は悔まないわ。」と辭清しく屹と口を結んで了ふ。

縹緻は昔に變らぬ好い縹緻だが、今の辭を聞

いて見直すと、何處か氣の勝つた嚴つい顏を爲て、美しい目の輝きまでが以前の繁と違つて冷さう。

「それは悔むまいさ。其の　力　と自由とを得た方は可からうが、其れを得さしめた僕は——三年間も身體意志共に自由を奪はれて、而して半生を失つた僕は何うするのだ。」と欽哉は心に然う思つたが、口では笑談らしく、「何しろ、我の結婚は高い價を拂つて居る、お互に餘程幸福で無けりや引合ない。」

「全くですわ、私も最う不幸には飽き〳〵爲ましたから……」と言半して、「おや、何うか爲すつて?!」

それで無くても澤の惡い欽哉の顏は、急に眞青になつたので。額を抑へて飯臺の上に俯しながら、「何有……眞に醉つたんでせう。」

「甚麽お心持ですの？」と繁は氣遣しげに居去り寄つて、

「お苦しいんですか？」

「何だか胸氣持が惡くつて……」と言ひながら横になつて、ベッタリ疊に頭を着ける。

「あら、お頭を下げちや仇可けないでせう？」何か枕になる物でもと邊を見廻したが、座敷の内は空家も同樣、座布團一枚無いので、繁は急いで坐り直して、「さ、私の膝を——管ひませんよ。」

「濟みません……」

膝枕を爲せて、片手に男の背中を擦りながら

「疊から、那樣にお喫ひなさりや爲ないやうですにね。」

「えゝ、彌張が衰弱してるからでせう。登血だから鐵劑を服めつて佐藤に言はれたが、左に

右く薬でも服んで、健康を恢復爲なけりや爲やう。

「お寢れなすつたわねえ！」と沁々言つて、思はずホロリとすると、涙は青白い窠に落ちて、今まで目を瞑つて居た欽哉が、張の無い瞼を明けて凝と繫の顏を見擧げた。

繫は慌てゝ顏を背向けて、「本當にお寢れなすつてよ。何處か轉地でもなすつたら可いでせう」

欽哉の目も潤んだ。

「さあ……轉地も可いが……」金が無いと言はうと爲たのを歇めて、「故々旅費を使つて遠くへ出ても、其程に利目も有るまいから……大塚なら空氣も好いし、それに柳木屋の夫婦は親切だから……」

「それはまあ然うですけれど……」と思切惡く繫は同じて、何か暫く考へて見たが、氣を變へて、「それぢや何うなさいます？　大塚へは今日

裾裏の絹が頭の重みに滑つて、糸織の袷の上前が搬るのを繫は氣に爲て居たが、チラ〳〵紅の入つた空色の長襦袢が食み出すので、褄下片手に密と膝を直すと、骨張つた欽哉の肩へ當つてハッと爲た。頬が削けて、顏の肉落したのは目慣れたが、綿の入つた着物の上から擦つて居ても、體の痩は那樣に分らなかつたので、肩の尖に初めて心付いて見ると、盆窪の狹く刻つたやうに皮弛の爲た頸は、吭骨現に細つて、膚は荒れ、髮も濁く、所々白髮さへ見える。無論未だ頭の白くなる年でも無し、と云つて褪白髮とやらでも無い。恐らく營養不充分の所爲であら

う。

「薬も薬ですが、體の御養生をなさら無きや可けないわ。」

被行いますか？」

「今日行かうと思ふ、佐藤が歸つたら。」

「然うなさいな、向ふでも待つてるでせうし、それに……私何だか佐藤と云ふ方蟲が好かないわ。」

「僕も話を聞いて愛相が盡きた！　歸つたら一應挨拶丈して、直ぐ大塚へ行きませう。」

「それが可いわ。」と頷いて、「實はね、一昨日這箇の佐藤さんから私の所へ手紙が來て、自分も迎に行きたいが、差支があつて行かれないから其代り是非家へお連れ申してくれ。國へ歸る筈のを延して、貴方の出て被來るのを待つてるのだからと、然も〳〵深切らしい手紙なんでせう。ですから、私も遠い所を故々這箇へお供爲て見ると……何有に、皆自分の用で貴方を招んだんだわ。」

「何うせ何有、一度訪ねて來なけりや成らないのだから……」と欽哉は却て穩かに、「それは管はないが……何しろ何うも空店同樣で、恁うして居ても何だか心寂しくて可けない。」と那邊這邊目を動かす。

「全くね、是では誰だつて滅入つて來ますもの、早く大塚へ被行いな。」

「然う爲ませう。」と頭を擡げたが、氣が付いて、「や、重かつたでせう、何時までも可い氣になつて。」

「いゝえ、最少し然うして被居い、お顏の色が未だ本當で無い事よ。」

然うは言ふものゝ、欽哉の顏色は餘程治つたので。

「いや、大分最う心持も快くなりました。何うも有難う。」と起直つて、飾氣に恁懸る。

「本當にお治りなすつたんですか？」と心許無げに問いたが、「えゝ、最う治りました。」との事に、繁は立つて前掻合せて、次手に帶の間から時計を出して見る。

其れは、學校に居る頃から持續けた片硝子の金時計では無く、銀の無地側へ何やら彫刻の爲た小形の無双で、鎖丈は金の細い一本立。左の無名指に嵌めた新ダイヤ入の指環も、欽哉は今度始めて見るのである。

時計を藏つて座に着くと、「あの、私些つと耶へ歸つても可いでせうか？　用事を打遣つて置いて出ましたから。」

「可いですとも！　貴方も然うしてる間は責任のある體だから。」と欽哉も快く頷いたが、「それは然うと、速男君は僕の事を知つてますか？」

「貴方の事つて？」

「僕の出て來た事を。」

「えゝ、最う其處だとは思つて被居るでせうが、那の方でも園枝さんでも、私の前では決して貴方の話を爲さらないから――極りの悪い思を私に爲せまいと思つてゞせうから、私の方でも默つて居るし、今度だつて何にも未だ申さずに有りますから、無論出て被來つた事は御存じ無いでせう。」

「それなら可いが……」と目を落して、「向ふから問かなければ、當分まあ僕の事は言はずに置いて下さい。」

「え、別に私の方からは……」と繁は男の其の樣子を故と見ぬ振爲て、「では、佐藤さんが歸つたら直ぐ大塚へ被行いますね。私も用事を濟したら、那箇へ參りますよ。」と云ふ片手に、脫いで置いた小紋縮緬の羽織を引寄せ、桃色縮子の

裏をシューと云はせながら、兩手を通す。

で、髮の書生に伸を賴んで貰つたらと、欽哉が勸めたが、電車の便が有るから其れには及ばぬと言つて、繁は羽織の紐を結んで八口を揃へる。袖裏丈は有繁に赤い華かな色を揃へて、揃へた袂を兩方から膝の上に重ねながら、チンと又坐込んで了つたが、顏色も未だ悪いし、寂しさうに男の沾りして居るのを見ると、此の空家のやうな所へ獨り殘して行くのが氣毒なやう。

欽哉も其れと察したか、「さあ、遲くなつても可けますまい、出掛けたら何うです？」

「は、何だか貴方お獨りでお寂しさうで……」

「何有、其内に最う佐藤も歸りませう。」

「ぢや、失禮してよ。」

漸と繁は出掛けた。後は何樣急に寂しく、欽哉はポツ然と飾臺の横に坐つて、蒼乏揺を爲ながら獨り物思に沈んで居る。と、又もや過去三年の恐しい回想は、憂い目、愁い目の數々が新しく胸に浮んで、涙はジリ〳〵と頬に流れた。氣が付いて袖で拭つて、當も無く庭を見遣つた其目に、何か見付けて心を紛らさうと爲たが、庭は唯殺風景に荒らされてゐるのみで、遙に大通の電車の音が頻なしに呼つて、ザワ〳〵耳の穴を擽廻されるやうな騷しい巷の聲に圍まれながら、髮ばかりは深として、隣は何商賣か、折々氣樂さうな笑聲が手に取る如く聞える。と思ふと、這麼下町にも、古風な飴屋の唐人笛が横町を通つて行く。

其の笛の音に、欽哉は偶と小兒の頃を思出したのであつた。茅花を拔いたり蛙を釣つたり、浮かゝ遊を爲て、寺の瓦屋根と、蘗葺の小い屋根が飛々に散ばつた村の方から、青々と讀

いた麥畝を越えて、飴屋の那の笛――唄に合せたら子守唄でもあらうと思はるゝ那の音を聞くと、毎も里心が付いては急いで家へ歸つたもので。

「佐藤方、關欽哉殿――貴方所で有りますな？」

不意に聲懸けられて、始めて我に返ると、例の書生が油紙に包んだ小包郵便を持つて來た。佐藤方として欽哉宛に郵便の來るのは、鄉里より外には無いので、差出人を見ると、尾張津島の實家の名である。是まで手紙一本寄越した事の無い兄が、何を送つて來たのかと訝りながら飼臺の上に包を解くと、絹糸の入つた紡績綿の綿入、同じ綿の羽織、絞木綿の襦袢が二枚、何れも仕立下しの新しいので、それに今年の新稻の燒米が一袋。

態よ謝しく、小首を拈り〳〵更に包紙の差出人を檢めると、名は兄だが、字が兄の手で無い。何うやら女の手らしいと思つて能く〳〵見ると稚い書風で努めて筆癖を變へてはあるが、慥に許嫁のお房の手と知れた。然う知つて、包紙に貼附けられた小包送票の引受印を讀むと、關橋と有る。

欽哉は袋の燒米を一口齧張りながら、其の新しい包紙の爲る着物の中へ、思はず顏を埋めて泣いたのである。

所へ、敷石を軋る轍の音高く、玄關先から、「お歸り！」と叫ぶ車夫の大聲が人氣の無い空間を響渡つた――佐藤が歸つたらしい。

四

「衰弱して居る……」とガツカリしたやうに獨言ちながら、欽哉は寢衣のまゝ庭へ出た。

山手も殊に大塚界隈は寂しいので、未だ夜深と云ふ夜深でも無いのに、邊は最う寂として居る。母屋の植木屋は毎も早寢であるし、廣く取つた苗木圃で隣とも隔つて居るし、人里離れた一軒家のやうに物音一つ聞えぬ。風の無い靜な夜で、周圍の植木はゴソとも爲ず、露が深く降りて、唯蟲の音のみが咽ぶやうに啼連れて居る。

「能く〳〵饒か衰弱して居る……」と繰返し獨言ちたが、兩手で頭を抱へて、苛々しながら暗い庭を那邊這邊歩いた。

下界の夜は深として暗いだが、天には一面の星影鮮かに覺めて、頭の眞上を斜めに流るゝ天河の影も白く明るい。キラ〳〵と目もチラ付くばかり煌めき零れた無數の其の星屑は、一つ一つ聖なる活きた光を胸に沁ませて、欽哉の亢奮して居た頭も自ら鎭つた。兩手を兩腋に交つて寂然と立つたが、天には星、地には蟲の音、外には最う目にも耳にも死の如き眞暗な靜けさの中にも、何處にか滅び難い生命の呼吸が有る。自然は今唯睡つて居るので、心を澄して聞くと、遠く夢を呟くやうな溝川の囁き、闇に潜んだ樹間の蔭から折々忍びやかな響も洩れて、近くは葉末を落つる微な露の音さへ瞭り分る。

若い健かな者ほど能く熟睡するものだが、丁度其の新も立てぬ有るか無きの寢息を窺ふやうに、欽哉は凝と耳を聳てた――恁くて夜が明け朝日を迎へた時の、周圍の光と色と聲と、而して活氣とを思遣つて。

「だが、自分は何うだ？　活氣も精力も最う過去の闇に滅されて了つたのだらう！　是から新生涯の朝に入らうと云ふのに、あゝ、此の陰の衰……！」

然う思つて聞くと、此の寂しい秋の夜を獨り忙なく啼明す蟲の音が、何だか身に抓されて哀である。切なる音を振立てゝ雌を呼ぶのも今の内、旋て秋老いて、露が霜となつた曉、設ひ嗄の嗄の音を絞つて啼殘ればとて、雌からは最う生活の力盡きた殘喘である、屍軀に伴しい衰である。

彼の四十から五十の間の婦人の或る時期——女を終つた更年期の煩悶！　欽哉は今其れと同じ衰の寂しさ、味氣無さを感ずるのであつた。

脱を組んで、永い間庭に佇んで居たが、折から擅出す目白の鐘に驚いて、始めて自分の薄着に氣が付くと、深け行く夜氣は急に身に沁むので、欽哉はガタ〳〵顫へながら雨戸の内へ入つた。

後を閉めて、薄く火影の射した障子を開けると、立籠めた人香や寢息が生暖く面を打つてランプを細目に部屋の中は仄暗い。繁は睡つて居るのか、顔を向ふへ向けたまま、深く耳まで掩つた搔卷の襟に、油氣の無い束髪が頽れさうになつて埋つて居る。袖壺に爲た着物と一緒に飛模樣の蔦鼠の帶、下締を脅ねた腰帶の朱鷺色、帶揚やら袜やら帶留やら、赤だの紫だのが枕元の横に解き捨てられて、行く春の躑躅山吹、落花の色々麗しく吹寄せられたやう——然う言へば、女の春も最う暫く、繁の身になつたら、恁ういふ華かな色氣も切めては今の内の思出であらう。

其の嬌しく取散らされたのを見ると、欽哉は輕く眩めくやうに覺えたので、明を一層細目に爲て置いて、急いで自分の寢床へ潜り込んだ。

疲勞に覺めたのか、今まで睡つて居ると思つた繁が、何やら夜着の中で言つたやうだが、聲丈聞えて辭は分らぬ。

「何か言つたんですか？」と欽哉は支懸けた枕から頭を放して、「え？　目が覺めて居るんですか？」

繁は始めて這邊を見向いて、「外は眞暗でせう？」

「それに、夜が深けるとなか〳〵寒い。」

「薄着ですもの、羽織でも被けて被行りや可いのに——風邪を感きますよ。それで無くても體が弱つて被居るんだから……」と言つて了つて弗と口を噤む。

欽哉は厭な顔を爲て、默つて目を逸らした。

繁も同じやうに厭な顔を爲たが、「何を爲て被居つたの？　這麼に何時までも。」

「何つて、唯行らん事を考へて居たので……」

「考へて？」と先方の顔を見遣つたが、其限別に問かうとも爲なかつた。

すると、今度は欽哉の方から、「繁さんは、那れからズツト目を覺して居たんですか？」

「えゝ。」

「睡られないんですか？」

「睡られない事も無いんですが……色々ね、貴方の事を考へたり爲て……」

「僕の事を？」と又厭な顔を爲て、「僕の體の事を？」

「え、體の事や、色々ね。」と後毛を撫揚げると、枕を直して、「最う寢ませう。」

繁は其儘向ふを向いて了つた。例の夜着を深く、重ねて聲を懸けても返事が無いので、欽哉は溜息を吁いて、自分も枕に着く。と、今まで紛れて居た蟲の音が耳に付いて、それに、風が

出たと見えて、庭の木葉のガサゴソ戦くのが聞える。

欽哉は努めて目を閉ぢて見たが、容易に睡付かれさうも無い。何よりも心に懸るのは例の肉の衰！　尤も、是迄が是迄であるから、自分でも體の衰弱は承知爲て居たのであるが、豈かに恁うまでとは思はなかつたので、今夜といふ今夜痛切に其の衰を知つた。機能の萎靡と共に何だか全身の退收機轉でもある如くに感じて、彌張更正期の婦人が感ずる病性の總覺と同じやうな、一種の痛憂と危惧とが心を搖動ぶるのであつた。寢返りを爲たり、枕を爲替へたり、溜息吩いては體ばかり蹠いて居る。

體の衰弱と云ふ事から、更に又自分の前途の事も心配になるし、と思ふと、許嫁のお房の可哀さうな事や、養母の氣毒な事など、それから其れと悲しい事ばかり胸に浮んで、然かも何一つ纏つて考へられるでも無く、頭の中は引攪廻されるやうに苦しい。切めて一つの事のみ考へて、心を其れに集注爲やうと躁つても見たが、躁れば躁るほど、愈よ雜多な事が切れ〴〵に混亂して、其の切れ〴〵な事を頭で解いたり結したり、強ひて纏めやうと爲る丈でも氣が違ひさう。然し、心を一つに集注爲やうと爲れば、直ぐ肉の衰と云ふ事より考へられぬし、其れを紛さうと思つては、自分から努めて他の雜多な事も頭に浮べて見るので――纏つて其れは情を痛ましめぬ代りに、苛々と頭は亂れて、疲れて、尾ひには氣も遠くなつたやうに仄として了ふ。

疲れに疲切つた擧句、漸う欽哉も眠に陷る事が出來た。が、其の寢顏は決して心安らかな者の寢顏では無い、眉には深い皺を寄せて、力無く口を開けて、鼾も切なさうに不規則である――渠は實に、睡る間すら幸なる事が出來ぬのであらう？　睡付いてから一時間も經つと、俄然目を覺したのであつた。行成寢床の上に起返つて、何とも言へぬ不快な顏を爲て、ホッと勢の無い息を吩く。

「何う爲すつたの？」意外にも繁が直ぐ聲懸けた。

欽哉は驚いて、「未だ睡らなかつたんですか？」

「えゝ……いえ、曩少し睡つたやうですが、今又目が覺めて……貴方何うして起きなすつたの？　夢でも御覽なすつて？」

「いや、寢汗を掻いて……實に何うも、厭な心持で。」と寢衣の襟を擴げる。

「寢汗を？」と首を擧げて、「何う爲てゞせう？」

「無論體の衰弱して居る所爲だ！」と社欽哉も知つて居るが、故と其れには答へずに、「實に、厭な心持だ！」と同じ事を二度言ふ。

「では、寢衣をお着更なすつたら可いでせう、ね、然う爲さいよ。」と言ふと、繁は密と自分の夜具を撥ねて、眞白な二腕現に平袖の捲れ揚つたのを直しながら、徐ら寢床を起出る。

空色メリンスの紅氣の少ない友禪模樣の長襦袢――寢衣に着る物が無かつた爲めで――赤い絎紐を弛目に卷着けたが、其上へ羽織を引被け襟と襟とを引合せて片手で抑へながら、「這麼巧い裝爲て……」と自分で拈つたランプの明を目映しさうに居去らす。

「あの、お國から來た、那れをお召しなさいますか？」

「……」

是まで繁の這麼嬌しい艶な姿を見た事が無い、小説の口繪にでも有りさうな、夜半の寝覚の肌薄な華奢姿！　と見ると、欽哉の顔にけ抑切れぬ苦悶の色が現れる。何が腹立しいとも無く唯赫となつたが、目はチラ〳〵火花の走るやうに覺えて、耐らずなつて掻卷へ面を伏せた。

「ね、お國から來た那れをお召しなさいますか？。」と重ねて繁に聞はれて、「え、、何れでも……」と僅に答へる。

其處で繁は、彼の小包で郵送して來た其内の綿入を出して、寝衣を着更へさせ、欽哉が横になるのを待つて、夜着を着せ被け、裾を叩いて置いて、さて自分も寝床へ行くかと思ふと、其儘枕元に坐つて考込んで了つた。深け行く夜寒の風の音寂しく、家を取卷いて降るやうな蟲の聲。

「何故寝ないんです？」と欽哉が訝り訊ねると、稍經つてから、「ね。貴方。」

「えゝ？」欽哉は曩の反動で、妙に氣が沈んで、目は蜘蛛でも張つたやうに繁を見ても仄やり爲る。

繁は又、何やら言出しかねて思案するらしく、微寒さうに肩を窄めて、兩袖胸に重ね、頤を埋めて伏目に俛れたが、旋て面を起すと、「貴方、是非轉地を爲さいな。」

「轉地ですつて？」

「え、轉地療養を爲さいな。貴方全く衰弱して被居るわ！」

「……」

「ね、私實は、宵から其事を考へて睡なかつたんですが……今又那樣寝汗なんかお掻きなさるし、能く〳〵體が弱つて被居るんだわ。思切つて轉地でも爲すつて、早く治してお了ひなさらなきや可けないと思ふわ。」

「さあ……僕もね、思つたよりも衰弱が甚いので、實は驚いて居るのです！　這麼體を爲て結婚も無いもので……結婚の資格なんか無い體で……」と口籠りながら繁を見ると、瞳も動かさずにパッチリ自分を見詰めて居るので、顔を赤めて苦笑を爲て、「何しろ、僕も是から新生涯を築揚げやうと云ふので、前途も遼遠だのに、體が這麼ぢや實に心細い！　何うだらう――貴方は勸めるんだから――轉地でも爲て養生したら僕の此の健康は恢復出來ると思ひますか？」

「それは出來るでせう。恢復出來なきや又、爲やうが無いぢや有りませんか。」

「でもね、僕は何だか恁う、生活の力が減びて了つたやうな氣が爲て……」と力無く言ふのを繁は氣を引立てるやうに、「那樣事が有るものですか！　貴方は體がお惡いから、彌張其の所爲で、御自分に悲觀なさり過ぎるんだわ。」「然うでせうかね……」何うも然し、自分の悲觀ばかりでも無いやうに思はれたが、强ひて氣を取直して、「いや、然うかも知れません。年から云つても未だ〳〵盛なんですものな、今から然う悲觀して居ちや爲やうが無い。何有、其内には體も治るでせう、是非治して、大いに勇奮爲ませうよ。」

「然うですとも！　貴方なんか未だ是からだわ。」男の其の元氣付いた辭に繁も力を得て、「ですから、早く何うか體の方をお治しなすつて――それには、何處か海濱へでも轉地なすつた方が同じ治るのもお早いでせう？」

「轉地ですか……？」と欽哉は枕に俯す。

「爰でもそれは、下町なんかと違つて閑静でも有りさすし、土地も高豪で悪か無いでせうが、だつて彌張東京の市中ですもの。空氣だつて下町に比べて幾らか害が無いと云ふ丈で、體に特別好いと云ふ譯でも無いでせう。貴方は故々轉地爲たつて、其程の利目も無いやうな事を被仰つて被居つたけれど、でも轉地すると爲ないと、何らか體の爲めかと言つたら……」

「そりや無論、轉地した方が好いに決つてますさ！」と引取つて、「繁さん、貴方は轉地が只出來るものとでも思つて居るか知らないが……僕の今の身で、那樣贅澤な眞似が出來るか出來ないか、其れからまあ考へて見て下さい。」

「些とも贅澤ぢや無い事よ、體の療養なんですもの。」と言つて、目元を和りさせたが、直ぐ又眞面目になつて、「私も其れは考へたのよ。ですが、少々のお金には易へられないから——お金が懸るからと云つて、愁つか姑息な事を爲て居て、何時までも體が那樣風で被居つたら同じ事なんですから、それよりも斷然轉地でもなすつて、今の内に早く治してお了ひなさる方が可からうと思ひまして……それにはね、私の所にも少しは用意が有りますから、一月や二月、貴方の轉地なさる位の事は何うにでも都合付きますの。」

欽哉は默つて其顏を眺めて居たが、起き直つて、「繁さん、僕は實に感謝爲ます！　貴方の好意は實に嬉しい！　ですが……いや、其れまでに心配して下さると聞けば、其丈で最う澤山です！　其上に何うも、那樣都合まで爲て貰つて、暢氣らしく轉地でも有りませんから……何有に貴方の其の好意に對する感謝の念丈でも、僕の體は蛇度治ります！」

「那樣貴方、好意だの感謝だのと、お互の間で水臭いわ。貴方は那樣體で被居れば私も彌張——二人が困るんですから……ね、私の言ふ事を肯いて下すつて、貴方も是非然う決めて頂戴な。」

「何うも繁さんのやうに然う言はれると、何と言つて可いか、僕も言ひやうが無いので。」

「だから、何とも被仰らないで、私の言ふやうにさへ爲て下すつたら可いのよ。」と笑顏を作る。

「だが……」と欽哉は又考へて、「其爲めに貴方は、無理な都合でも爲るのぢや無いんですか？」

「いえ、無理なんて爲ませんの……」

實は香浦の世話になつてから這方へ、繁も心に懸けて、月々貯蓄を爲た金が若干か溜つて居るので、其れを今度の用に當てやうとの事。尤も其れは、欽哉と一緒になる時の結婚費やら、新しく家庭を作る其の費用やらに用意したのださうだが、貴方の體には易へられぬから早速其れを銀行から、引出さうとの事。

「濟みませんなあ！　折角然うして貯蓄なすつたものを、繁さんの素志でも無い事に、僕獨りで使ふと云ふのは……」

「貴方は直き那樣他人がましい事ばつかり被仰つて——厭よ！　何うせ貴方、お互の何か用に立てやうと思つたお金なんですから、貴方の體の御養生が出來れば、私の素志にも其れで懷つて居ますわ。養生を爲さるのだつて、彌張二人が一緒になる準備なんですもの。」

「準備に……其れを然し使つては……」と腕を拱いた欽哉は、後々の事も氣に懸る、自

分は差當り何を爲て、生活爲やうと云ふ計畫も未だ定つて居らぬので。

「使つて了つたつて、又何うか成りますよ！お金なんか、溺物だつて言ふくらゐぢや有りませんか。」と彝は故ら快濶に、綺麗な齒並を見せて微笑んだが、「貴方は獨りで使つて濟まないと被仰つたけれど、愈よ被行ると決れば、私も香浦さんの方を四五日お暇を戴いて、御一緒にお供爲やうと然う思つて居ますの。」

「那棧譯に行きますか？」

「參りますとも！　ねえ、密月の意りか何かで、何所か景色の好い所へ行つて、暢氣に二人で遊びませうよ。」

「密月の取越ですか。」

目と目を見合せて、二人は義理のやうに顏丈で笑つた。密月の取越の意りでも、別に其れが嬉しいとも互に感じなかつた。

話に心取られて時の移るのも知らなかつたが夜も最う明げるのに間が無いであらう。何番鷄か、頻りに時を作つて、外は霜でも結びさうな曉方の寒さに、薄着の繁は胴顫爲ながら自分の寢床に歸つた。ランプを細目に爲るのを忘れて、睡るには些と明る過ぎる。

一旦耳まで被けた掻卷の襟から、繁は顏丈出して、「ねえ貴方、何處が好いでせう？　轉地を爲さるには。」

「さあ……彌張海濱でせうな。」と欽哉も這邊を向く。

「海濱の方が、何うしても暖でせうね？」

「それに、食物でも何でも便利だから。」

「ぢや、海濱は何處に爲ませう？」

「何處が好いでせう？」

暫く相黙した。

「何うです？　銚子は。」と先づ欽哉が口を切ると、女も、

「えゝ、私も然う思つたの。」

「一度最う行つた所だつて管はんでせう、却て思出にもなつて。」

「思出にもなつて。」と頷いて、繁は何か捜すやうな目を爲て、それから凝とランプの火を見入りながら、「思出ばかしで無く……那時の心持にも、ねえ！」

二人は始めて戀を明し合つた其時の事を思出したので、口には言はねど、同じやうに今の身の寂しさを感ずるのである。

五

男はメリヤスの裏毛のシャツに、秩父銘撰の綿の厚い書生羽織、赤糸入の華出な格子縞の布子は旅館の寢衣で、足元の露を厭つて裾を端折ると、下に重ねた浴衣の白地に、模樣風の字繁で何々館とある。女は同じ貸浴衣を襦袢代りに下へ着て、唯見ると紬のやうな變格子の米澤の綿入小袖に、金茶の横縞へ花鳥の飛模樣の入つた藤鼠の博多の帶。其丈で上には何も端被らず、「薄着で寒くは有りませんか？」と男が心配すると、「いえ、下に這麼物を着てますから。」と着物の袖口の奥から、肌襦袢の護謨緊になつた白の筒袖を見せる。

「ですが、私より貴方お寒か有りませんか？」と今度は女の方が心配して、「體が本當のお體で無いから。」

「僕は何有、厚着を爲てますし、それに今朝冷水摩拭を遣つた所爲か、體がポカ〳〵して暖

なくらみです。」

「彌張冷水摩拭は好いんですね、是から是非お續けなさいな。」

「續けませう！　以前にも些い〳〵夏の内は遣つたものだが……」

「寒くなるとお舍しなすつたのでせう？」

「だが、寒い時は思ですからな。今朝なんかも最う、肌を脱ぐのに顫へました。」

「今朝は又、陽氣が些と變ですものね。」

雲つて居る所爲でもあるが、冷々と肌寒い朝で、松林の中は濃く水蒸氣を立籠めたまゝ、未だ夜の明けたのも知らぬやうに密り睡つて居る。沖から來る風が戰々栫を搖動つて覺さうと爲ると、其度び林の端から端へ、丁度時雨の通るやうな寂しい音を爲せて、ハラ〳〵と影しい露を顫落す。が、後は一層靜に、樹間の靄が暫く亂れて雲の如く小迷ふ。日は曇つて居るし水氣を帶んだ松の綠の濃い仄暗い木立の蔭に、那邊這邊張渡した蜘巢が露に濡沾つて白い寶石を綴つたやうに美しく光つて居る。落葉の朽ちたのや、菌の香や、濕ぽい林の匂が爲て、不意に氣立しい鵙の聲が聞える、一頻り高い所で響渡るやうに啼いて了ふと、直く又深として了ふ。

「靜ですなあ！」と男は立留つて、「繁さん、歸らうぢや有りませんか？　何處まで行つても此通り靄で、露は深いし、最少し日が昇つてから來ませう。」

「あら、日は最う速うに昇つてますよ、今朝は曇つてるんですから……」

「貴方は然し、飯前でせう？　僕は牛乳を飲んだけれど……」

「いえ、可いのよ。」

繁は首を掉つて其儘先へ立つて行く。素足に旅館の番下駄を引掛けて、笹や芝草の露深い中を平氣で踏分けながら、折々可懷しい目を爲ては、靄を隔てた林の奥から何やら聞えさうに耳を傾けて見る。

偶と背後を振返つて、「ねえ關さん、松露は今は採れないんでせうか？」

欽哉は何か考へながら歩いて居た所へ、附かぬ事を問はれて、「えゝ、何が採れません？」

「いえね、松露は那れは、何時の物でせう？」

「何時でせうか……多くまあ春から夏のやうですな。」

「然う。私又、菌のやうに、秋主に出るのかと思つて。それなら小兒達でも、採りに來て居さうなものだと思ひまして……」と男の近づくのを待つて、「でも、那時にはドッサリ有りましたわね。そら、松露の天麩羅を爲すつたでせう？　貴方が。」

「然う〳〵！　園枝さんと三人で手料理の天麩羅を揚げたつけ。其後でしたね？　皆で燈臺見物に行つて、僕は佐藤に遭つた……」

「え。」と頷いて、繁は和りして、「燈臺へ行く途中でしたわ、私に話が有るから、松林で會はうつて貴方が被仰つて……」

「然うでしたか……」と心持赤くなつた頰を手で撫でて見る。

「あら、覺えちや被居らなくて？」

「何有、覺えちや居ますけれど……」と迷付いて、「那れは……直く其の翌日でした、繁さんと、爰で出會つたのは。」

「え、翌日のお午——何でもね、私が向ふの崖際へ出て海を見て居ると、貴方が待つて被居る

からと言つて、小兒達が敎へに來ましたの。」

「小兒が松露を採つて居たから、僕は慥か錢を遣つて、貴方を捜さしたのでした。」

曲り拗つた木下道は自と崖際近く廻り出て、其所からは樹立も疎に靄も薄く、遙に藍を濁したやうな海の色が仄と燈つて見える。風が無いので浪音は靜だが、暗い沖をチラチラ浪頭が白く走つて、灰色の帆影が遠くに唯一つ——動いて居るやうにも見えぬ。

「那時は、」と又那時を言出して、「這麼に天氣も曇つちや居ませんでしたわ。」

「麗な好い日で、それに春の末で氣候も好かつた。」

「あゝ然う！　櫻が散つてましたね。」と繁は思出したやうに叫んで、「那の櫻の有つた、那箇へ行つて見ませう？」

で、直ちに那邊へ道を取つた。木立の間を潛つて、雜木の中を分けて、道も無い所を妄みに横切るのであるから、露や蜘巢や、細かい羽蟲に行手を遮られて、欲は氣味惡さうに附いて行く。繁は足元も輕げに、兩袂些つと取揚げたまゝ、着物の穢れるのも知らぬ如く、時々振返つては男を待合す其の目は、喩へば花を縋ひ行く小鳥の目のやうに活々と輝いて、顏も常よりは華かに若やいで見えた。

轍の迹の附いた里へ通ふ一筋道も見えて、林も最う出外れの突先。前は直ぐ凖へに低くなつて、其所から一面に田圃が開いて、二人が始めて戀を明し合つた場所も慥に此の邊であつた。が、互にワク〳〵顫へながら握交した手と手に心有りげに散懸つた其時の櫻の木が見えぬ。似たやうな場所ではあるが、それとも覺違ひかと

思つて、繁は獨り其の周邊を歩いて見たが、其所を離れるほど段々地勢が心覺と違つて了ふので。

「あ、彌張爰ですよ！　繁さん、櫻の木が有る！」と欽哉が呼んだ。

「有りましたか?!」と引返して見ると、成程櫻らしい枯木のやうなのが一本。

幹は半頃から壓折れて、それでも枯れたので無い證據には、根元からヒョロ〳〵と蘆が出て、其れへ赤くなつたカラ〳〵の葉が四五枚着附いて居る。周圍は枝の籠んだ柃や、名も知らぬ灌木の薄紅葉したのが低く茂つて居て、繁の氣付かなかつたのも其筈であるが、然し記憶に殘つて居る所では、這麼見窄しい枯縣つたのが一本限では無かつた。と見ると、直き傍に同じ櫻らしい太い切株が有る。所々赤い木屑の食み出した穴へ、山蟻が出つ入りつ巢を構つて居るのを見ると、是は最う根まで枯れたのらしい。

「彌張爰です！」と欽哉は繰返し言ふ。

「然うでせうかねえ！」と繁は佗しげに邊を見廻した。

「松柏摧けて薪と爲るで、最う五年前ですものなあ！」

二人は默然と佇んで了つた。林の中とは違つて爰まで出ると、水蒸氣を含んだ冷い朝風が微寒う肌に沁みて、秋も最う深くなつたのが知られる。見渡す田面は、稻も大方刈られて了つて浸々と刈株を浸して水が顫へるやうに小波を織つて居る。畝には未だ種蒔前で靑味も無く、一面に朝霧の匂迷つた向ふには、長崎の岬が汐曇に曇つて、雲は低く海は暗く、水平線も鼠色に惚けて見え分かぬ。何に驚いてか、パッと刈田

の畔を鳴が啼き翔つた。

其れを寂しさうに繁は見遣つて、「那時には、雲雀が啼いて居ましたわね？」

「雲雀も啼いて居たし、這麼何を見ても灰色のやうな陰氣な景色ぢや無かつた！　あゝ、春は戀しい！」と沁々言つて、欽哉は深い溜息を吶いて俛れた。

一緒に釣込まれて繁も溜息洩らしたが、濃い色、鮮かな光、白日莊麗の其時の光景が眩いやうに目に浮んで、身も魂も其の幻影に溶入るばかり可懷しい。けれども、幻は終に幻で、明るい華かな昔の影は、却て今の寂しい心を暗くするばかり。

「あゝ最う……歸りませう！」と出抜けに然う云つて、欽哉には管はず歩き出す。

二人は默々として林の中を歸るのである。霧は餘程薄らいで、木立も幾らか明るくなつたが靜さは彌張前に變らぬ靜さ。今漸と塒を放れたらしい朝鴉の獸つて頭の上をバタバタ飛去る羽音が、不意に耳を聳たせて、露を散らし枯葉を落して行くのが、深とした樹間を向ふへ何所までも聞える「松柏摧けて薪と爲る」と蟲の一句を歩きながら欽哉は繰返して、其の古詩の續を漫覺に口吟んで見たが、繁に「年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからず――全くですね、櫻は縱んば昔のまゝ殘つて居たつて、我々は最う那時の我々では無い。花なら枯れない限り、春が來れば又咲くと云ふ事もあるが、人間には一度最う去つた春は永久に歸りませんからな。」

「全くね、然う思ふと情無いわねえ！」と心から情無さゝうに頷いた繁は、行く時の元氣と反對に、足の運びも重さうに打沈んで了つて、「それもね、那僅自然と恁うなつて――丁度あの、春から夏へ押移つて行くやうに、若い時の華かなが段々樸味になつて恁うなつたのなら、それは心殘も無いでせうが、私達は言はゞ咲いてる花を中途で散らしたんですものね。散らしても未だ何有、後が咲くと思つて居ると、何時か最う春は去つて了つてたんですもの！」

「ですが。」と其の滅入つたのを見遣つて、「何も春ばかりが生活の意義では無いのですから……花は散つたが、お互に實を結ぶのは是からでさ！　去つた春は去らしめて、是から實實な、ね、新しい人生の夏を迎へませう。」

女は深けるのも早いし、自分の身は最う春の去つたのを、繁も今日始めて知つたのでは無い。夏を迎へると云ふ事も前からの覺悟なり希望なりであつたのに、其れが今更何故か氣乘の爲ぬのが訝しく、自分で自分の心を迷ひながら足も遲れる。二人は今、花は春に限つたものゝやうに言つて居るが、花は夏も咲く、秋も咲く、多ですら稀には咲くので。繁は究り花無き夏を迎へるのが物足らぬのであらう。

「實實な――然うだ、誰しも若い内は免れない事だが、僕は殊に實實で無かつた！」と言ちた欽哉は、手に觸る小枝の末葉を毟つて前齒で噛みながら、難しい顏を爲て歩いて居たが、旋て其の葉を吐出すと言つた「那頃の事を考へると、實に何うも、唯慚愧あるのみです！　繁さんを捉へちゃ能くバッバと戀愛論を爲たもので。戀愛論も可いが、其れが極めて不條理な――自分勝手の好いやうに、然も尤もらしい理窟を附けては貴方を欺いた……いや、欺いたのぢゃ無い、迷したのだ。欺いたのは貴方で無く、寧

ろ僕躬ら欺いて居るので……毎も口癖のやうに、結婚は戀愛の墮落だと云ふ事を言ひましたね？」

「えゝ。」繁は事新しく那樣事を言出したのが分らなくて、怪訝さうに男の顏を眺めて居る。

「結婚は墮落で、結婚以外、夫婦以外、久遠の愛とか戀とか稱へて、戀愛さへ爲て居れば年を加らないやうな事を言つて居た。愛する爲めに愛するだの、戀其自身が永久の希望だのと、成程些つと開くと空想的で美しいやうにも聞えるが……美しいとか詩的とか云ふのは、そりやプラトニッククラブか何かで、那頃の僕は又、プラトニックなぞ寧ろクラシカルで、近代的で無いと云ふ鼻息だつた。それに、靈性ばかり重んじて、肉の力を閑邦した從來のクリスト教思想には反對だつたし、戀愛だつて決して精神的滿足のみが滿足で無いと信じて居た。それならば、何故結婚が墮落だらうかと言ふに――繁さんを僕が迷したと言ふのも其れです。(露に濡れた額を拭つて)正直を言ふと僕は結婚を恐れて居たので――墮落とか何とか其れは口實で――結婚から生ずる責任、夫婦と云ふ社會上道德上の關係を恐れたのです。那の當時繁さんは獨身主義で、獨身が不自然である事も、貴方が若い一時の氣紛れに過ぎない事も承知して居ながら、一緒になつて僕は、やれ夫婦は人格の犧牲だとか、やれ家庭は天才を滅すとか……皆それは、他日の責を逭れる爲めの逃道だつたので……」

「では、あの。」と繁は唾津を呑んで、「那頃被仰つた事は、皆それでは、貴方の御本心ぢや無かつたのでの？」

「と云ふと、始めから僕が成心あつて繁さんを

欺いたやうになるが、」と首を掉つて、「然うでも無いので、僕は自分で先づ自分を欺いて居たのです。例へば夫婦と云ふ形式の束縛を受けないで、戀は何所までも戀で居やう、ロオマンチックの戀、趣味を生命にして藝術的生活、然う云つた事に僕は又實際信仰を持つて居たんですからな。けれど、それを實行して、飽くまでも在來の道德習慣に反抗し通す覺悟が有つたかと言ふに……全きり無いでも無かつたが、さて有つたとも立派には言はれない。慣習とか形式とか口でも呟して、現に其れを行爲にも破つて居た、が、內心では彌張恐れて居たので。究り、那頃の僕の主義の程度は……主義に程度も可惟いが……口で標榜して主張する丈の信念は持つて居た、然し實行するまでの勇氣は、有りやう無かつたのだ。無いのに其れを實行したから、さあ……手も足も出なくなつて、全で血迷つて了つて、到頭法律上の制裁まで受けるやうな馬鹿な事を爲て、輕蔑して居た社會から、却て這箇が葬られねばならないやうな目になつたんです！」と太息を吁く。

繁は男の顏から目も放さずに聞いて居たが、段々伏目になつて、小聲で、「然う被仰れば私だつて、那頃は……」と言懸けて遲つて、「まあ舍しませう、昔の話なんか、ねえ貴方。貴方だつても其限葬られてお了ひなすつた譯でも有りませんし、是から又社會に立つて、其處にでも成功の道がお有りなさるんだから、何も那樣に氣をお落しなさる事は無いわ。それに、私のやうな者でも幾らか苦勞したお蔭には、正ざら昔のやうでも有りませんから――何時まで那樣藝術的生活とか趣味が何う恁うと氣樂な事を言つち

や居ませんから――家を持つたら最う、一生懸命で内助の方に盡しますよ。」

「何うかね。是から僕も新しく生活の道を取つて、當分さあ前も分らないやうな長途に上るのだから、何うか道連にも成り、疲れた時には手も引いて下さい。それに就けても……實に貴方には氣毒でならん！　僕さへ無かつたら、是までだつて無論平和だつたらうし、今頃は最う立派な――繁さんの才色を以てすれば、立派な最う夫人にも成つて居られたんだらうに……這麼失意の者と一緒に、是から又……」

「お舍しなさいよ！　最う。」繁は矢庭に打消して、「那樣過ぎた事を言つて見たつて爲やうが無いわ。それよりか、貴方も最うね、結婚は墮落だなんと被仰らないで、(微笑しながら)戯ひね、夫婦や家庭は平凡なものだつても、何うか其れを、途中でお飽きなさらないやうにお願して置いてよ。」

と笑談らしく。

「何うも……貴方は未だ僕を買冠つて居るのだ！」と欽哉は飽くまでも眞面目で、「正直に白狀爲ますが、僕は甚麼平凡な境にも甘んじ得られる人間なので、以前は成程、常識を貶したり、天才がつた事を口にしたり爲たが、其實何有に、僕は尤も常識的の、平凡な樣な人間なんです！　それは誰しも自惚の無い者は無いが、僕なんぞ……豈か天才とまでは自惚れも爲なかつたけれど、人と比べて天分も薄いとは思はないし、性格から云つても、單に妻を娶つて子を生んで、それで人生の能事終れりと爲てるやうな、那樣平凡な人間とは違ふと信じて居た。所が、些と違つて居や爲ない、寧ろ普通の人間よりも缺

點の多い人間で、慾つか自我を振揚げたり、常識を逸したりなぞ爲ると、肝心の後括が出來なくメチヤ〳〵になつて了ふ。まあ〳〵僕のやうな者は、大人しく自分を撓めて、何所までも常識に隨つて、可成其れを逸しないやうに惴々ので居て、漸と身が保てるので……然し、這麼樣な人間と知つたら、繁さんも厭氣が射すか知らないが、其代り最う貴方の案じるやうな那樣氣紛れは慥じて無い、平凡に安住します！」

自分でも正直に白狀するのだと言つたが、何樣其れは、見えも飾も無い欽哉の懺悔であらう。繁も何だか引入れられるやうで、自分とても彌張躰ら歎いて居た事も無いでは無く、又貫冠られたのを可い事に、故更然う見せて通した覺も有るが、今其れを一緒に懺悔せねば濟まないやうな氣も爲る。けれど、元々懺悔と云ふものは、自分自身を悉皆傷切つた上で無くては、眞正直に出來るものでは無いので、人に由つては懺悔其の物をさへ見えに爲る事がある。欽哉は昔能く煩悶を說いては、自分の苦痛を訴へるのが好であつたが、今は懺悔を語つて、其の痛恨を人に聞かせやうとする……

不意に雲間を洩れて、樹間に射込む薄い日影が、靄を通して虹の如く二人の行手を遮つた。其影に面も明るく、繁は急に冴々しい調子で「ねえ、今日は貴方何うか爲ちや被居らなくて？何だか自信の無い心細い事ばかし被仰るぢや有りませんか――本當に、貴方のやうでも無いわ！」と言つて、取つて附けたやうに笑つたが、「皆體の所爲ですよ。屹度神經衰弱か何かで那樣氣が偶と爲さるんですよ。私なんか此通り體も達者ですし、それに是まで散々苦しい目に

遣つて、それでも何うやら辛抱爲通して來ましたから、今ぢや最う那樣に世中を怖いとも思ひまんの。ヅウ〳〵しく成つたんですか、私是で、存外氣が强いんですよ。」

と、言はれて見ると、欽哉も今更に、自分の弱い事を意氣地無く打明けたのが恥しいやうで獨り赤くなつて、何やら言分ありげに唇を動かしたが、此時丁度木立が蠢きて、二人は林を出た。

「あら、這麼方へ出て了つて！」と喫驚したやうな繁の聲に、欽哉も銜い氣を逸らされて、言はうと思つた事も言はずに歇めた。

繁は立留つて、邊を見廻したが、「然う！　何でも此の砂山を越すと、向ふが香浦さんの別莊の有つた、那の邊ですわ。」

「香浦の別莊は、瓣張那儘ですか？」

「さあ……何うなりましたか。何でも一三年前にお賣りなすつたやうなお話ですが。」

「何うして賣つたんです？　好い別莊だつたに」

「阿父樣がお亡くなりなすつて、最う要らなくなつたんでせう。速男さんは軍隊の方でお忙しいし、園枝さんは餘所へ嫁いてお了ひなさるし、外に最う別莊なんかへ來て被居る方も無いものですから。」

「ぢや、記念の那の別莊も何うかなつて了つたので？」と殘惜さうに言つて、欽哉は寂しげに笑ひながら、「未だしも、松林が海にならないのが不思議なくらゐ。我々が思出の種は、皆最う滿足にや殘つて居ませんな。」

「ですが、別莊は何も枯れや爲ないでせうから」と同じやうに寂しく笑つて、「持主は變つても、家は那儘有るでせう。然う云へば、那頃居た那

の留守居番の爺さん媼さん、何う爲たでせう？」

「最う可い年でしたから、死んだでせうよ。」

「然うですか知ら？」と繁は先づ歩き出して、「死なないまでも、持主が變つちや最う居ないでせうよね。」

然う言ひながらも、二人は砂山と砂山の間の細道を別莊の方へと取るのである。可成最う高くなつた日脚は、幾重にも掩重なつた密雲の蔭から斜に洩れ射して、其所丈雲が明るく圍れたが、未だ晴切らぬ靄に黄ばんだ鈍い光線が、仄暗い海面の一所にチラ〳〵煌めき動いて居る。風が無いので仍更ドンヨリと、全で月夜の景色を見るやうに、白い砂地に二人の影も淡々しい。

砂山を放れると、案の如く平家造の別莊の手前へ出た。香浦が持主であつた頃とは古くなつただけで、五年前と格別變つたやうにも見えぬ。昔のまゝ樅木も何も無い目瞭しの廣い庭には、砂地の細かい草が一面に苔を置いたやうに、明るい緣の下まで生えて、雨戸はピッタリ閉切つてある。何所にも人の住んで居さうに見えぬので、留守居も置いては無いのかと怪んだが、低い四目垣に付いて裏へ廻ると、豪所に續いた亞鉛屋根の下屋丈が障子になつて居る。と、其の横の噴井戸の傍で、獨り寂しげに洗濯物を爲て居る爺さん。

「お、瓣張生きてる！　那の爺さんだ。」と欽哉は一目に見て取つた。

人の氣勢に、爺さんはヒョイと這邊を見たが怪訝さうな顏を爲て、其儘又俯いて盥の中の物をザブ〳〵洗ひ出す。耳も以前より禿げて、顏の皺も目に立つて殖えたが、正さしく其れに違無いので、欽哉は垣根の外から名を呼んで見た。

すると、耳は未だ遠くもならぬと見えて、爺さんは直ぐ又盃を擧げて浮瀧の手を歇めたが、目をシバ〳〵させながら、返事も爲ずに二人を見て居る。

欽哉は重ねて名を呼んで、「お前最う忘れたかね？」と垣際へ寄る。

「はあ……何方だつぺい？」と小首を拈り〳〵爺さんも少き寄つて、「何方だつぺい？　何うもはあ……」

「忘れたかね。それ、香浦さんの未だ別莊で居た頃、東京から勉强に來て世話になつた、關と云ふ書生が有つたらう？」

「然うだつたかね？」

爺さんは容易に思出せなかつたが、欽哉が色色其の當時の事を言つて聞かせたので、漸との事で、「然う〳〵、那時の書生さん――悉皆忘れて了つて濟みましねえ！　私、はあ、年加つて毫妹爲ましたゞあ、何でも物忘して愜へねえだよ。」

「でも、這箇に彌張弓縋いて居るんだね？」

「行所が無えもんだからね。」

「媼さんも達者かね？」

「媼さんかね？　餘り達者でも無えだよ。」

「體でも悪いのかね？」

「何うもね、幸福が悪くつて……」と目をシヨボ〳〵瞬いて、「糸狂になりましたゞよ。」

「糸狂に?!」と欽哉も驚いて、「何う爲て？」

「何う爲てつて……」爺さんはブル〳〵首を掉つて、談すのも愁さうに見えたが、「まあ這箇へ入つてくらつせい、茶でも上げますべい。」

で、欽哉は繋を伝して木戸口へ廻る。

「那の樣子ぢや、到底も最う繋さんの事なんか覺は有りますまい。」

「然うでせうとも、私は本の二三日しか居ませんでしたもの。」

二人は木戸を入つて、水口の閉つた臺所の前を通つて那邊へ行くと、爺さんは下屋の框際に薄緣を敷て、生溫い櫻湯を啜めながら、さて語出したのは恁うであつた。爺さんは一體子に緣の無い方で、是まで夫婦の間に四人出來て四人共死んだ。何れも五歳六歳くらゐで早死を爲たが、四人目の其の末子丈は希しく成人して、一人限の伴ではあるし、それに家業柄にも似合ぬ辛抱人で、(家業は漁師)老人夫婦も此子あるが爲めに老ゆるのも知らなかつたくらゐ。所が一昨年二十五の厄も無事に濟して、是から嫁でも捜して遣らうと思ひつゝあつた去年の秋、戰々と南風の戰く朝、伴は毎もの如く漁に出ると、風は俄に北東に變つて、海は見る〳〵大荒！沖に居た其時の漁船は何れも破れたり沈んだり一人も無事に歸つた者は無かつたので、老人夫婦は現に磯端に立つて、我子の船の難破するのも見て居たさうだが、終に救ふ道が無くて見殺に爲たとの事。

老人夫婦の嘆は言ふまでも無く、殊に子煩惱の媼さんは、其場から氣が狂つて了つたので、死んだ伴の最う一週忌も來るのに、今だに其れが鎖まらぬとの事。尤も氣が狂つて居ても、別に暴れるの何うのと云ふ危險な事は無く、唯我子の姿を目に見たり、其れと話を爲たりするので、而して毎日浪際へ出ては、沖を眺めて歸らぬ者を待暮らすとの事。

「……おゝ、媼さんが又繋吹に濡れて來ますべい。」と爺さんは自分の其話で氣が付いて、「私、

些つと那れを搾つて來るだらからね、お前さん達、勝手に湯を注いで喫つてくらつせい、晩までに乾して置かねえと、媼さんが、はあ、着て寐る物に困るだ。」と言ひながら、大儀さうな掛聲と共に漸と框を放れて、最の盥の洗濯物を搾揚げに行く。

「可哀さうねえ！」と繁は其のヨボ〳〵した背後姿を眺めて沁々言ふ。

「氣毒なものさねえ！　那年になつて。」と欽哉も心から言ふ。

爺さんは洗曝しの女の單物を盥から重さうに取揚げて、例の掛聲を爲ながら、僅に水を搾つて、其れを竿へ通さうと爲る。

「まあ、那樣搾方で乾くものですか！」と言ふと、繁は行成那邊へ駈けて行つた。

爺さんの頻りに濟まながるのを、無理に引取つて、自分の兩袖捲り揚げ、袂の端を前齒で銜へながら、グショ〳〵の洗濯物を手際に搾切つて遣る。薄黑い雫がボタ〳〵雨垂のやうに落ちて、繁の眞白な足の甲を染めた。

盥の中には未だ何やら漬つて居て、其れの始末も繁が爲て遣るので、其間に欽哉は一些つと座敷を見せて貰ひたいが、爺さん、上つても可いかね？」

「可いだとも！　戸閉めてあるだあから、暗かつたら開けてくらつせい。」

留守居番の居間になつた下屋の六疊を通つて暗い廊下を曲ると、庭に面した其所の十疊二間、五年前に欽哉が暫く滯在した、思出多い其の座敷である。普請は外から見たほどに、木口も古びて居らぬが、雨戸を閉切つて、簷の明障子の硝子越しに白い薄明が僅に射入るのみで、仄暗い座敷の中は疊も揚げて了ひ、建具も大方取外して壁際に積み重ねてある。床板の隙間を洩來る縁下の風は濕氣臭く、黴と埃の匂が古家のやうに陰氣臭い。

廊下にあつた古いスリッパを引掛て闇の内へ入つたが、と見ると、床脇の柳障子に圓く影繪の如く、雨戸の節穴を通して逆樣に庭の色が映つて居る。其の丁度前へ、毎も欽哉は机を据ゑて居たので、實利主義の香浦が好みで、今の柳障子が其頃は無雅な摩硝子の二枚戸になつて居た。で、調物を爲ながら、能く其れへインキで心覺を書き記したものだが、筆の次手に自分の名の頭字のKと、繁のSとを組合して見たり loveだの liebeだのと樂書しては、自分でも氣恥しいやうな若々しい空想にのみ耽つて居た。而して我知らず獨笑を洩して居るのを、爰の媼さんに折々見付けられて、あんでも嬉しい事があるだつぺい。思出笑を爲るのは何うだとか云つて誰はれた覺もある。

「あゝ、氣の若い面白い媼さんだつたが……」と欽哉は然う思つて、愁然と頭を垂れた。

物皆を移し去る、時の流の激しい力を思ひながら、欽哉は冷い床柱に靠れて仄やり障子の影を眺めて居た。暗い空座敷の中に、唯其所ばかり物の色を淡く映して、然ながら消えやうと爲て消えも遣らずに、微に殘つて居る遠い〳〵心の影でも望むやう。若しや其の障子の面に、昔書いた文字の迹でも殘つては居まいかと、偶と那樣事も思つて密と手を遣らうと爲ると、手に遮られて障子の影は消えて了ふ。

欽哉は引込めた手を、其儘兩脇に腕組を爲て、頭を掉りながら座敷を出た。繁は最う洗濯物の

始末も爲て遣つて了つて、其所へ歸つて來た媼さんに談込まれ、氣狂對手に困つて居る處であつた。

六

あゝ、日は今暮れんと爲るのである。

釣瓶落しの秋の日見る〳〵松林の岡に隱れて一頻りパッと染めた夕榮雲の薄れ行く西明を脊に、東の方太平洋の蒼然たる暮色を望んで、浪打際の岩端に欽哉は獨り佇んだ。陸と海と溫度も丁度中和の時刻で、大氣は凝つて戰との風も動かず、夕凪の濱邊は物侘しいほど靜に〳〵暮れて行くのである。間斷無く寄せては返す雄渾の浪音のみは、毎もの如く浦から浦へと響き傳つて、それすら逆湧の勢が常よりも弛んで單調に聞える。汐は次第に高く潮して、浪頭の白い泡と一緒に打上げらるゝ藻や海草や、磯臭い匂が鹽氣を含んだ邊の重い靜な空氣に充ち滿ちて居る。

天は相變らず鬱つて居て、長崎の岬は日ねもす時雨れてでも居るやうに眞暗たつたが、夕日の沙殘に一頻り明るく、磯際に祠つた夷神社の鳥居の頭がポッチリ黑く見える。船は固より水鳥一羽目に入らぬ夕暮の海は、渺茫として水光仄に、薄暗い水平線からチラ〳〵細かい浪を織つて、織目が皺となり、襞となり、蜿となり、段々高く大く疊み寄せて、近く暗碧の山の如くに皺と打突つては、サッと白く碎けて引返す。と、引く浪に洗はるゝ岩や渚の黑い濕色が、西明にキラ〳〵キラ〳〵靑金を散らしたやうに寂しく光る。

欽哉は刻々に暗くなり勝る海面を眺めて、遠く遙に沖の那方から、無限の浪を刻んで不窮に傳へる潮の響に耳傾けた。窮り無い海原は、窮り無い大天と相接して見ゆる如く、限りも知らぬ其の水の果は、旋て時劫の海に連つて、其所に無限を遡る過去の千波萬波。空間時間一つ感情の潮に溶けて、遠く〳〵來方遠く打寄せる足元の浪は、遙に生れぬ前の世の悠久なる不滅の響を傳へるやう。

「不滅の響——其れは然し、何の意味だらう？」

と欽哉は考へた。

何とは知れぬ哀愁の胸に迫るやうな浪音、然かも魂は其れに憧れ行くやうな可懷しい潮の響。能く人は何一つ記憶に殘らぬ幼兒の昔を思出して、母の添乳の優しい唄を夢心地に聞いて覺えて居るやうに感ずるものだが、今欽哉は其れと同じ心持が爲る。其の音、其の響、あゝ其れは記憶でも意識でも無い、實在に育まれた心靈の囁き——永遠なる生命の反響である。

微に殘つて居た西明も漸う消えて了つて、突然、月を浴びた霜のやうな靑白い一道の光が暗い海面を走る。サッと末廣がりに放射した其の光の途は、浪が銅色にムク〳〵湧立つ如く、欽哉は目映しさに思はず目を數瞬いたが、其れは犬吠崎の燈臺が點火したのであつた。

「ほうれ、那箇に見えたぞあ！」と誰やら出拔けに背後で叫んだ、「那箇に居る！　那箇に居る!!」

思寄らぬ人聲に欽哉は飛揚るばかり驚いたが薄明に能く見ると、自分の乘つた其岩に靠れて、同じやうに海を眺めて居るのは彼の別莊番の氣狂媼さんであつた。何時の間に來たのか、浪音に紛れて知らなかつたが、媼さんの足元には浸

浸汐先が潮し寄せて、浪の來る度びパッと仄白く其の周圍が泡になるので、捨てゝ措いては掠はれて行きさう。それに、自分も蠱から冥想に耽つて居て氣付かなかつたが、汐は最う餘程高く上げて來て、乘つた岩端も半ば水に浸されて居た。

で、其所を下りて、媼さんにも、「さあ、お前も危いから、那邊へ來な。」

手を掛けて促すと、媼さんは素直に附いて來る。暗くなつて能くは分らぬが、白髮交りの髮毛そゝけ、沾ろな裝を爲て、裾も袂も浪の繁吹でグッショリ。素足にザク〳〵砂地を踏みながら何やら口の内で冗々分らぬ事を喋つて居る。

「あゝ、那箇に居る！」と不意に立留つて海を見遣りながら、瞭りした調子で欽哉に、「居るだつぺい？　ほれ、お前にも見えるだつぺい。」

「何が？」と訝りながら欽哉も立留つた。

「何がつて、那れ――那れが見えねえだかよ？」と言ふなり、氣狂の糞力で啜り欽哉の腕を掴んで、「能く見さつせい、那箇に、はあ、忰が居るだよ。」

「忰が？」愕としたが、「はゝゝ何を言ふんだ。」

「何笑ふだ！　那箇に居る那れが見えねえだか？」と躍起となつて言つたが、思返したやうに急に沈んだ聲で、「無理も無えだあ。忰は、はあ、押死んで了つたゞあからね、お前にや見えなかつぺい、見えねえも無理無えだよ。だがの、押死んでも魂は生きてるだよ、ほれ、向ふを見さつせい、向ふの沖で那麼に這邊へ見てるだ！」

然う言ひながら、媼さんはッカ〳〵と浪際へ行くので、欽哉は驚いて抱き留めた、抱き留め

られたまゝ、暗い沖に凄と目を据ゑて居るので、甚麼事を又言出すかと氣味惡げに固唾を呑む。

と、暫くしてから、「何ぜうにも、此の浪だあ！」とばかり、シク〳〵泣出した。

寂しい荒磯の浪打際に、狂女と唯二人、欽哉は何時までも暗い海を眺めて佇んで居る。

「だがの、」と媼さんは振返つて、「浪めが甚麼に邪魔爲べいたつて、忰の魂は、はあ、丁と俺に通ふだよ！　體ちや慥へねえだが、魂は海でも浪でも邪魔出來ねえだあからね。」と言ひながら、幾らか心も落着いたやうに靜に歩き出す。

欽哉も安心して頷いて見せたが、暗くて互の顏も分らぬ。別莊さで送り屆けて遣る意りで、媼さんの摟せた手を引きながら、足元も最う定かならぬ渚傳ひ。曇つて居るが月夜で、仄に明みを持つた雲の切目から、高い星天が底知れぬ淵を望むやうに所々黑く見えて、星影とも月明とも附かずに仄と沖が白んで居る。廣い海は燈臺の强い光に一部分を照らさるゝ爲めに、細長い其の光の通はぬ所は一層暗く、眞黑に壘み寄せる浪が青い燐光を煥めかせて――ああ、深祕の響は益々高い。

「媼さんには何う是が聞えるだらう？　見えると云ふのは、一體何う見えるんだらう？」と欽哉は訝つた。

遙に沖を望めば、其所に自分も何ものか見えるやうであつて見えぬ、浪の音を聞いても、何か自分の胸に響くやうで分らぬ。媼さんの見えると言ふのは、自分の其れとは同じで無いかも知れぬが、左に右く自分の目よりは明かなのである。成程狂つては居やう、けれど、狂つて居るから直ちに過つて居るとは斷じ難い。我々常

識を以て圖り知られぬ事を、渠は知り且つ見聞するのであるが、喩へば白晝人は唯日の光を見るのみであるのに、偶々目明かに星を見る者があつたからとて、其れを强ち妄とは斥けられまい。魂が見えると云ふのも、媼さんには儼たる事實だらう！」然う思つて、偶と又足を留めて沖を見遣つたが、「然うだ！　幹の魂には限らない、彼の永遠なる生命の不滅の姿、其れが特に媼さんの目に然う映つて見えるのだ！」

劫初此方、有らゆる生命は唯時と共に遠く隔たるのみで、足元に打寄する浪が遙に沖の那方から送り來る如く、自分の此の生命も、旋て過去の生命の絶えざる流であらう。生死の汐瀨を超えて、自分は古く〳〵實在と共に在つたのを感ずる。大なる死の海に溶けては、更に新しい生命の浪と活き來つた自分は、不窮を傳へる此の潮の響を嘗て同じやうに聞いて同じやうに感じて、今可懷しく胸に響くのも、恐らく前の世の其の響が心の何所にか遺つて居るからであらう。浪は唯浪で、潮は唯潮であるのに、然かも不滅の響を聞き、悠久なる實在の姿を偲ぶと云ふものは、其の浪、其の潮と共に、自分も不滅であり悠久であつたからで。

風切つて居た風が陸から颯々吹初めた。

「あゝ、俺も早く押死んで魂になりてえだよ。」と媼さんが又喋り出す。「一人限の幹は先へ逝つて了つたゞし、爺さんも俺も、押死んで了や其限何も殘るもの無えだあからね、何時まで這麼用の無え婆婆に遺つて居べえと思つて！　一思に、はあ、浪にでも引かれて幹の傍へ行くべてえだよ！　俺が恁うして遺つて居ると、幹もの、其れに引かれて浮ばんねえだよ。」

言ふ事も最う正氣らしいので、欽哉も辭和かに、「まあ媼さん、お前のやうに然う思詰めても爲やうが無い。餘り思詰めるから體も惡くなるので、それでは却て息子さんも心が引かれて浮ばれまい。死んだ者は爲方が無いと諦めて、ね、氣を暢氣に持つて、過去つた事は一切忘れて了はなけりや可けない。忘れて了つて、最う何にも思はないで安氣に此先暮すのさ。爺さんもお前も、永い體で無いのだから……」

「ほれの、永くねえだあからお前、」と氣狂の癖に耳聰く、「何時そんだら、押死んでも心殘無えでねえか！　爺さんも俺も、魂は最う幹の所へ拔けて行つてるだあからね、體べい生きて居つても、先は、はあ、積れて居るだし、それに、誰一人血引く者も後にや無えだもの、何でも目瞑つて了や其れで片あ付くだよ。」と面白さうにゲラ〳〵笑ふ。

然う言つて見れば何樣那樣もので、欽哉も慰める辭が無くて默つた。

「だが……のうお前、俺が今押死んだら、魂は何うなるだつぺい？　幹は、はあ、俺に引かれて那して居るだが、俺も爺さんも押死んで了つたら、其限最う……俺や幹の魂は何所べい行つて了ふだか？　何も最う後に引かれるもの無えだし、何處べい行つて何うなつて了ふだつぺい？　のうお前、遠い向ふの方の、那の暗い向ふへ消えて了ふぢや無かつぺいか？　然う思ふと、俺、はあ、心細くてなんねえだ！　のう、何うなるだつぺい？」

媼さんは例の氣狂力で聲と欽哉の腕を摑んで、其の答を迫る。

「何うなるか、あゝ、誰が其れを知らう！」と

欽哉は深い溜息を吩いた。

逆縁ながらも、死んだ忰の其魂は是まで媼さんの胸に活きて居た。然し媼さんも爺さんも死んで了へば、後には誰一人血を引く者も無く、一家は其限死絶えて了ふ。渠等が祖先から傳へ傳へた箇人の永い存在も、其所に全く絶滅して了ふのである。魂は縦し不滅に活きても、永遠なる生命の其響は此世に傳へて誰が胸に通はう？　今媼さんが忰の魂を見、自分が現に前の世の響を聞く如くに、人と其れと何の縁に由つて切實に感應爲やう？　唯空漠たる宇宙に散り行く種族の響――人生の廣い類の音と傳はつても、最う其れは箇人の深い聲には通ふまい。あゝ、永遠なる生命！　過去に於て永遠不滅であつた此の生命、此の魂は、更に何う人間に活き、何う後へ滅びぬのであらう？

自分は今、時劫の海の岸に立つて、遙に生命の浪の限り無い來方を眺めた。が、目の前に開いたのは唯其の來方で、自分の佇んだ現在の足元を、一歩背後は最う眞暗！　過去と共に未來の無限も疑はぬが、然し現在の自分と云ふものを放れた後の生命が、設ひ不滅でも不死でも、其れは最う自分自身の關せぬやうな氣が爲る。媼さんの言草では無いが、是限遠い向ふの暗い闇に滑え行く魂ではあるまいか？　沖の那方から打寄する浪は足元に碎け散つて、海と陸との此の界に立つた自分は、永い過去を無限に憂んで來た生命の最後の浪打際に轉がる岩で――あゝ、荒磯の浪打際に音も無く轉がる冷たい岩！　周圍に漂ふ海草の一筋にも、此世に發育の根と繁殖の種とは持つて居る、岩は唯汐に曝れ、浪に弄ばれた果が、終には海底深く運び

去られて、其儘痕も留めず沈み行くのでは無いか！

あゝ、後の世は其の海底の唯物恐しい闇で、未來無き我が生の空虛を思ふと、欽哉は身内の血も急に鉛のやうに冷たく、慄然として眞暗な邊を見廻した。

其目の行手に、偶と提燈の明が見えたので、這邊へ來るやうではあるが、闇を千鳥に縫つて、搖々と右へ寄るかと思ふと、其の火影が又左へ行き、何うやら醉漢でも歩くやうに手間を取つて來る。段々近づいて、何か聲高に喚くのが聞えるが、浪音に紛れて言ふ事は分らぬ。醉漢が唄でも唱つて來るのだらうと欽哉は思つた。

「あゝ、爺さんが呼んでる！」と氣狂の方が先づ聞取つた。

成程、然う言はれて聞直すと、浪の音に途切れ〳〵、爺さんの嗄聲で「媼さんやあ……おおい……」

「おゝい！」と媼さんは應ずる、「爺さんやあ……」

すると、左右へ縫つて居た提燈が眞直に進んで來て、「媼さん、何してるだよ！　這麼に暗くなつて危ねえでねえか、早く歸らつせい。」

「今僕が、送つて歸る所だよ。」

「え、誰だよ？」と明を翳して見て、「あゝ、お前さんかね！　こりや、はあ、取んでもねえ。何うも、はあ、濟みましねえ……」と爺さんは頻りに禮を言つて、「何ぜうにも、人の見境無えだからね、甚麼にか世話べい懸けたつべい。」

「いや、別に世話は懸けないが……然し、氣を付けるが可いね、死んだ息子さんの傍へ行きたいと言つちや、不意に海へ入らうと爲るから。」

「無理も無えだよ！」と太息を吩いて、「察してくらつせい！私等はね、是までと云ふもの、全で自分達の慾う忘れて了つて、後々の事べい思つて丹精したゞよ。それを、肝心の忰に逝かれて了つて、最う、はあ、丹精も何も、媼さんと二人が一生棒に振つて了つたゞあからね。あゝあ、生效の無え事だ！　南無阿彌陀佛……」

爺さんは、改めて欽哉に禮を述べて、媼さんを促し〳〵連去る。

「あゝ、可哀さうに！」と獨言ちて、欽哉は其の背後影を何時までも見送つたが、「息子さへ生きて居れば、老人夫婦は那ならなかつたのだ！」と然う思つて、凝と兩手を兩腋に支つた。

提燈の薄暮い明に、トボ〳〵と歸り行く二人の足元丈ひやり見えたが、其れも次第に遠かつて、旋て覺束無い火影のみがチラ〳〵動いて行く。風が吹き添つて浪は高まつた、月明も無くなつて、眞暗な沖が鳴つて居る。

七

別莊の孫屋は、後から葺足したもので、屋根は低く窮屈な所へ、老人夫婦の其れ相當な所帶道具も有るし、媼さんの寢床を取ると最う一杯である。壁際の鼠不入の上に二尺ばかりの古廚子が置いてあつて、細骨の塗障子を左右へ開けたが、線香の火がポツチリ赤く、二分心のランプの薄暗い一間に佛臭い煙が漂つて居る。

汐に濡れた媼さんの着物を脱更へさせて、其の手を洗つて來てから、爺さんは廚子へ燈明を上げた。切火を打つて、鶴龜の蠟燭立へ小蠟を點すと、眞鍮の花瓶に挿した鬼燈の木の赤い實の蔭から、眞黑に燻つた如來の繪像の後光丈見えて、白木の位牌の前には、塗の剝げた華足臺へ佛供の飯が恭しく盛つてある。新しく線香を立てゝ、爺さんが伏鉦を鳴らし出すと、一旦寢床へ入つた媼さんも起出て來て、一緒に聲を合せて殊勝げに念佛を唱へるのであつた。

外には風の音と浪音、寂しい伏鉦の音に合せて稱名の聲物哀れに、何所やらで籠馬が啼出した。

「もし、もし些いと。」と女の聲。

爺さんはパツタリ撞木の手を留めて、媼さんが獨り念佛を唱へ續ける。

「ちよいと、爺やさん。」と重ねて呼ぶ聲に、爺さんは怪訝さうに立つて行きながら、大な聲で、「誰だ？　え、何だか？」

「あの、關さんは來て居ませんか？」

「關さん？　あゝ那の書生さんかね？」と急いで土間の戸を開けて、「來ちや居なさんねえだよ、だがね……まあ入らつせい。」

折からすツと風が、戸や羽目に砂の雨を吹付ける。

「まあ、甚い砂！」と踏るやうに土間へ入つて來たのは繁で、「來ちや居ませんの？　然う、夕方から一度も來ませんでしたか？」

「家へは來なさんねえだが、曩ね、媼さんを送つて來てくらつただ……」

其の途中で、丁度迎に出掛けた自分と行遭つて、其所で別れたから、お前さんと行違ひに、最う宿へ歸つて居なさる時分だと爺さんは言つたが、然し又繁の故々迎に來たのを心許無く思つて、「……それとも、濱邊を未だ歩いて居なさるも分んねえだが、私、搜して上げべいかね？」

「いえ、それなら可いの。」

繁も別に用があつて迎に來た譯では無く、獨り宿に居ても退屈な所から、自分も欽哉の後を追つて唯散歩に出て見たので。然し、爰へ的り來て居ると思へばこそ、暗い寂しい所も苦にせずに來たのであるが、欽哉が居ないとなると、獨り歸るのが有繋に氣味惡く無いでも無い。

「外は眞暗ね？」と顏を出して見たが、直ぐ引込めて、「甚い風！」

「砂被るだあから、這裏へ入らつせい。歸りにや私、宿まで送つて上げべい。」と言ひながら、爺さんが戸口を閉めると、家の中に籠つた線香の匂がプンと鼻へ來る。

其匂に繁は始めて氣が付いて廚子の方を見た。蠟燭は最う燼ち盡して、燃殘りの心のパチパチ撥る音が爲て、仄暗い其の前で、媼さんは何時の間にか睡倒けて居る。

「あら、何う爲たの？」と謝しげに見遣つたが、小聲で、「睡つて居るの？」

「然うだつぺい、暴さでお念佛上げて居つたどが……」と爺さんも那邊を見遣つて、「媼さん、風邪惑くだよ！　寢床へ入つて本當に寐さつせい、これ、媼さんや。」と聲を懸けて見たが、起きさうも無い。

「能く睡てるのに、起すのは可哀さうぢや無いかね。」

「可哀さうだかね？」と頷いて、「目覺めてる間は幷の事べい思詰めて、泣いたり笑つたり、氣休まんねえだあからね。睡てる内が極樂だつぺい。」

「何か其れなら、被けて置いたら可かないの。」

「然うだね。」

其所で、爺さんは寢床の搔卷を取つて、媼さんに着せ被けて遣り、其の次手に蠟燭を立て更へる。廚子の中は急に明るくなつて、位牌の白いのが目に立つ。

「佛樣は、あの、亡くなつた息子さん……？」

繁は妙に聲を掠めて、密と邊を見廻した。

「はあ、明日が丁度一週忌になりますだよ。今日はお逮夜だあから、恁うして、はあ、お明丈上げてね……南無阿彌陀佛。」と線香を立て添へる。

繁も我知らず手を合せて、小聲に念佛を手向けたのである。

「あゝ、拜んでやつて下らつしやるか？　有難えだよ！　幷も甚麼にか喜びますべい。」と爺さんは最う目をショボ〳〵させて、「お前さんも何かね？　子持つた覺あるだかね？」

「いゝえ。」と何氣無く言つたが、色を變へて、

「何故ね？」

「何故でも、最う、はあ、一人くらゐ有つてもえい頃で無えかね？」

「然う……」とばかり、繁は俛れて了ふ。

「早く一人持つて見さつせい、甚麼に可愛いものだか……」と言ふ時、今まで正體無く睡つて居た媼さんが、ムックリ起上つた。

爺さんも繁も思はず息を呑んで見戍る。

媼さんは引寄せられるやうに、フラ〳〵と戸口の方へ立つて行きながら、「幷や、お前一人遣るで無え！　待たねえかよ、俺も一緒に行くだあ！」

「何だよ！　媼さん。」と行成爺さんが抱へ留める。

其手を振拖ぎながら、「あゝ、幷が行つて了ふ！放して下らつせい！　放して下らつせい!!」

「こうれさ、お前何だよ！　夢でも見たつぺい？　の、氣落清けさつせい。の、媼さん。」

「あゝ、行つて了ふ！　行つて了ふ!!　放して下らつせい！　えゝ、放して下らつせいよ!!」

宥めても賺しても、媼さんは奈何な肯容れさうも無い。強ひて留立して逆ふよりは、言ふまに偽せて置いた方が鎮まるのも早いと云ふので、爺さんは故々提燈を點けて、媼さんの行く所へ附いて行く事に爲た。で、繁も一緒に其所を出た。

外は例の風と砂で、目口も開いては居られぬ。天は眞暗に曇つて了つて、愁ひ提燈の明が有る爲めに、闇に訓れぬ目は何所を見ても、墨の如く眞暗な中を、行手に高く燈臺の光が青白い虹のやうに半空を横切つて海に落ちたが、打寄する浪丈は仄白く暗に跳つて、繁吹か砂埃か、眞暗な目の前を黑く動いては通る。媼さんは何か向ふに見えるものでもあつて、其れを追駈けるやうに急々歩きながら、絶えず獨りで喋り續けて居るが、聲は風に吹散らされて、浪の音のみ物凄い。

「あゝ、行つて了つた！」と突然立留つて、キヨロ〳〵邊を見廻したが、泣聲になつて「到頭俺を措いて行つて了つた！　何う爲べい？」

「何有に、お前を措いて何所へ幹が行くべい、直き又來るだよ。の、直き來るだあから、家へ歸つて待つて居べい、の、媼さん。」と賺しながら、爺さんは手にした提燈を繁に出して、「私、宿まで送つて上げべいと思つたゞが、何ぜうにも目放さんねえだあからね、お前さん濟みましねえが、是貸すだあから勘辨して下らつせい。最う、はあ、宿まで直きだよ、向ふに燈見える

だ。」

睨を凝らして見ると、闇の中に黑く盛揚つた砂山の間に、更に黑く通つて居て、其の向ふに仄やりと火影が見える。爰まで來れば最う送つて貰ふにも及ばず、且つ爺さん達の歸るのに明が無くては危いから、繁は提燈も斷つて、其所から獨り宿の方へ辿つた。背後では媼さんも最う大人しく、爺さんの言ふまゝに歸るらしい樣子であつたが、闇は文無く、一歩放れると姿は見えなかつた。

砂山の下道へ來ると、上から吹下す砂を雨のやうに浴びて、繁は無中に駈拔けた。火影を目當に行くと、旅館の丁度中庭へ出たので、火影の射した其の硝子戸を開けて土間へ入ると、溜部屋の女中が「おや！」と立つて來る。

「外は眞暗で御座いませう！　まあ？　何所へお出まして御座いました？」

繁は青い顏を爲て、片手に着物の褄を取揚げながら、

「あの、何か拭く物を頂戴、足が砂塗れですから。」

「あれ、お髮も眞白で御座いますよ、お湯へ最う一度お入りなすつたら可う御座いませう。」

「然うね。」

「さあ、是をお召しなさいまし、其儘で管ひませんから。」と女中は梶先にスリッパを擲へる。

言はるゝまゝに繁は其れを穿いて上ると、女中は新しい浴衣を抱へて來て、長い廊下を湯殿へと案内する。廣い空んとした湯殿は、男湯も女湯もピッタリ湯槽に蓋が爲てあつて、流しの三和土も半ば乾いて、壁反しのランプが獨り煌煌點つたが、風呂番は最う釜前に居らぬと見え

て、女中が自分で蓋を取除け、湯加減を見て、「御緩りと。」と出て行く。

繁は砂になつた着物を手早く脱捨てゝ入つた。白い體がザブリと湯槽に隠れると、叢々立騰る湯氣は湯殿に漲つて、ランプが朧に曇つた。略と身内を流して、旋て揚つた暖な體は美しく桃色潮して、若い女の膩切つた生目細かな肌が、湯の潤ひにテラ〳〵瑪瑙の如く澤を打つて青かつた顔も仄と赤く上氣した。束髪を解いて女中が用意して置いてくれた洗粉で、砂埃を洗ひ落す。

乾いたタオルで濕りを拭ひ切つて、持重りの爲るほど多い髪毛をサラリと背後へ捌いたが、圓い兩肩を滑つて、ムツクリした肩中に嫋々と餘つたのが、胛から二腕に零れ被つて、滑かな大理石の圓柱を黑い蛇の纏つたやう。肉附見事な裸身を白い湯氣が雲の如くに遶つて、神話にあるニムフの立姿を見るやうに凝と流し場に佇んだ繁は、體を拭つて揚らうと爲て、端無く自分の乳房に心を留めたのであつた。

乳首は濃く色付いて垂れ、腰の周圍の宍置弛く、一度姙つた迹が今も在々殘つて居る……と三年前の其れが目に見るやうに繁の胸に浮んだ。其時の心の苦み、體の惱み、而して闇から闇へ葬つた胎の子を思出して、常には忘れて居た其の罪が沁々恐しく身を責める。

あゝ、母の胎内に宿つて此世に新しく生れやうとする其兒の命は、何程強い深い生活の願であらう！　それを、此世の光も見せずに闇へ送つた、送られた其兒の怨は甚麼だらう！　然う思ふと、現在自分の腹の中には正々其の怨が殘つて居るやうで、氣の所爲か、姙娠當時の胎動

と同じ不安を身内に覺えながら、兩手でワクワク胸を抱いたが、冷くなつた體を最う一度湯へ入つて溫めた。

偶と伏鉦の音が耳に入つて、それから聞澄すと、吹變る風の方向に連れて、折々聞えては遠かる。あゝ、磯端の那の一軒家で、此の寂しい風の夜と共に佛前の御明を守りながら、生先短い年寄夫婦が我子の冥福を祈つて居るのだと思ふと、自分の闇へ葬つた胎兒の冥福も一緒に祈られて、繁は思はず念佛を唱へたのである。

背後の松林に悲鳴を立てながら、湯殿の外を叫び廻る風は、息抜の夢想を逃出さうと爲る湯氣を激しく吹還して、其度びランプが瞬く。

「おや！」と色を變へて、繁は不意に湯槽の中に突立つた、而して天井下の無想窓を惻と見擧げた。

窓を吹入る風は、夢想に當つてヒューと笛のやうに鳴る。「あ、あの聲！」と口走つて、解捌いた髪毛は戰々波を打つて顫へる。

外を覗くと、仄暗な闇の中に胞衣を冠つた血淋漓の水子が、惻氣な聲して泣いて居る……と思ふと、繁はゾッとして、湯槽の中も血のやうに見えた。

八

「最う寢たんですか？」と障子を開けて入つて來た欽哉は、片手に濡手拭を下げて居る。

「いえ、少しあの、心持が惡かつたものですから……未だ本當に寢たのぢや有りません。」と繁は青い顔を爲て起直つた。

「貴方も、湯へお入りなすつたんですか？」

「外で砂埃を浴びたから、一風呂流して來まし

た。」と手拭を釘へ引掛ける。

「ぢや、今まで外に被居つたの？　外は眞暗でせう。」

「眞暗だが……然し夜の海は、晝見るよりも何だか深祕的で、意味が深い！」と言つて、欽哉は火鉢の前に坐つた。

繁は零れ被る洗髪を背後へ掻いて、「でも、那の砂の甚いのに、能く何時までも被居つてね。」

「さあ、風が出て來たので、大變な砂でした。」と茶盆を引寄せて、「繁さんも、ぢや外へ出たんですか？」

「私が淹れますよ。」と茶道具を自分の方へ取つて、茶を淹れながら繁は談した。

曩、欽哉を捜して別莊へ行つたら、今日は丁度老人夫婦が亡くなつた倅の一周忌の逮夜であつた事から、媼さんが妙な事を言出して、自分も爺さんと一緒に砂山の下まで附いて來て、それから湯へ入つて髪を洗つた事まで殘らず談したが、然し自分が湯殿で水子の聲を聞いた其事丈は言はなかつた。

「然うでしたか。いや、僕も色々變な事を聞かされましたよ。だが、氣狂の言ふ事にも、聞きやうに由つては耳を傾ける事があるので。實は媼さんの辭で大いに感じた事があつたから、僕も其れを、海邊に立つて獨りで考へて居たのです！」

然う言ふ欽哉は、氣遠く聞ゆる浪の音に心は未だ漂つて居るやう。

「媼さんの辭で？」と繁は氣味惡さうに男の顏を見て、

「何をあの、感じなすつたの？」

「何と言つて……未だまあ單に冥想だから、最

少し瞭り考へてから談しませう。何しろ、媼さんの那の樣子を見ると、何うも……子と云ふものは……」と言淀んで其儘默つて了ふ。

子と云ふ一語に、繁は湯殿の事を思出して色を變へた。風は絶えず雨戸に當つて、沖の鳴るのや、浪や、松林や、物の吠えるやうな音や、小兒の泣くやうな聲や、聞きやうに由つては樣樣に聞取られる。

一體、夏は夏が主の土地で、秋口から這方は毎日汐霧と風とが續いて、宿には殆ど客の迹を絶つて了ふ。昨日までは外に三人連の若い畫家達も滯在して居たが、其れも今朝立つて了つて、今は欽哉等唯一組。未だ然して晩くも無いのに廣い旅館は深として夜深の如く、人氣の無い間毎々々の障子が、隙洩る風にガタ〳〵鳴り搖れて居る。二人は火鉢を中に、ランプの火を眺めて仄やり相對した。

「貴方、ビイルでも喫つたら何うですの？」と出抜けに繁が言ふ。

「え、何う爲てです？」と欽哉は怪んだが、「暫く歇めて居た所爲か、一向最う酒なんか飲みたいと思ひませんよ。本當に好なのぢや無いんでせう。」

「でも、以前はお嫌でも無かつたやうだわ。能くそら、ギリシヤの何とか云ふ詩人の、酒の詩をお聞かせなすつたぢや有りませんか？」

「ギリシヤの？然う、アナクレオンですか。」と寂しげに微笑んで、「那麼極端な快樂主義なんか今は最う思つても厭な氣持です。」

「だつて、今から然う枯淡にばかりお成りなすつちや……偶には貴方、お酒ぐらゐ召上る方が元氣が付いてよ。」

「何うして！　這麼體で酒なんか飲んだら――一時はそりや興奮するが、後が屹度良けない！」と首を掉つて、「何故又、今夜に限つて鷗めるんです？」

「何故つて……餘り寂しいぢや有りませんか！」

「……」

「銚子へ來たら、お互に昔の事を思出して、最う一度那頃のやうな、ねえ、那いふ心持に若返る筈でしたに……何だか是ぢや滅入るばかしで却つて年でも加りさうですもの。」

「全くですな。」欽哉も其れは同感で、暫く考へて居たが、

「ぢや、ビイルでも命じませうかね？」

「えゝ、久振に召上れな。體に良けないほど、那樣に澤山喫らなきや可いわ。」

「貴方も飲みますか？」

「えゝ、飲みますとも！　今夜は私酔つて見ませう。」と繁は笑ふ。

其所で、電鈴を押して女中を呼び、何か有合せの下物を見繕つて、ビイルを抜いて來るやうに命じて遣る。

「久振にそれぢや、アナクレオンでも唱ひませうかな。」

「私も何か、戀の詩でも思出しませう。」

然う言つて、二人は目を輝かしながら相見て和りした。が、旋て命じたビイルも來て、さて其れを飲んで見た所で――ネクタアとやらの靈酒なら知らぬ事――今更五年前の心持に若返られるものでも無かつた。

此節は客が無い爲めに、料理場の方でも餘分の仕込をせぬから、本の有合せの物だと斷つて持つて來たが、高がビイルの一本ぐらゐに、故

故下物を拵へるのも手數だからであらう。晩の膳に附いた饅の具足煮に、生卵子と疊鰯、睡さうな顏して酌する女中を、後は最う可いからと言つて、寢床を取らせて置いて退らせた。

醉つて戀の詩でも唱ふ筈だつた繁も、元々酒は嫌な方なので、努めてコップに半分ばかりも飲んでは見たが、氣が引立つ所か、身内は心地悪く寒氣を覺えて、青い顏が仍青くなる。欽哉の方は又飲んで飲めぬ事は無い、一二杯のビイルで豈か後の體に障りも爲まいし、輕く御醉ぐらゐになつて見たい氣も爲ないでは無いが、何しろ對手が其れでは、約束のアナクレオンも出しやうが無いので。

「一向遣りませんね。何うです？　最う半分。」

「いえ、最う澤山！　是で充分醉つてますの。」と笑顏を作つて斷つたが、成程醉ふには醉つても、繁は苦しい醉なので、「私は何ですから、貴方些とお過しなさいよ。お酌爲ませうか？」

「いや、未だ有ります。」と欽哉は飲半しのコップを取上げて、小びゝ嘗めて居る。

話は又絶えて、二人は自分々々の物思に耽るのである。

湯殿の方ではザーと尾ひ湯を抜く音が爲て、それから暫く女中達の話聲も聞えて居たが、何時の間にか最う寐て了つたらしい。邊の鎮まると共に、浪音は近く高まつた。背後の野を越え林を渡つては、ドッと海に吹込む風が、遙に沖へと鳴つて行く。其の寂しい風の音に連れて、心を遠く浪の那方に漂はせながら、欽哉は果知らぬ暗い行方を思ひ辿るのであつた。

「それにしても……可哀さうですなあ！」太息と共に旋て口を切つて、「那年になつちや、最う

後の出來る見込は無いし……」

「何がです？」と繁は訊つた。

「でも、那儘死んで了へば、二人は最う何にも遺らないでせう。」

「二人つて、那の爺さんや媼さんですか？」

「然うです。息子と入替りになると可かつたので、二人は最う種紙を作つて了つた蠶の蝶だ。單に生きて居るといふ丈で、生活の力は盡きてる……けれど、其の種紙の種は先へ死んで了つたのだから。(溜息を吩いて)究り、死んだ息子が自分の生先と一緒に——生先と云つても自分の一生丈では無し、生きて居れば子孫も有つたらう、それを皆一緒に……老人夫婦の餘命までも息子が持つて行つたやうなものだ！　何うも災難で死んだのだから爲方も無いが……然し子の無い生涯ほど頼り無いものは無い。子は所謂第二の我で、二人は最う我の總てを第二の我に讓つて了つた、言はゞ鮫殼なのだから……」

「讓つて了つて……其の讓つた子に死なれたのですものねえ！」と繁は自分の事のやうに沁々言つて、凝と瞳を据ゑたまゝ一所を見詰めて居る。

「それも、壽命で死んだものなら左に右く……」と欽哉は持つて居たコップも下へ擱いて了つて

「何しろ、那の年寄二人を遺して置いて、息子を先へ殺したのは殘酷だ！」

「先へ殺した？！」

「でも、生先永い若者を無意味に殺して了つて、殘酷ぢや有りませんか？」

唇の色まで失つて、男の顔を直と見詰めて居た繁は、漸う安心したやうに瞬を爲た。

「何うか爲たんですか？」と欽哉も始めて氣が付いて、

「顏色も悪いし、何だか繁さんは變だが……」

「私？　いゝえ。」と顏を背向けて、「最う爺さん達の話は舍しませう、可哀さうで仍と氣が沈みますから。」

「然う、お互に醉つて若返る筈でしたな。」と寂しげに微笑む。

「えゝ。ですから、貴方も最つと召上つたら可いわ。」

「同じですよ、飲んでも發しないから。」

「何故發しませんの？　貴方がそれは、理に落ちるやうな話を爲さるからでせう。」

「ぢや、戀の話でも爲ませうか？」

「それが可いわ。」

けれど、改つて爲やうと云つて出來るものでは無し、二人は又默込んで了ふ。繁は自分の心の中を捜すやうな目を爲て、伏目に凝と胸の邊を見て居たが、旋て瀾を持つた黑水晶のやうな瞳が靜に動いて、其儘ランプの火を空とり見入つた。仄と眶が赤くなつて、口元に微な笑が浮んだと思ふと、長い睫毛を伏せて、美しい其目を膝へ落した。

「何う爲ました？」と欽哉が聲掛けた時には、最う寂しい顏になつて、「京橋の那の、佐藤さん方は何う爲たでせう？　國へ最う立つたんでせうねえ。」

「無論立つでせう。何故？」

「何故つて……那時そら、妙な女を連れて……ね、彌張爰に泊つて居たんですわね。」

「だが、那時には未だ那の男も、淸い少年の頃の記憶丈でも殘つて居たので……」と附かぬ方へ話を持つて行つて、「那樣女なんか連れて、無

論堕落は爲て居たけれど、それでも未だ純潔な時代を可懷しがつて、僕と燈臺の歸りに永い事昔話も爲たつけ。それが今では那麼風に變つて了つて、天で最う悔恨も何にも無いのだから……」

然し變つたのは佐藤ばかりでは無い。自分とても那頃の事を思ふと、總ての考から心持が全で別人の如くに變つて居るので、「それだのに變つた思想感情を以て、戀愛ばかり那時と同じやうに復活爲さうと云ふのは、今更無理なのだ！」と欽哉は思つた。

「貴方、明日は燈臺へ行つて見やうぢや有りませんか？」

繁は佐藤の其の話から思付いて、

「ねえ、私達の那れも記念ですわ。」

「然う、我々の戀も過去の最う記念になつたのだ！」と又思つた。

「ねえ、燈臺は豈か、那時と變りは無いでせう。」

「變りは無いが……然し、那時でも那麼に風が有つたのだから、此節のやうな此風ぢや、燈臺へ行くまでが大變でせう。」

「然うねえ。」と眉を顰めて、今更らしく風の音に聞耳立てたが、「何うして又、恁う能く吹くんでせう？」

「海濱ですから——太平洋を前に控へて、背後は全で平原ですもの。」

「でも、那時には這麼ぢや無かつたわ。」

「そりや春だから、那時と同一になるものですか。最う貴方、秋も可也深い！」と欽哉は頭を掉つた。

昨日まで同じ宿に滯在して居た畫家の一人に此前獨りで來た時の海の色を又無いものゝやう

に說いては、連の寫生を一々貶して、自身には終に一枚も滿足に描かずに歸つたのがあつた。丁度其の繪師と同じで、自分達も今更過去つた春をのみ追懷して居ても追付かぬ。秋ならば秋の氣になつて、其の秋の色で滿足に描かるゝものを描かう、春ばかりが繪では無いと、欽哉は然う考へた。

で、「風は爲方が無いにしても、恁う何うも、毎日々々鬱つて居ては鬱陶しくて成らない。季節を考へないで來たのは、迂濶でしたな。」

「全くね。始終最う恁うなんでせうか？」

「是から冬へ懸けて、未だ〳〵海は荒くなるし、始終最う恁うださうで。何うです？　何時まで居ても此通り不愉快な天氣ばかりで、一向氣保養にも成らないぢや有りませんか？」

「えゝ。」と繁は頷いたが、小い溜息を吁いて、

「ですが、何も氣保養ばかりで來たのぢや有りませんから——貴方の體の療養が主なんですから……」

「這麼天氣なら、東京に居たつて同じ事です。恁うして無意味に滯在して居て、充らなく金を使ふのは惜いやうで。」

「寧そ其のお貨で、家でも持ちませうか……」と男の顏を見る。

「其の方が策の得たものぢや無いでせうか？家でも持つて左に右く家庭を作つたら、其間に又別種の情味も湧かうと思ふのですが……」

「然うねえ……」

九

松林を出放れて、宿から送つて來た女中達の御機嫌好うを背後に、二臺の俥は鈍々と田圃道

へ懸つた。此節の日和癖で、午前内は能く風いで居るが、それでも野へ出ると、冷たい風が戰戰顔に當つて、此邊は一面刈田の濁水が微寒さうに小波を織つてゐる。トク〳〵と寂しい落し水の音が爲て、ニョッポリ立つた畔の藁塚の上に鴉が一羽、俥の通るのを眺めて小首を傾げた。天は相變らず雲つて居て、野末を低く霧が棚引いたが、薄日を透して清爽な秋の氣が身も引緊るやうな。

道端の草は半ば枯れたり紅葉したり、晝も露に濡れて、俥の轅にハラ〳〵細かい實が零れる。所々黄ろい星を撒いたやうに野菊の花が咲き亂れて、繩手や塚の周圍や、那邊這邊尾花が白く風に戦いで、何處かで鶏の聲が聞える。梁の崩や案山子の古笠に堰かれて、上田の水の浸々溢れた小川を渡ると、其所から畠續きになつて、道も稍廣く、俥も餘り揺れなくなつた。

それまでは人子一人逢はなかつたが、少し行く内に、尻尾のキリ、と巻いた日本種の犬を見て、畑には最う種蒔を爲て居る百姓もある。豆を引いた後の穀焚く煙が淡く野に靡いて、畠と云ふ畠は何れも收穫の濟んだ土ばかり黒い間に偶ま擒菜の青いのも希しい。道端の榎に差掛けた茶店らしい掘立小家は、屋根一面の落葉を葺いて、雨に浸染んだ賣藥の貼札のみ目に付く。と、行手に籠り一族の木立が見えて、雲間を洩るゝ日射に明るく黄ばんだ高い梢へ、パッと渡鳥が群り下りた——漸う銚子の町も近づいたのである。

駈けるに邪魔の無い野道は緩々ねつて來て、町が見え出すと、急に車夫の足は早くなつた。町の入口の古い同じやうな社を左右に見て、爰の名高い觀音の前も過ぎ、鹽辛や梅醤の看板の那箇這箇に下がつた狹い町を眞直に行つて、唯ある辻を左へ曲らうと爲る出合頭に、あはや突當らうと爲た一臺の俥。

「おゝ！　君は……こら、些と待て！」

向ふの客が自分の車夫を留めると、這箇の車夫も一緒に留つた。

「君は、關君ぢや無いですか？」

「はあ、僕關ですが……」

「何うも暫く！」と旅行用の鳥打帽子を取つて、和りしながら、「お忘れですか？　僕は北小路です！」

「やあ、これは！」とばかり、欽哉は眞赤になつて中折帽を脱ぐ。

「何うも意外な所でお目に懸つた！　那邊へ？」

「是から東京へ歸るので。貴方は？」

「僕は今汽車で著いたばかりだが……怎うと……君は急ぐのですか？」

「えゝ……可成なら、此の汽車に間に合ふやうにと思ひまして……」

北小路はポケットから紐無しの銀時計を出して見て、最う然し、東京行のは五分しか無い。

「何うです？　出來るなら一列車延しては。何時又會はれるか知れないのに、此儘別れて了ふのも殘念だから……ねえ君、何とか差繰つて延し給へな。」

「然うですね……」と素切らぬ返事を爲て居る。

旅先や知らない土地で知人に逢ふと云ふ事は妙に可懷しいものである。況て學生時代の一番思出多い其の頃の親友に何年振で逢つたのだから、欽哉も可懷しさは可懷しい。けれど、女連は有るし、それに恥多い失意の身も顧みられて

躊躇したのであるが、北小路は最う伸も降りて了つて、是非にと勸めるので、終に其辭に隨つた。

繁は三間ばかりも遲れて後の俥に乘つて居たが、向ふの俥が留ると直ぐ、車上の人を其れと見て取つたので、ハッと思つて、濃いオリイブの蝙蝠傘に深く面を掩つて居た。が、欽哉が降りたのに自分ばかり俥に乘つても居られず、車夫に膝掛を取らせると、紺の浮織のスプリング仕立の吾妻コートの裾から、變格子の一つ小袖。勝色裏が繇つて、長襦袢の赤い袍が零れて、白足袋に襦珍の鼻緒の吾妻草履を穿いた足首白く地に降り立つたが、黑の穴絲編の手提を持更へ傘を窄めて、目映しさうに北小路に會釋する。

是まで香浦の家へ北小路が來ても、可成面を合せぬやうに避けて居たのが、緣無くも恁うして男と連立つて居る所へ出遭つて、繁は顏も擧らぬほど極りの悪い思であつた。然し北小路の方でも氣を利かして、故と這箇へは注意せぬやうに爲て居てくれるので、内々嬉しく思つた。

立話も出來ぬから、何故か近所に洋食店でも無からうかと北小路が車夫に問くと、河岸通に一軒有るから御案内爲べいとの事に、左も右くも其所へと話が決つた。で、繁はお腹が可いと云ふのを口實に同席を避けて、飯沼の觀音から妙福寺、川口には今日鯨の陸揚があると云ふので、乘つて來た車夫が案内して、二人の會談中銚子の町を見物して來る事に爲た。

洋食店と云ふのは河岸に臨んだ見曠しの二階で、前に大利根を隔てゝ向ふは常陸の沿岸、其の突先の波崎の岬から銚子の女夫岬へ懸けて、横に白銀の蜈蚣の匐狂ふやうな川口の汐騷。七

十里の急流を落し來る阪東太郎は、其所に太平洋の荒波と打突つて、汐と水とが物凄じく相激するのである。

日本風の座敷に花蓆を敷いて、それでも白布の被つたテイブルに小布團の乘つた椅子、色硝子のフラスコに白南天が挿してある。牛肉無しの西洋料理で、種は鷄肉一式、一二品命じては見たがフォークも取らず、別に鰯の油漬の有つたのを幸ひ、其れを下物に二人はビイルを酌んだ。

給仕の女に少しばかりの祝儀を遣つて其場を去らせ、自分でビイル罎を取揚げた北小路は、改めて、「さあ關君、一つ注ぎませう。」

「は、まあ何うか。」と欽哉は手でコップを掩つて、「以前のやうには僕も遣りませんから。」

「何う爲て？」

「少し何うも、健康を害して居ますから。」

「それは可けない。」と濃い眉を寄せて、「然う云へば顏色も好くないやうだ。何所が悪いのです？」

「何所と、特に言ふほどの何でもありませんが……」と辭を濁して、「貴方は然し、御壯健のやうで結構ですな。」

「有難う、以前と比べたら、幾らか是でも壯健になつた方で、第一此の、酒が飲めるやうになつたのが不思議でせう？」と微笑する。

「全くですな、曩から僕も然う思つて拜見してるのですが……那麼に一滴も行けなかつた貴方が、能く何うも……何時からお始めです？」

「つい去年あたりから……」

「其れにしては長足の進歩ですな。」と欽哉も微笑して、「では、僕が一つお酌させて戴きませ

うか。」

「いや、然う觀面に來られては閉口で。實は何有、飲むと云つても精々ビイルの小罎が一本、其上過すと苦しくなる方だから、未だ〳〵修業は足りない。」と然う言ひながらも、曇から握つて居た罎を取直し、先づ自分のコップに注いで

「酒は然し、氣持のものだと言ふが事實ですね。久振で君に會つて、つい僕も嬉しいものだから……さあ、君も。」と欽哉のにも注足す。

其れは決してお世辭では無いので、昔と變らぬ鐵鐵緣の眼鏡の下から可懷しげに輝く北小路の目は、欽哉の胸に和い光が沁み入るやうで輕いビイルの醉と共に、心の隔も自ら解け行くのである。それに、風采や態度が極めて素樸で、茶の黑ぽい霜降格子の背廣に、カラもカフスも護謨、黑の琥珀の角廳の爲たネクタイを申譯に取附けて、外には身の飾らしい物も無く、旅行中の輕裝とは云ひながら、是が子爵家の殿樣とは何うしても受取ぬ。新大島の著物に秩父銘撰の羽織で欽哉が竝んでも、一向肩身が狹くないので――這麼事でも失意の人には大な心安さである。「這箇へは何か御用事でもあつて？それともお遊ですか？」と訊ねた欽哉の調子は前よりも碎けた。

「いや、少し調べる事があつて――小資本主と勞働者の關係……と云つても漠然な問題だが、究り地方の古い釀造家なぞには、勞働者が代々主從的の關係になつて居る、其れを少し調べたいと思つて、最う大分前から此の近邊を廻つて居るのです。醬油の出る野田――知つて居ませう？――那所から今日は來たので、明日は利根川を上つて茨城へ入らうと思ふが、其の都合で

ズツと東北の方へ廻るかも知れない。今日若し遭はなかつたら、暫く又君にも會へなかつたらうに……何しろ奇遇だ！」と喜ばしげに一口飲んだが、氣が付くと、對手はコップも餘所に考込んで居るので、「僕の事は左に右く、君は又、這麼所へ何うして來たのかね？　夏でも無いのに。」と北小路は怪んだ。

「體が惡いものですから、轉地を勸められて……」と漸う面を擡げた欽哉は、太い溜息を吁いて、「貴方の事を伺ふ、僕なんか只唯恥入るばかりです！」

何を言出すのかと、北小路は怪訝さうに其顏を眺める。

「聞けば貴方は、大學の方も優等で出なすつたとか。然ういふ立派な學歷は有るし、門地と云ひ何と云ひ、甚麼榮達でも望んで得られるお體だ！　それだのに、お見受けする所、失禮だが地方の小官吏……か、まあ測量技師とでも云つたやうな質素な風で、研究の爲めに故々然うして旅から旅へ……大學を出なすつてから最う何年になるか知らないが、相變らず然うして研究的態度を續けてお居でになる……」

「研究的態度――それは然し、學徒の本分で爲方が無い。」

「無論本分ではありませう。けれど、世中に自分の本分を正當に盡してる者が幾人有るでせう？　僕なんか、人としての本分さへ盡しちや居ませんですもの。」

「人としての本分、と言ふと？」

「究り人間の本分です！」と同じ事を言つて、

「貴方なんか然うして學問の爲めに貢獻して、學者の本分も盡してお居でになるが、僕なんか

社會から云つても箇人としても、是まで殆ど無意義に送つて來たので、全で生活と云ふものが無いのですからな……」

强ちビイルの所爲ばかりでは無く、欽哉の頰は赤く熱して、辭の調子も激して居る。

北小路は血色の好い顏に毒の無い笑を浮べながら、テエブルに片臂突いて、「だが關君、君は然う言ふが、では、戀愛は生活で無いのかね？」

「え、何がです？」

「戀愛さ——戀愛は決して無意義では有るまい？」

と、聞くと、欽哉の赤い顏は更にパッと眞赤になつた。照れ隱しに飲半しのビイルをグッと呷つて、口端を拭ひながら、「誰ひなすつちや困る。」

「いや、誰ふのでは無い！」と抑へるやうに言つて、體を起して椅子の凭掛へ靠れると、兩手をヅボンの衣兜へ突込んで、「誰ふなぞと、那樣人の惡い事は爲ない、僕は眞面目に言ふので。成程社會から言つたら、君の是までは無意義かも知れないが、箇人として——君自身としては決して無意義では有るまい。生活が無いと言ふのも、彌張社會と相交渉する所の生活が無いと言ふ意味でせう。けれど、社會とか國家とか言つて騷ぎ廻つて居て、本人は案外空虛な人間も世間に多いが、それよりも、君は君自身として充實した生活であつたら、何も那樣に悔む所は無からうと思ふ。」

「强ひてまあ、辯護すれば、那樣ものかも知れませんが……」

「いや、決して辯護では無い。又辯護せずとも の事だ！　今だから言ふが、君の戀愛を外から

始めて聞いた時には、僕は半信半疑だつた。君は戀愛を爲る男では無い、眞面目に戀愛なんぞ出來ない男だ、戀愛を爲るべく餘りに利口だと言つて評した事があるが、それは然し、君の過去に由つて臆測したのだから……其君が終に戀愛の犧牲になつた。何ういふ動機か、其間の消息は僕も多少聞かんでも無いが、詳しい事は知らない。けれど、動機の如何に拘らず、左に右く人間洞奥の誠に觸れたと云ふ事は察せられるので、戀愛の力が然う爲たのか、それとも君の性格の一變か、何ちにしても君の戀愛は君の本性の眞を啓く鍵たつた、君は其爲めに恐く人格の洗禮を受けたに違無い。成程世間の信用とか、地位とか、乃至從來の希望とか、一時はそれは失はれたらうけれど、未だ〳〵君は前途も永いし、是から努力すれば新に得るのは造作も無い。からして、僕に言はすれば、君が從來の那の態度で那のまゝ順境を進んだよりは、寧ろ、より多くの同情と期待とを以て、洗禮された君、復活した君が今後の眞面目な發展が見たいのだ！」

「何うも、然う意味深く解釋されると……」と欽哉は額を撫でて、「一時の唯無分別で……恁うなつても彌張是といふ分別は無いのですから、今後の發展とか何とか、那樣……」と言半して、弗と口を噤んで了ふ。

自分を勵ます爲めの親切かも知れぬが、今後の發展が何うの、期待が何たのと、大袈裟に口で言ふほど北小路が心で思つて居るとは信じられぬ。其の口先に乘つて、何も自分の意氣地無い事を打明けるでも無いと、然う思つて欽哉は口を噤んだので、其儘厭を顏を爲て默つて居る。

北小路は其れとも氣付かず、「一時の無分別と言ふが、戀は無論無分別さ。君には其の分別が――冷たい分別が手傳ふだらうと思つたのだが無分別となり得たから羨しい。僕なんかも一度は無分別になつて見たかつた……全く！　笑談では無いので。何うか爲ると――恁う酒にでも醉つて獨りで考へて居る時なぞ、何と無く戀しいやうな、唆かされるやうな――這麼時に心中でも爲てくれと言ふ女があつたら、見ず知らずの者とでも一緒に死かねないやうな氣が爲る事がある。那樣時に偶と自分を顧みると、何時か最う青春は過去つて居る！　何とも言へぬ落莫な感が爲て、悔恨……と云ふほどでも無いが、輕い一種の哀愁を覺える。（コップに手を驚けて）所が、其の哀愁を味ふのが又樂みなので、僕が實は酒を飲習つたのも、折々然ういふ哀愁に醉つて見たいからで……」とコップの中を見入つて、暫く辭を切つた。

恁ういふ事を北小路から眞面目に聞かうとは思はなかつたので、今度は欽哉の方が怪訝さうに其顏を見守る。

「えゝと……那れは何とか言つたつけね？　高等學校の寄宿舍時代に君等が好んで唱つた……然う〳〵、

老去風光不屬身
黃金莫惜買青春
白頭縱作花園主
醉折花枝是別人

那の詩が今になつて僕も身に抓されるやうだ。尤も、黃金で買ふとか、醉うて花枝を折るとか、然ういふ事は我々生れながら緣の無い方だが、唯老去つて風光身に屬せずの感は深い！

愁つか意志の薄固を誇にして居た爲めに、同じ學生々活でも、僕は殊に乾燥無味な生活を送つたので。若い血の多い盛を、戀もせねば遊も知らず、三十になるまで杯一つ手にした事が無い。坊主でさへ酒くらゐは飲む、だのに、僕は汁粉と胃散で青春を過して了つた――青春の思出が梅月の汁粉では、如何に何でも、多少の憾無き譯には行かないでは無いか。」と笑談らしく言つて、苦笑を爲る。

強ち過去の憾ばかりで言ふとは思はれぬ、心に何か飽足らぬものがあつて、內々新しい戀を思ふのでは有るまいかと疑はれるので、躊躇しに欽哉は、「其代りに貴方は、青年時代の憾を壯年の今日充分に埋合せてお居でゝせう。家庭の愛は恆久的で、其れに越した實質のある幸福は無いでせう。」

「家庭は家庭――其れは別問題さ。」と首を掉つたが、「まあ舍さう！　君に這麼事を聞かせた所で始まらないから、僕は青春を空しく葬つたのだし、君は……」と微笑んで、「言はゞ青春に葬られたのだし、消極と積極とで、到底も一致しさうな筈が無い。」

「全くです！　葬つたと葬られたとは大變な相違で、其の結果は今日の貴方と僕……」と言懸けて、欽哉の顏は曇つて伏目になつたが、旋て面を起すと、「貴方は、青春を空しく葬つたと言つて侮みなさるが、それは然し解釋の爲やうで僕こそ浮々青年時代を空費して了つたのです！　貴方は過去を顧みて哀愁は感じても、其の哀愁を味つて樂まれるのだが、僕の既往は何所迄でも唯痛切な悔恨です！　這麼事を貴方の前で口にするのも恥ぢますが、何うせ最う御承知の事